

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ)

榎田下遺跡

(第2分冊)

1989.3

鹿児島県教育委員会

例 言

- 1 この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査の「榎田下遺跡」の調査報告書である。
- 2 この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)の第2分冊「榎田下遺跡」である。
- 4 榎田下遺跡は、鹿屋市大浦町(旧字名榎田下)に所在する。
- 5 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
- 6 発掘調査は、昭和61年5月7日～6月22日の間に実施した。調査は、確認調査に引き続き本調査を実施した。整理作業は、昭和62年度と昭和63年度に実施した。
- 7 発掘調査において、鹿屋市教育委員会や大浦町振興会の協力・援助を得た。
- 8 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 9 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者で行った。本書の執筆は、主として新東がこれにあたり、一部を上田耕(第Ⅱ章第3節石器Ⅰ・Ⅱ)と梅北浩一(第Ⅱ章3節の石器Ⅲ)中村和美(第Ⅰ章第3節石器Ⅳ～Ⅷ)が担当した。
- 10 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東が担当した。

本文目次

第 I 章 榎田下遺跡の調査	1
第 1 節 発掘調査の概要	1
第 2 節 遺跡の層位	3
第 II 章 縄文時代の調査	7
第 1 節 調査の概要	7
第 2 節 X 層の調査	8
第 3 節 VI 層の調査	9
1 遺構	9
1 集石 1 号	9
2 集石 2 号	11
3 集石 3 号	11
4 集石 4 号	12
5 集石 5 号	13
6 集石 6 号	13
2 出土遺物	17
1 出土遺物の概要	17
2 土器	17
3 石器	61
4 加工品	94
第 III 章 発掘調査のまとめ	96

挿 図 目 次

第1図	榎田下遺跡の地形図とグリッド配置図	2
第2図	榎田下遺跡の層位と基本的層位	3
第3図	榎田下遺跡断面実測図	5~6
第4図	地層横転図 (B 5~6区)	7
第5図	I類土器実測図	8
第6図	I類土器出土分布図	8
第7図	集石遺構配置図	10
第8図	集石1号実測図	11
第9図	集石2号実測図	12
第10図	集石3号実測図	12
第11図	集石4号実測図	13
第12図	集石5号実測図	14
第13図	集石6号実測図	14
第14図	集石遺構の石塊の最大長と重量比	15
第15図	集石遺構出土遺物	16
第16図	実験集石の石塊の最大長と重量比	16
第17図	榎田下遺跡遺物出土分布図	18
第18図	榎田下遺跡土器出土分布図	19
第19図	II類土器出土分布図	20
第20図	II類土器実測図 (1)	21
第21図	II類土器実測図 (2)	22
第22図	III類土器出土分布図	23
第23図	III類土器同個体 (31・32) 出土分布図	24
第24図	III類土器実測図 (1)	25
第25図	III類土器実測図 (2)	26
第26図	III類土器実測図 (3)	27
第27図	III類土器実測図 (4)	28
第28図	III類土器実測図 (5)	29
第29図	IV類土器出土分布図	31
第30図	IV類土器実測図 (1)	32
第31図	IV類土器実測図 (2)	33
第32図	V類土器実測図	33
第33図	VI類土器出土分布図	35

第34図	Ⅵ類土器同個体 (104~106) 出土分布図	36
第35図	Ⅵ類土器同個体 (125) 出土分布図	36
第36図	Ⅵ類土器実測図 (1)	37
第37図	Ⅵ類土器実測図 (2)	38
第38図	Ⅵ類土器実測図 (3)	39
第39図	Ⅵ類土器実測図 (4)	40
第40図	Ⅵ類土器実測図 (5)	41
第41図	Ⅵ類土器実測図 (6)	42
第42図	Ⅶ類土器出土分布図	45
第43図	Ⅶ類土器同個体 (139~148) 出土分布図	46
第44図	Ⅶ類土器実測図 (1)	47
第45図	Ⅶ類土器実測図 (2)	48
第46図	Ⅶ類土器実測図 (3)	49
第47図	Ⅷ類土器出土分布図	50
第48図	Ⅷ類土器実測図 (1)	51
第49図	Ⅷ類土器実測図 (2)	52
第50図	Ⅸ類土器出土分布図	53
第51図	Ⅸ類土器実測図 (1)	54
第52図	Ⅸ類土器実測図 (2)	55
第53図	石器出土分布図	62
第54図	黒耀石出土分布図	63
第55図	石器Ⅰ (石鏃) 出土分布図	64
第56図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (1)	67
第57図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (2)	68
第58図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (3)	69
第59図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (4)	70
第60図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (5)	71
第61図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (6)	72
第62図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (7)	73
第63図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (8)	74
第64図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (9)	75
第65図	石器Ⅰ (石鏃) 実測図 (10)	76
第66図	石器Ⅱ (石鏃) 実測図 (11)	77
第67図	石器Ⅱ (石鏃) 実測図 (12)	78
第68図	石器Ⅱ (石鏃) 実測図 (13)	79

第69図	石器Ⅲ～Ⅷ出土分布図	84
第70図	石器Ⅲ（石斧）実測図	85
第71図	磨石・敲石・凹石の長/幅と厚/幅の相関図	86
第72図	石器Ⅳ実測図	91
第73図	石器Ⅳ～Ⅶ実測図	92
第74図	石器Ⅷ実測図	93
第75図	加工品Ⅰ（土製）実測図	94
第76図	加工品Ⅱ（土製）実測図	95
第77図	加工品Ⅲ（石製）実測図	95

表 目 次

第1表	出土遺物一覧表（1）	56
第2表	出土遺物一覧表（2）	57
第3表	出土遺物一覧表（3）	58
第4表	出土遺物一覧表（4）	59
第5表	出土遺物一覧表（5）	60
第6表	石器Ⅰ（石鏃）一覧表（1）	79
第7表	石器Ⅰ（石鏃）一覧表（2）	80
第8表	石器Ⅰ（石鏃）一覧表（3）	81
第9表	石器Ⅰ（石鏃）一覧表（4）	82
第10表	石器Ⅰ・Ⅱ遺物一覧表	83
第11表	石器Ⅲ（石斧）一覧表	85
第12表	磨石等の計測一覧表	89
第13表	磨石等の形態による分類	90

図 版 目 次

図版 1	1. 遺跡遠景（東から）	101
	2. 発掘調査風景（西から）	101
図版 2	1. 集石 5 号検出状況	102
	2. 集石 1 号検出状況	102
	3. 集石 6 号検出状況	102
	4. 集石 4 号検出状況	102
図版 3	1. 層位断面	103

	2. 層位断面崩壊状況	103
	3. 地層横転	103
	4. 石製加工品出土状況	103
図版 4	1. I類土器 (1~3)・II類土器 (8~18)	104
	2. II類土器 (19~30)	104
図版 5	1. III類土器 (31~35)	105
	2. III類土器 (36~57)	105
図版 6	1. III類土器 (58~71)	106
	2. IV類土器 (72~96)	106
図版 7	1. VI類土器 (99~106)	107
	2. VI類土器 (107~124)	107
図版 8	1. VI類土器 (125)	108
	2. VII類土器 (128~138)	108
図版 9	1. VII類土器 (139~148)	109
	2. VIII類土器 (149~162)	109
図版10	1. IX類土器 (163~171)	110
	2. IX類土器 (172~179)	110
図版11	1. 石器 I (石鏃180~214)	111
	2. 石器 I (石鏃215~249)	111
図版12	1. 石器 I (石鏃250~284)	112
	2. 石器 I (石鏃285~319)	112
図版13	1. 石器 I (石鏃320~354)	113
	2. 石器 I (石鏃355~386)	113
図版14	1. 石器 III (石斧387~389)	114
	2. 石器 VIII (石皿413~418)	114
図版15	1. 石器 IV~VI (磨石等390~412)	115
図版16	1. V類土器 (97・98)	116
	2. 加工品 II (425~426)	116
	3. 加工品 I (419~424)	116
	4. 加工品 III (427)	116

第 I 章 榎田下遺跡の調査

第 1 節 発掘調査の概要

1 調査の経緯

榎田下遺跡は、中ノ原台地の東端の小丘上に立地している。発見の契機は、遺跡地が生産芝生畑と竹藪のため昭和59年の分布調査では遺跡は確認されず、昭和60年4月の確認調査の段階で発見された。確認調査中、生産芝剥取り作業が行われた際、土器片の散布を確認したものである。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、昭和61年度に確認調査を実施することになった。しかし、遺跡の発見が遅れたことと橋梁部分の工事発注が早かったことによって台地先端の遺跡の一部は破壊された。

2 発掘調査の経過

榎田下遺跡の発掘調査は、昭和61年5月7日から6月22日の間に実施した。発掘調査は、まず、遺跡の有無及び範囲確認の調査を実施した。工事用センター杭No 334 とNo 335 を基準に10m×10mのグリッド網を調査対象区域に被せた。そして、グリッドは東端から1～10区と南からA～C区として、各グリッドはA1区、——A10区、B1区、——B5区などと呼称することにした。

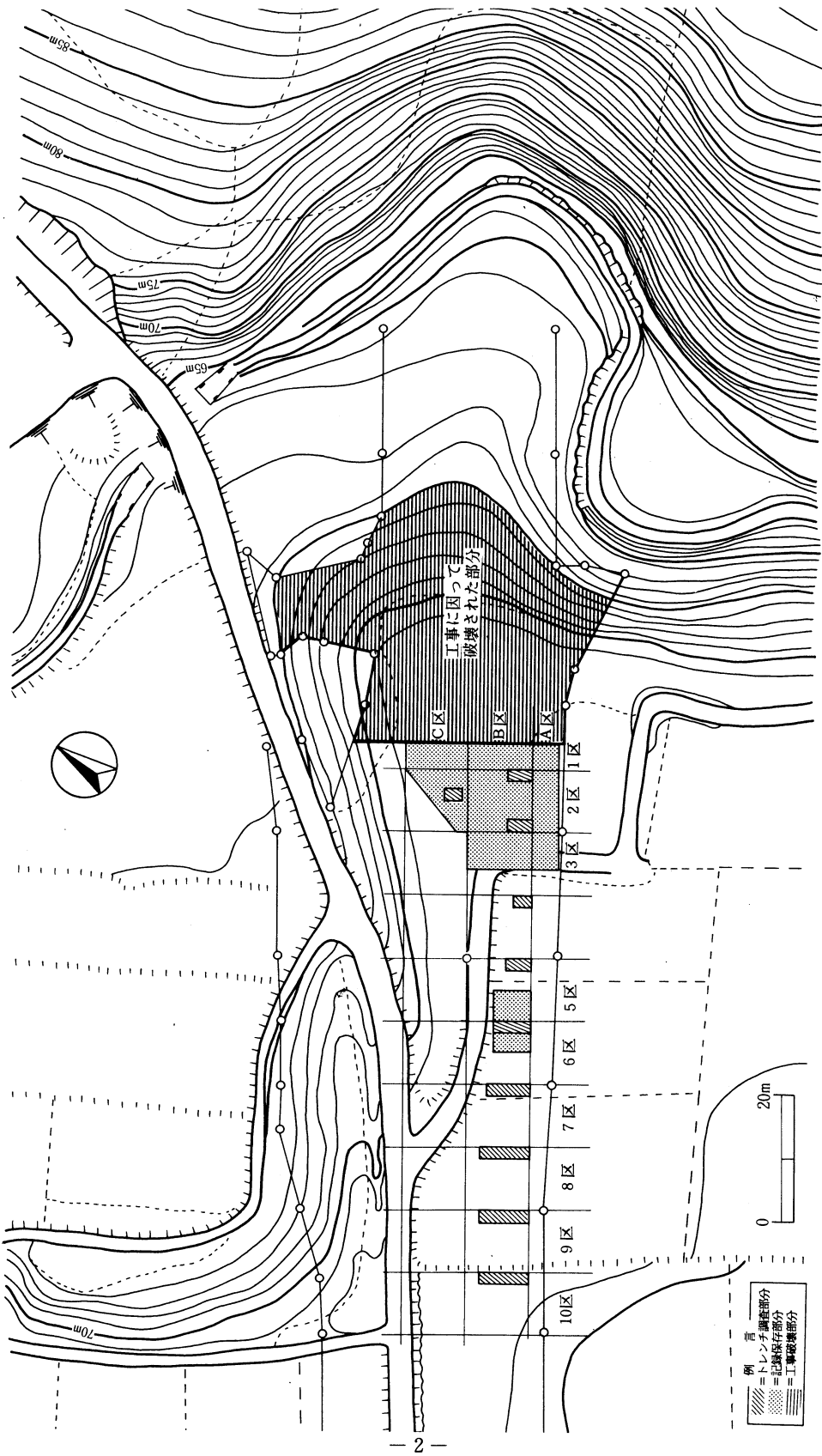
確認調査は、B区列に10m毎に幅2m×長さ2m～8mのトレンチ10本を設定した。

確認調査の結果、A～C1～3区に縄文時代後期包含層を確認した。また、B5区とB6区にかけては、土器細片と地層横転が検出された。そのためこの部分を、全面調査することになった。

3 発掘調査の成果

A～C1～3区では、VI層の黄褐色土層に二時期の包含層が存在する。比較的上層は縄文時代後期が、下層は前期の時期である。遺構は包含層下面に集石遺構が6基検出された。A～C1、2区の台地先端に位置する部分である。遺物の出土状態やこれまでの傾向から前期に属することが想定される。出土遺物は、土器・石器と加工品に分かれる。しかし、層位的には遺物の区分は、不明瞭であった。土器は、形態上後期に該当する一群と前期の一群がある。後期に属する土器は、凹線文系の指宿式土器系統の一群4類と口縁屈曲系の市来式土器系統の一群がある。前期の土器は、隆帯貼付文系・条痕文系の轟式土器系統や沈線文系の曾畑式土器系統の一群が含まれる。石器は、200本を数える石鏃をはじめ石斧・磨石・敲石・石弾・凹石・石皿などが出土した。しかし、石器は、属する時期区分は層位的・形態的にも不明瞭である。

X層では、B2区のわずかな範囲に土器片が出土している。土器は細片でであるが、形態上早期土器の特徴を備えているものである。破壊された部分や用地外に縄文時代早期の遺跡が存在する可能性がある。



第1図 榎田下遺跡の地形図とグリッド配置図

第2節 榎田下遺跡の層位

榎田下遺跡の層位は、他の遺跡に比べると大きな変化がみられる。先に記載（概要編・第Ⅲ章第1節）した大浦・郷之原地区の基本的層序から欠落した層が多い。これは、遺跡が台地の先端に立地していることにもよる。ここでは、榎田下遺跡の最も安定したと考えられるB2区付近の層位と基本的層序を比較しながら、榎田下遺跡の層位的特徴を説明する。

挿図の第2図は、榎田下遺跡の層位断面図である。4区～10区は、確認調査によって遺跡が確認されなかったので確認トレンチの断面図を提示した。これを見ると、4区から10区につれてⅧ層のアカホヤ火山灰層が耕作土直下まで削平されている。榎田下遺跡の層位は、Ⅹ層以下に特徴がみられる。以下、順次基本的層序と比較して榎田下遺跡の層位を説明する。

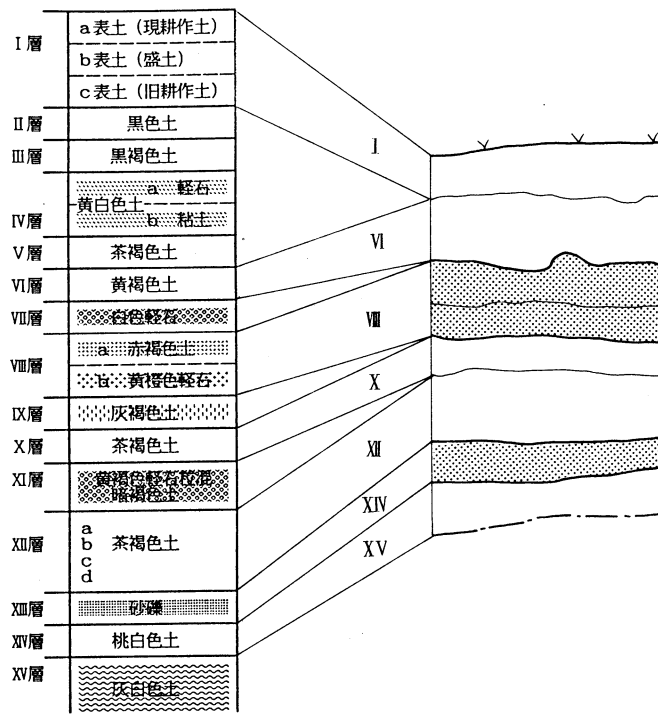
Ⅰ層は、耕作土であるが、20cm～25cm程度と全般的に薄い。そして下層にはⅥ層が位置している。つまりⅡ層からⅤ層までは、榎田下遺跡では削平され欠落して状態である。

Ⅵ層は、暗茶褐色土層で縄文時代前期から後期の遺物包含層である。他の遺跡では、アカホヤ火山灰層の二次堆積層のため黄褐色土層を呈するが、榎田下遺跡のⅥ層は腐植土化が強く暗茶褐色土層となっている。

Ⅶ層は、白黄色の軽石でⅥ層とⅧ層の境にわずかに確認される。池田降下軽石であり、部分的に浮遊して確認されほとんど層形成はみられない。

Ⅷ層は、アカホヤ火山灰層に相当する。台地先端の1区に向かうに従って、このアカホヤ火山灰層はブロック状に止切れる傾向がみられる。これは台地先端での堆積状の傾向とみられる。このⅧ層は、幸屋火砕流に比定されるものである。

これまでこの幸屋火砕流下の炭化木から得られた¹⁴C測定年代値は約6,400B. P. yで、これがアカホヤ火山灰の降灰年代とされている。



第2図 榎田下遺跡の層位と基本的層位

IX層の灰褐色土層は権現山火山灰と呼ばれる火山灰層にあたり他の遺跡では確認されているが、榎田下遺跡では確認されていない。

X層は茶褐色の粘土層で縄文時代早期包含層を形成する。榎田下遺跡では、B2区を中心にわずかな範囲に若干土器が出土している。おそらくその中心は、用地外や、すでに破壊された部分に位置することが想定される。

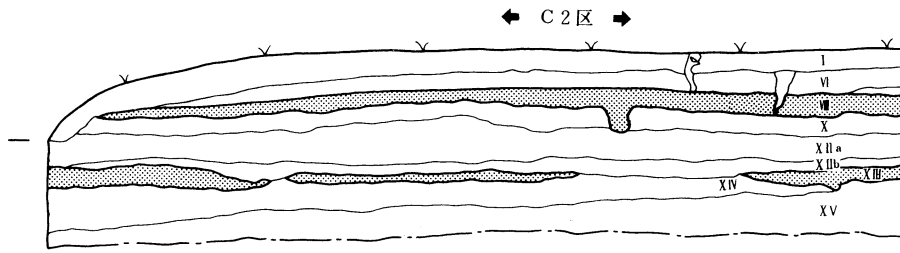
XI層は欠落している。この薩摩火山灰が欠落しているのはこの台地の特徴といえる。榎田下遺跡では、下層のXIII層の砂礫層が発達しているがXI層が欠落するのはこの関係と考えられる。

XII層は、茶褐色の粘土層で一般的には細石器文化が包含されるが本遺跡では確認されなかった。

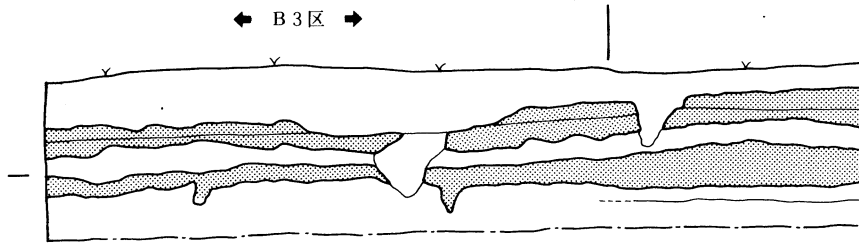
XIII層は砂礫層である。この台地では全区域に確認される。

XIV層は、桃白色土層の通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。本遺跡では部分的にXIII層と混在するところもみられる。

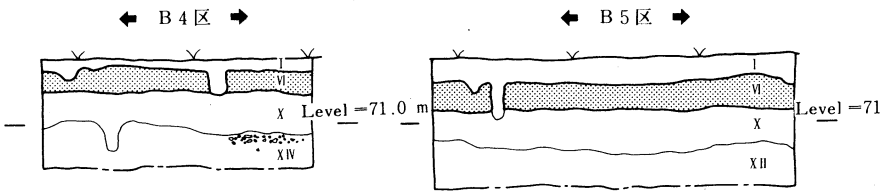
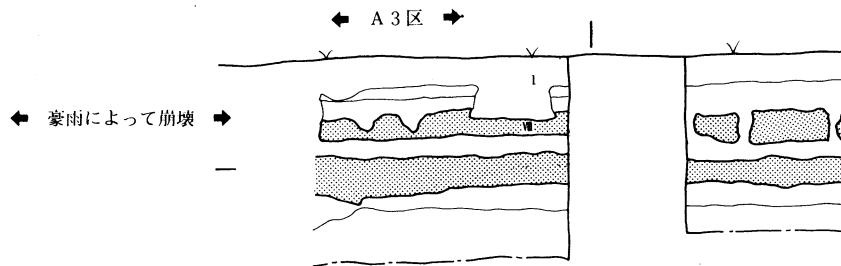
XV層は、入戸火砕流堆積物で通称シラスと呼ばれている。通常本県では数m～数十mの厚い堆積がみられる。本遺跡の基盤層となっている。



① B 2

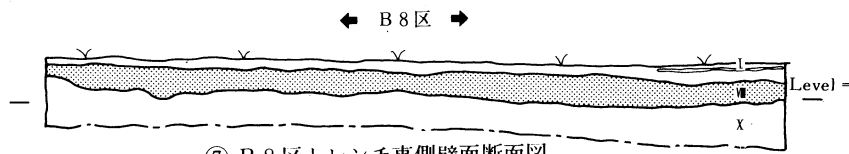


② B 1

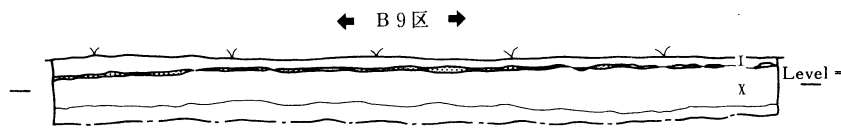


④ B 4 区トレンチ東側壁面断面図

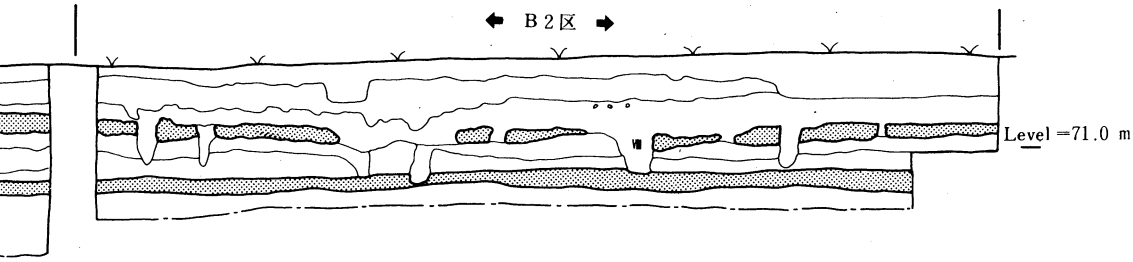
⑤ B 5 区トレンチ東側壁面断面図



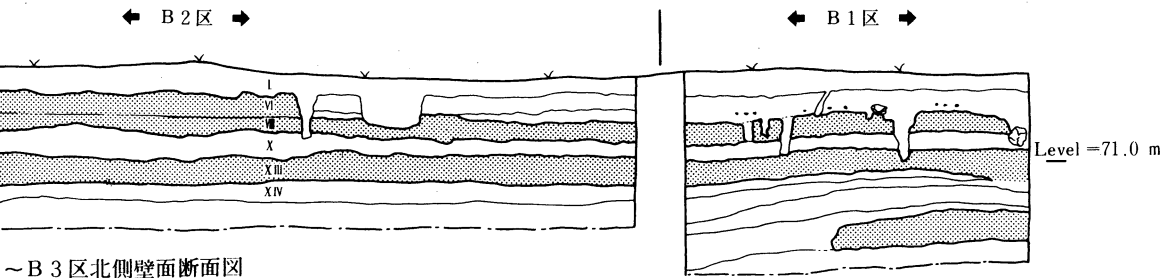
⑦ B 8 区トレンチ東側壁面断面図



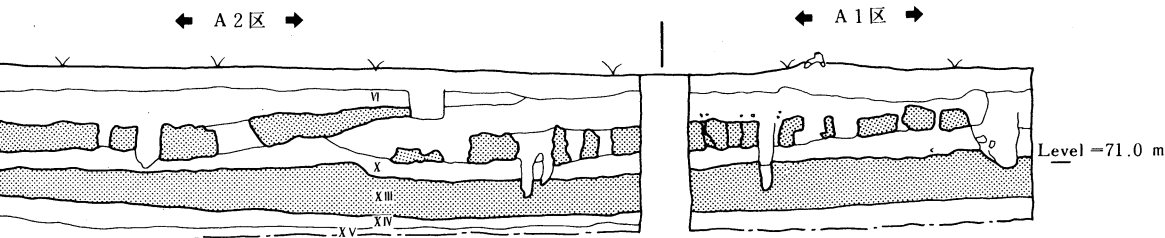
⑧ B 9 区トレンチ東側壁面断面図



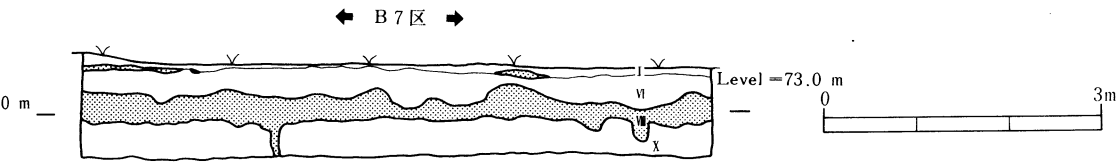
区~C2区東側壁面断面図



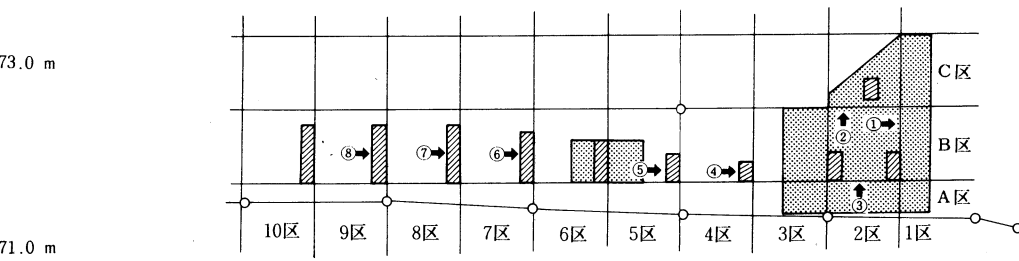
~B3区北側壁面断面図



③ A1~A3区北側壁面断面図



⑥ B7区トレンチ東側壁面断面図



榎田下遺跡 断面図作成指示図

第3図 榎田下遺跡断面実測図

第 II 章 縄文時代の調査

第 1 節 調査の概要

榎田下遺跡は、確認調査時に遺物散布が確認され、昭和61年度の発掘調査において確認調査に引き続き本調査を実施した。確認調査の時点では、すでに台地端部の橋梁工事は開始されおり、台地の一部は削平されていた。

確認調査の結果、A～B1区～A～B3区に縄文時代前期～後期の包含層が存在することが判明した。さらに、B5区～B6区には、土器細片と地層横転が発見された。

遺跡の標高は、B2区付近で最も高く71.60 mを測りなだらかな微高地を形成している。本調査の結果、A～B1区～A～B3区付近には集石遺構が6基検出され、それに伴って縄文時代前期に該当する遺物と後期の遺物が混在するかたちで出土している。特に石器Ⅰの石鏃と黒耀石片の出土は、小範囲の面積にもかかわらず多量に発見され注目された。

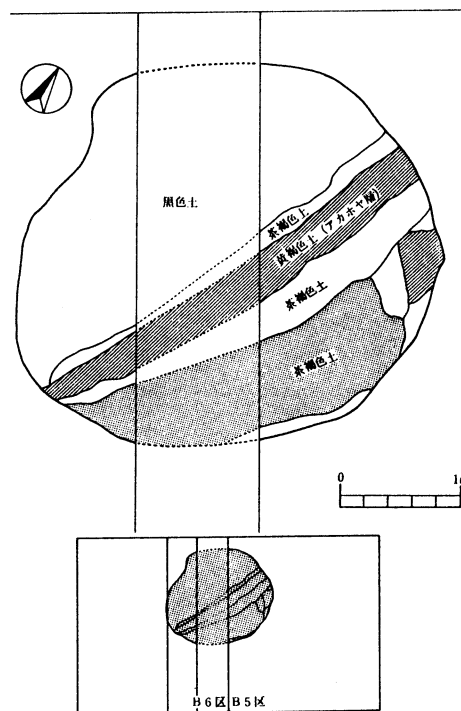
さらに、アカホヤ火山灰層(Ⅷ層)下のⅩ層においては、わずかではあるが縄文時代早期に該当する土器片が出土している。

地層横転

B5区～B6区に検出された。地層横転は、長半径3.50m×短半径3.30mのほぼ円形を呈している。地層横転は、水平な地層が円形プランの中ではほぼ90度横転した現象で、その原因はこれまで風倒木など色々考えられている。

本地層横転は、円形プランの北西部分の半分程に上層の黒色土層が埋まっている。その下部には、浮遊した状態の池田降下軽石がわずかに確認される。その下層には、15cm程の茶褐色土層が堆積している。その下は、アカホヤ火山灰層で35cm程度である。その下は、茶褐色土層でⅩ層の早期包含層に比定できる。その下は、黄茶褐色土混礫層である。

このように、本遺跡の地層がそのまま横転している状態である。なお、断面図は、写真撮影後の集中豪雨で下層の礫層の部分から円弧滑りが生じ崩壊し実測不可能であった。雨期の調査と礫層の含まれる壁面は注意が必要である。

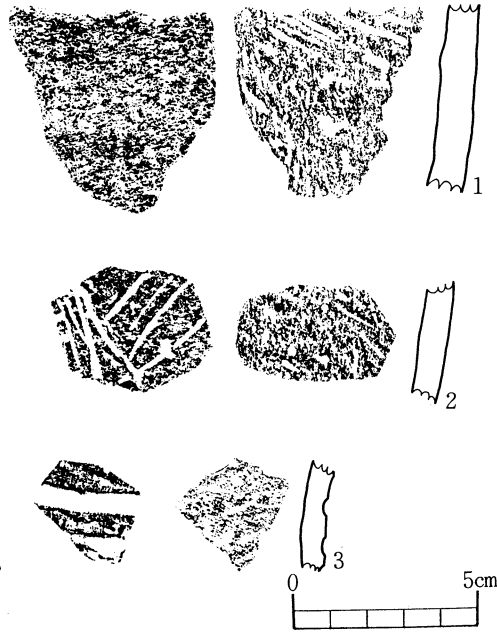


第 4 図 地層横転 (B5～6区)

第2節 X層の調査

本遺跡では、Ⅷ層のアカホヤ火山灰層の下層にはX層の茶褐色土層がみられ、他の遺跡で存在するⅨ層の灰褐色土層は確認されない。

Ⅷ層のアカホヤ火山灰層は、約30cm～50cmの安定した厚さで調査区全体を覆っているが、部分的にはブロック状に止切れるところもある。東側先端の台地（例えば中ノ丸遺跡や中原山野遺跡など）は、下層に砂礫層が存在するなど特異な層形成が確認されている。台地全体からみると比較的不安定な層形成であることが窺える。



第5図 I類土器実測図

出土遺物

X層から9点の土器が出土している。

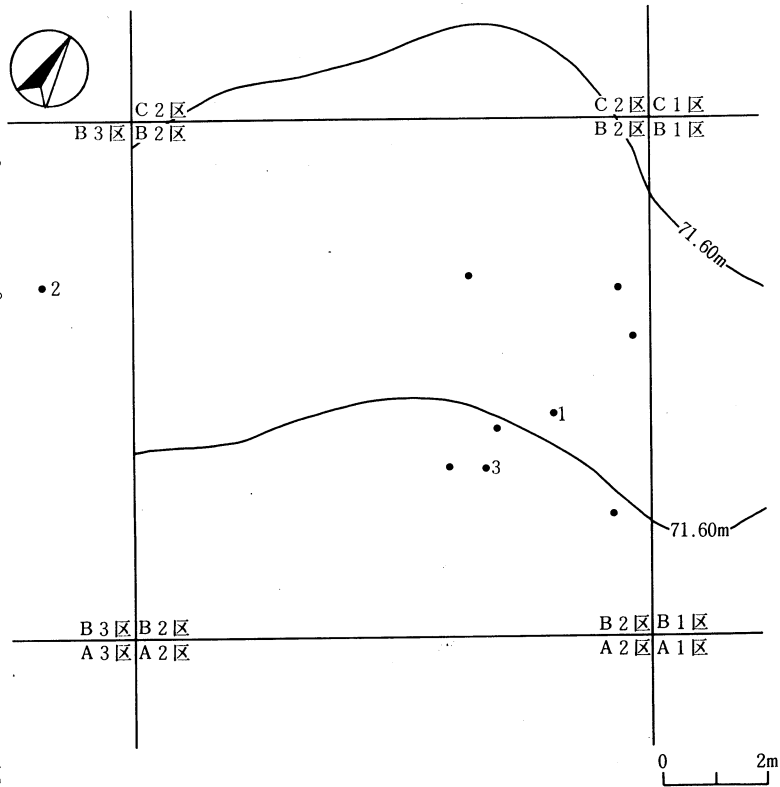
B3区に1点の他はB2区の出土である。

細片のため形態は不明であるが図化可能なものは3点である。

5は、表裏ともナデ整形で早期特有の特徴をもつ。6は、無造作な沈線がみられるもので表裏の整形の特徴から早期のものである。7は、表裏ともいねいなナ

デ整形で仕上げ、凹線文を施文するタイプである。手向山式土器に類似する。

裏ともいねいなナ



第6図 I類土器出土分布図

第3節 VI層の調査

A～B1区～A～B3区の表土直下に、縄文時代前期～後期の包含層が存在する。本遺跡では、表土は現在竹藪の根毛で形成され、その直下には黄褐色土層の遺物包含層がみられ、これは基本的層序のVI層に対比することが可能である。

確認調査の結果、B4区以西の黄褐色土層の遺物包含層は、後世の農地整備等によってほとんどが削平を受けている。A～C1区以東の台地先端は、今回の調査面積以上の平坦地が存在していたが、遺跡が橋梁工事の開始以後に発見されたため調査することができなかった。

VI層に対比される表土直下の包含層には多量の遺物が出土している。そして、出土遺物からこの包含層には、前期と後期の2時期が含まれる。また、出土遺物は、比較的上層から後期土器が出土し下層からは前期土器が出土する傾向にある。

出土遺物は、土器・石器のほか加工品がある。なかでも狭い調査範囲にもかかわらず、黒耀石片と石鏃が多量に出土しており注目されるものである。

遺構は、6基の集石遺構が検出されている。

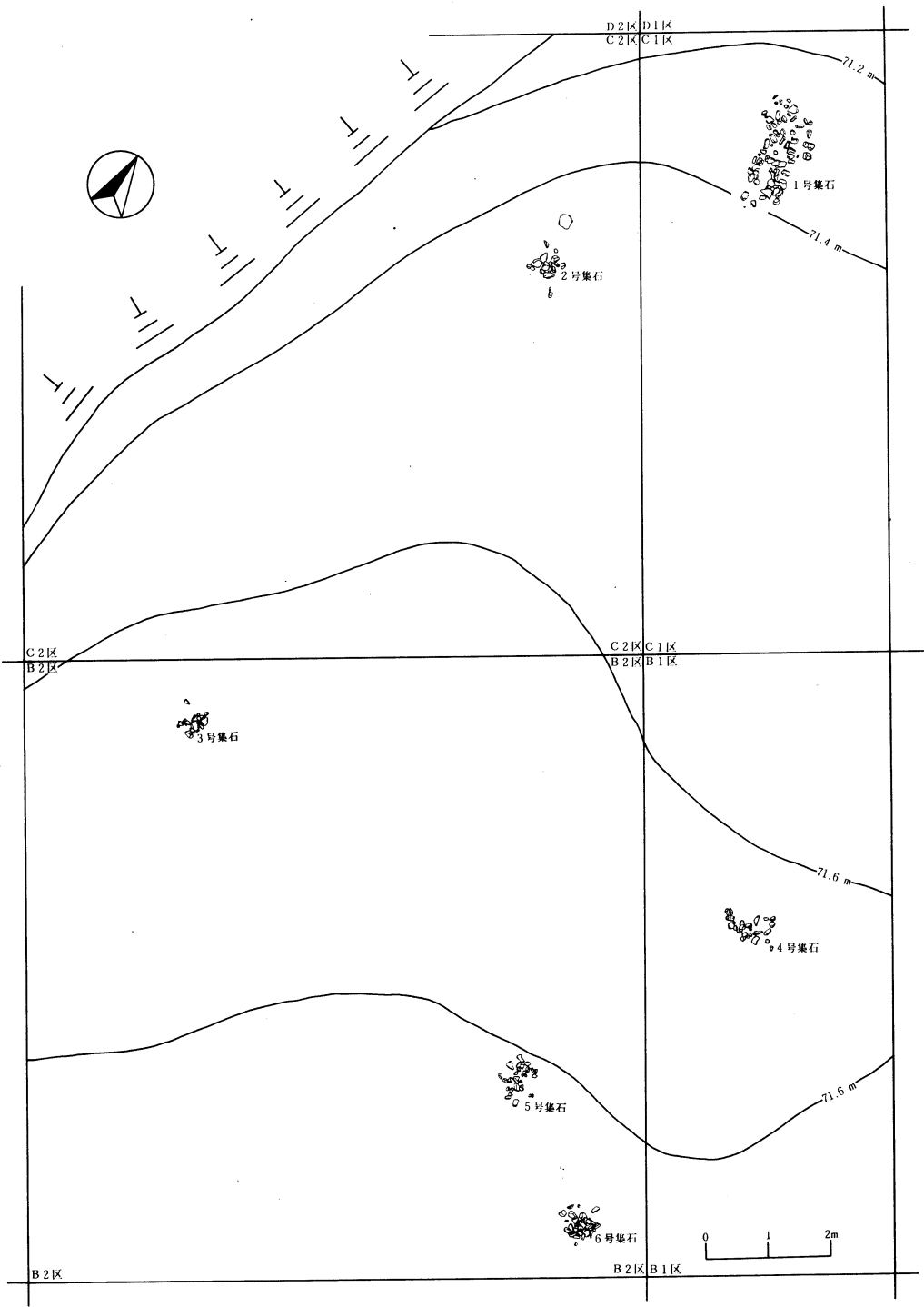
1 遺構

遺構は、6基の集石遺構が包含層最下面からⅧ層上面に検出された。集石遺構の時期は、共伴する資料は少ないが、遺物の層位的な出土傾向から前期に該当することが考えられる。

集石遺構は、台地の縁辺部に3基、中央部に3基という配置で検出されている。まとまりをもって集中しているものから、バラツキのあるものまで加えた。石の大きさは、破碎された小礫や拳大、乳幼児頭大のものなど大小がある。石材も安山岩・頁岩・破碎礫岩など多種が含まれる。角礫が主体で、円礫はほとんど見られない。

1 集石1号 (第8図)

集石1号は、C1区の本遺跡検出では最も台地先端に位置する。集石1号は、ほぼ主軸が南北方向の140cm×80cmの楕円形状のプランで検出されている。ほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤味を帯びている。集石は、明確な掘り込みは確認されず平坦面に集められた状態である。集石の石は、総数73個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の破碎礫が16個、さらに10cm未満で200g未満のものは49個と半数以上を数える。集石1号は、小礫の比重が大きいのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体であり、安山岩と水晶等が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩はいずれも高隈山系に産するものであり、安山岩は入戸火砕流堆積物層中に形成される礫層中に多く含まれる。

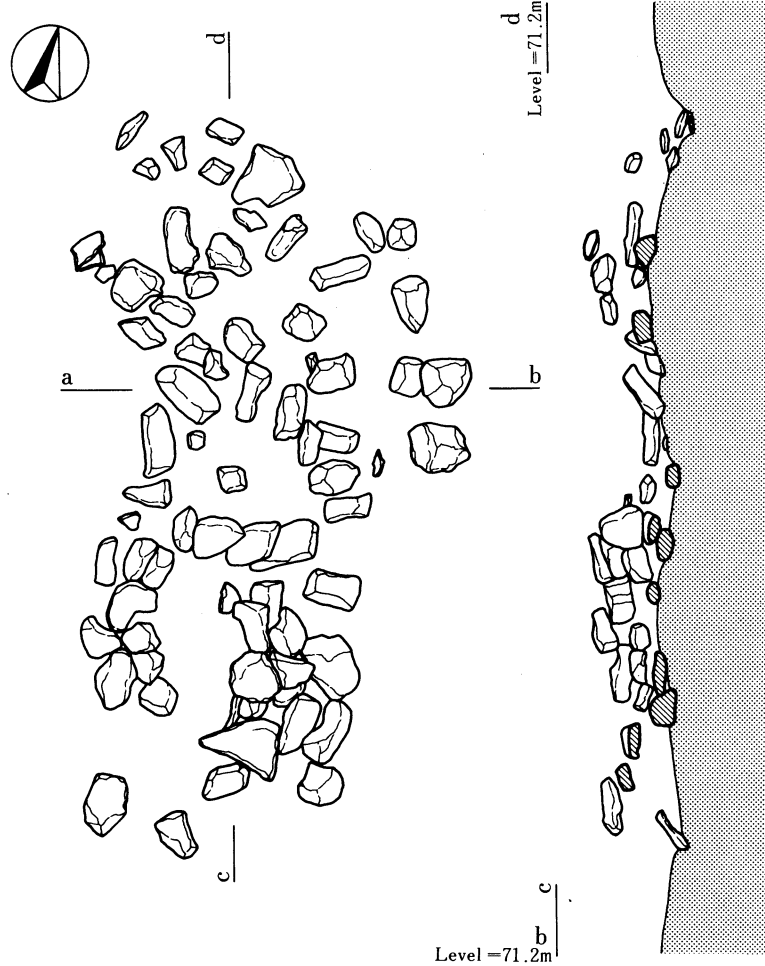


第7図 集石遺構配置図

2 集石2号 (第9図)

集石2号は、C2区の検出でこれも台地先端に位置する。集石は、径60cm×50cmのほぼ円形プランで検出されて少し離れて3個が位置している。ほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤味を帯びている。集石は、明確な掘り込みは確認されないがその中心部は凹みまもりがある。集石の石は、総数22個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の破碎礫が1個と少なく、

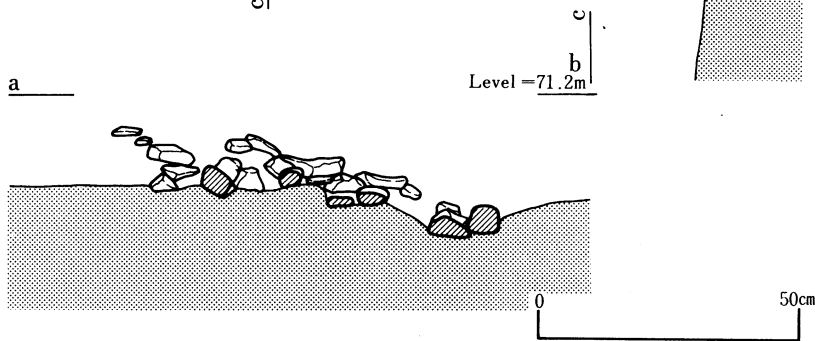
さらに10cm未満で200g未満のものは2個とさらに少ない。このように集石2号は、大礫の比重が比較的大きいのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体であり、安山岩が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩は、いずれも高隈山系に産するものである。



3. 集石3号

(第10図)

集石3号は、B2区の検出でこれも台地北側先端に位置する。集石は、径60cm×40cmの楕円形プランで検出され少し離れて1個が位置している。ほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤



第8図 集石1号実測図

味を帯びている。

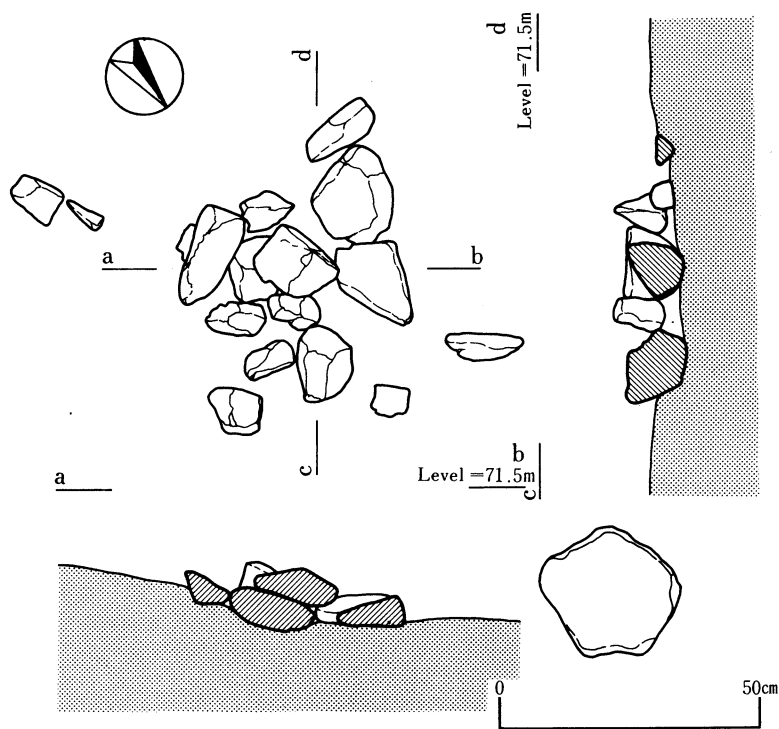
集石は、明確な掘り込みは確認されないがその中心部は凹みままとまりがある。集石の石は、総数22個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の破碎礫が2個、さらに10cm未満で200g未満のものは7個と少ない。

集石3号は、小礫の比重が比較的小さいのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体

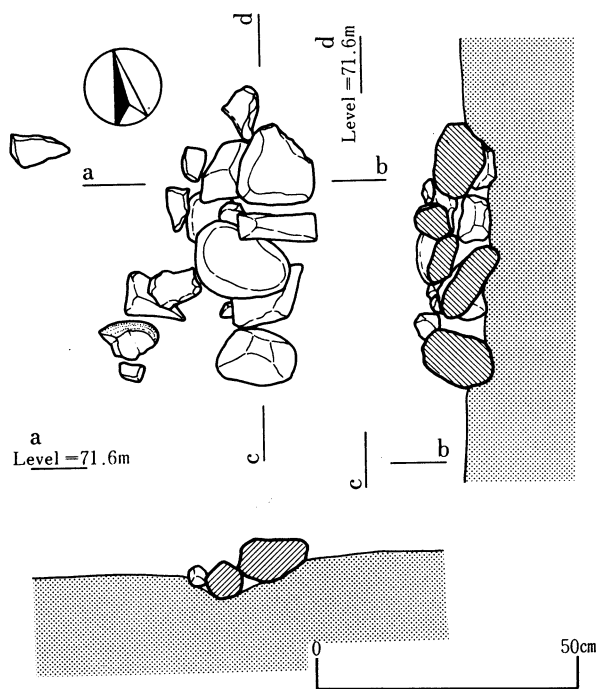
であり、安山岩が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩は、いずれも高隈山系に産するものである。なお、集石から表裏を条痕で整形した土器片（第14図1）が1点伴出している。

4 集石4号（第11図）

集石4号はB1区の検出であり、これは台地中央部に位置する。集石は、径90cm×70cmの楕円形プランで検出され比較的バラツキがみられる。わずかに円礫を含むがほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤味を帯びている。集石は、明確な掘り込みは確認されず平坦面に集められた状態である。集石の石は、総数46個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の

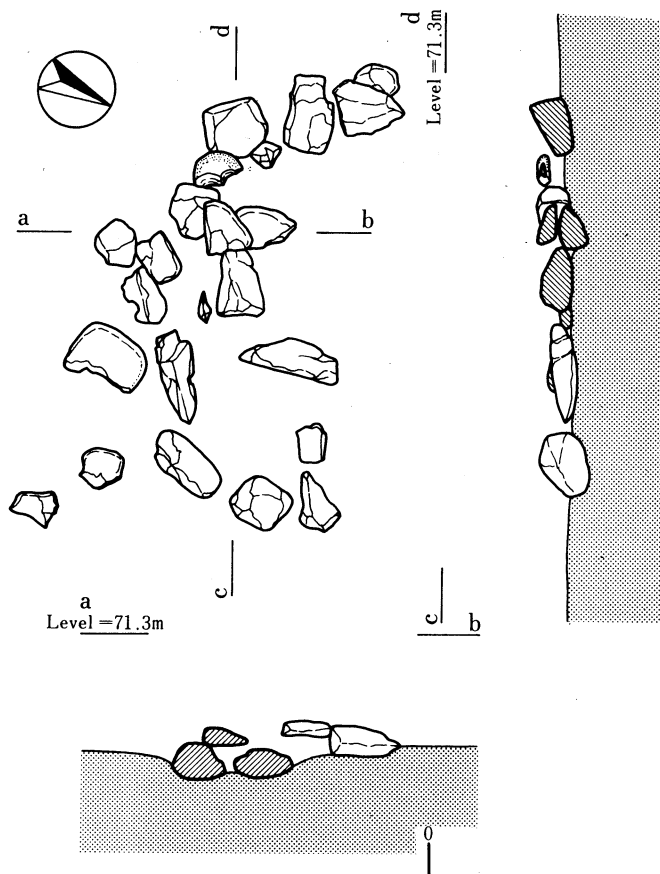


第9図 集石2号実測図



第10図 集石3号実測図

破碎礫が9個、さらに10cm未満で200g未満のものは27個と半数以上を占め破碎礫の多いのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体であり、安山岩が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩は、いずれも高隈山系に産するものである。なお、集石のほぼ中央付近からドリル状石器（第14図1）と打製石斧片（第14図3）・磨石（第14図4）などが伴出している。



第11図 集石4号実測図

5 集石5号

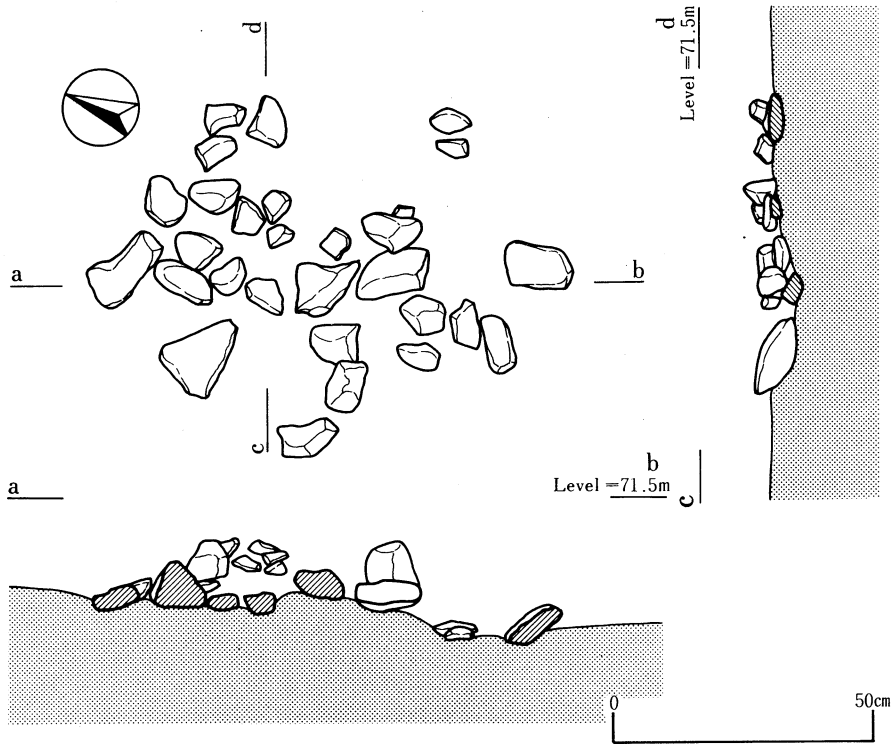
(第12図)

集石5号はB2区の

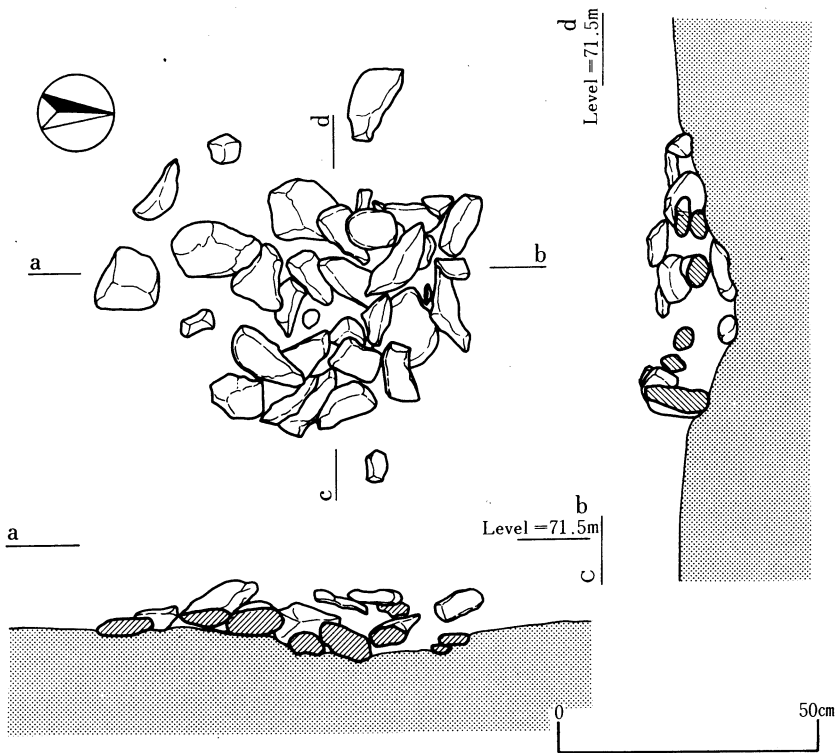
検出であり、これも台地中央部に位置する。集石は、径90cm×70cmの楕円形プランで検出され比較的バラツキがみられる。ほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤味を帯びている。集石は、明確な掘り込みは確認されず平坦面に集められた状態である。集石の石は、総数24個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の破碎礫が1個、さらに10cm未満で200g未満のものは14個で大小が平均化しているのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体であり、安山岩が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩は、いずれも高隈山系に産するものである。

6 集石6号 (第13図)

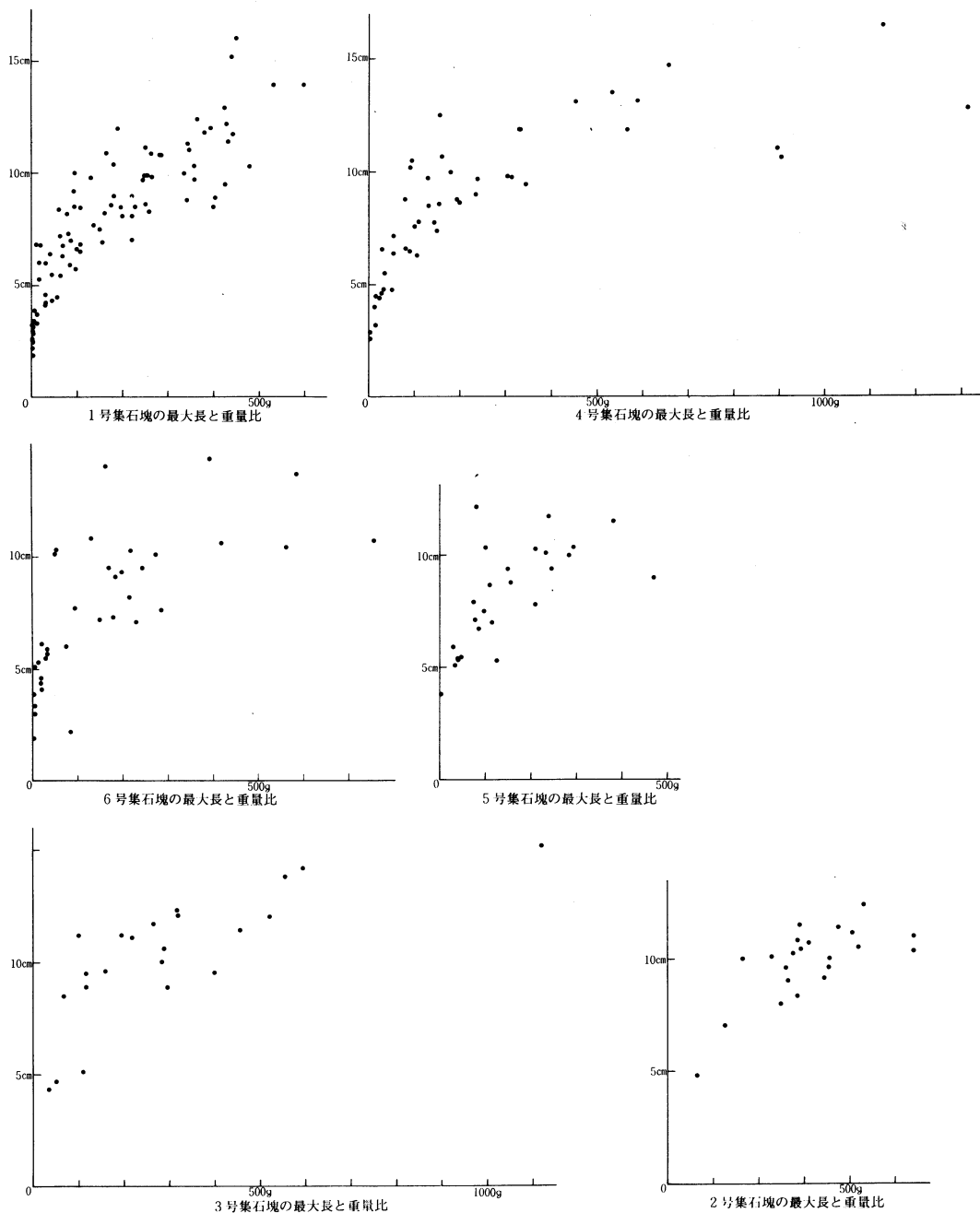
集石6号はB2区の検出であり、これも台地中央部に位置する。集石は、径60cm×50cmの円形プランで検出され比較的まとまりがある。ほとんどが角礫で構成され、火を受けたためか若干赤味を帯びている。集石は、明確な掘り込みは確認されないがその中心部は凹みまとまりがみられる。集石の石は、総数35個である。石の内訳は、5cm未満で100g未満の破碎礫が8個、10cm未満で200g未満のものは20個と半数以上を占めるのが特徴である。石材は、頁岩と破碎礫岩が主体であり、安山岩が若干含まれる。頁岩と破碎礫岩は、いずれも高隈山系に産するものである。



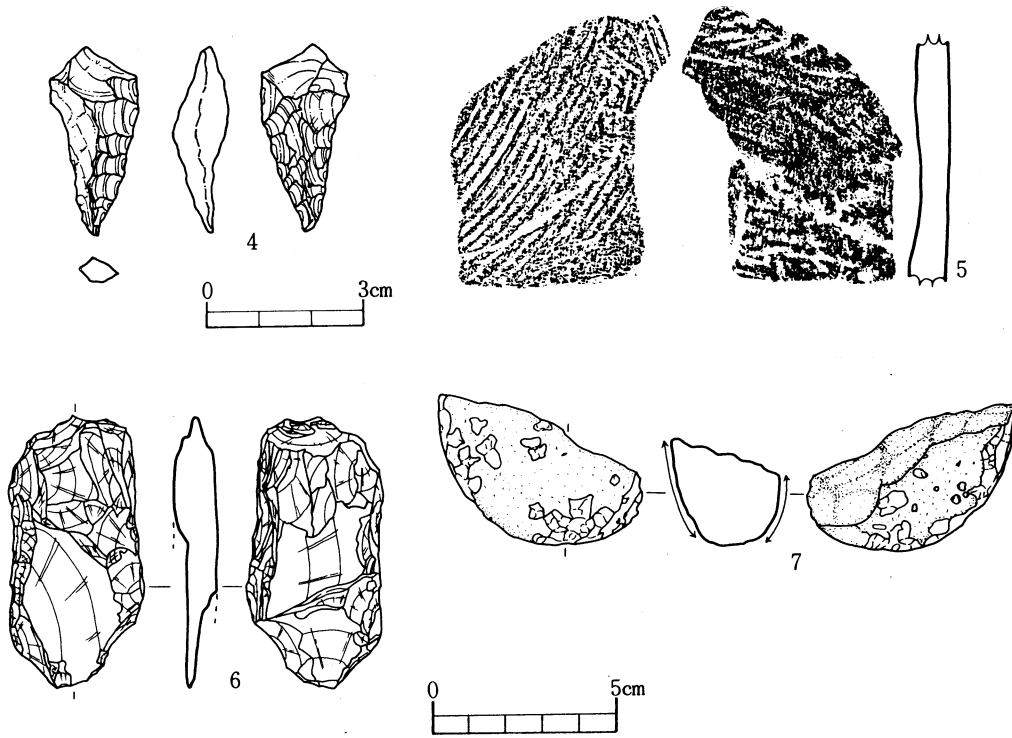
第12図 集石5号実測図



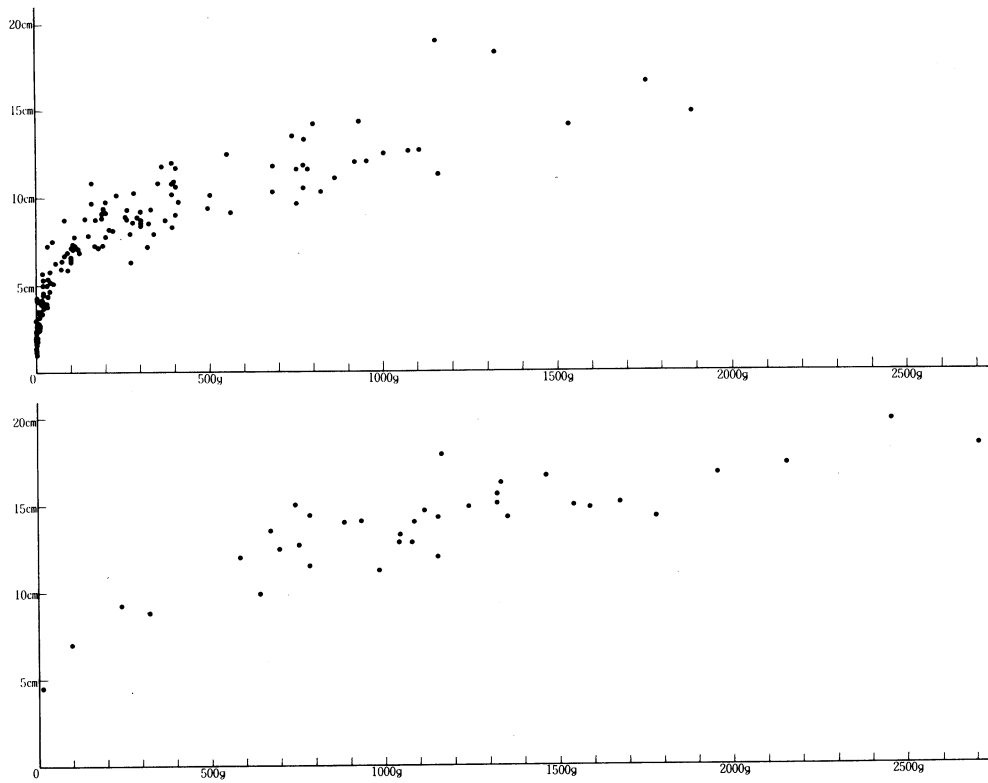
第13図 集石6号実測図



第14図 集石遺構の石塊の最大長と重量比



第15図 集石遺構出土遺物



第16図 実験集石の石塊の最大長と重量比

2 出土遺物

1. 出土遺物の概要

榎田下遺跡では、比較的狭い発掘面積にもかかわらず多量の遺物が出土している。出土遺物は、すべて縄文時代の遺物である。遺跡での取り上げ点数は、総数3,441点にも及ぶ。第17図は総遺物の出土分布図で、各区万遍なく遺物は出土している。特に、台地先端に向かって多量に出土しており、橋梁工事で破壊された部分にかけて遺跡の中心が広がっていたことが考えられる。

出土遺物は、土器、石器、加工品等に区分される。これらの出土遺物は、各々次のように便宜的に区分して説明することにする。

2 土器

榎田下遺跡では、アカホヤ火山灰下層のⅩ層から僅かな土器が出土しているが、大部分はアカホヤ火山灰上層のⅥ層出土の土器である。このⅥ層出土の土器型式は、その特徴から前期と後期の二時期に区分される。出土土器は、文様の主特徴を抽出して区分し、次のように類別して説明することにする。(なお、Ⅹ層出土の土器は、Ⅰ類土器として前項で説明した。)

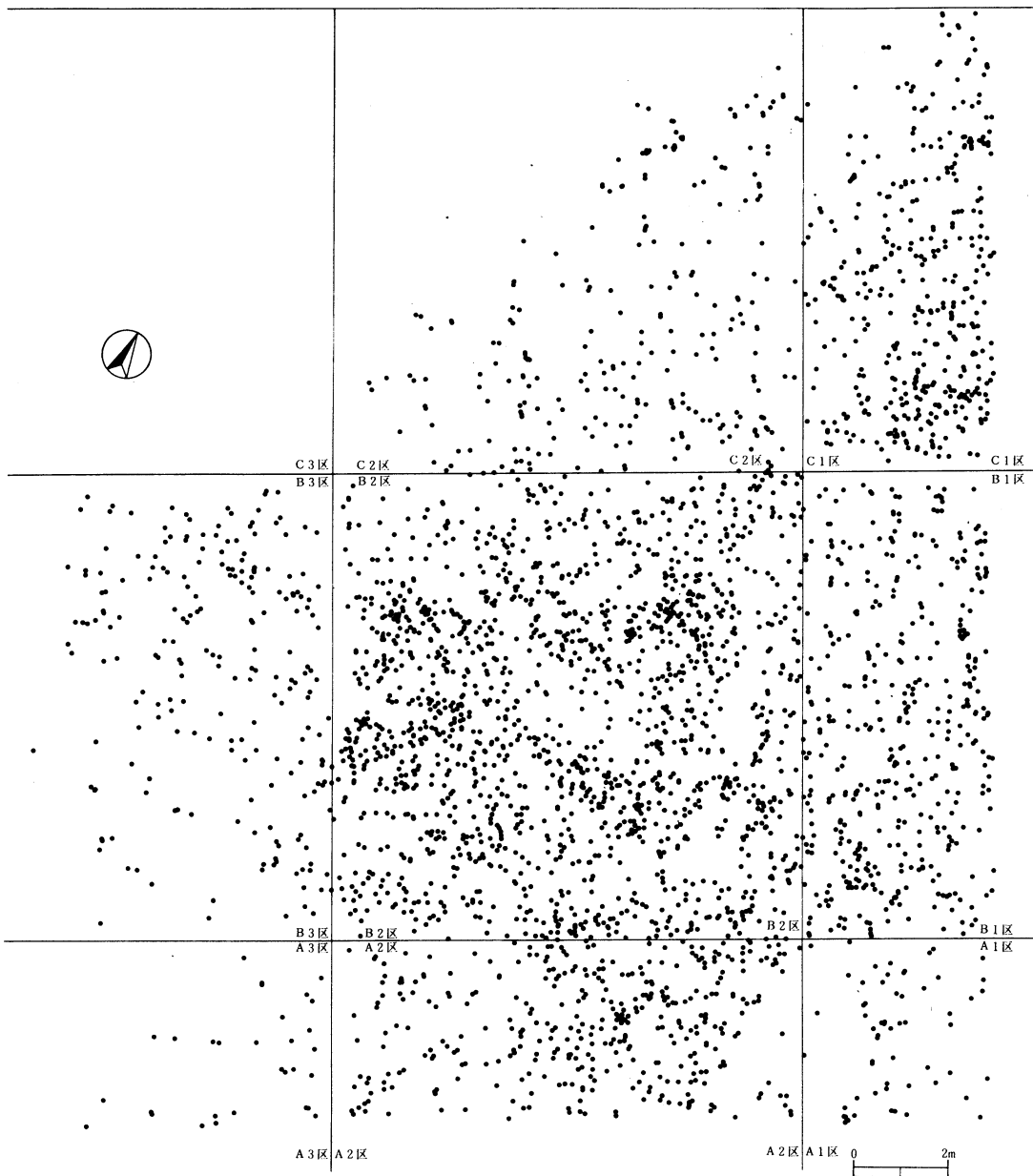
Ⅵ層出土の土器

- Ⅱ類土器 ————— 隆帯文系土器 (隆帯文を貼付する系統)
- Ⅲ類土器 ————— 条痕文系土器 (条痕文で器面全体を整形する系統)
- Ⅳ類土器 ————— 沈線文系土器 (沈線文を幾何学的に施文し文様構成する系統)
- Ⅴ類土器 ————— 押引刺突文系土器 (刺突文を押し引き文状に施文する系統)
- Ⅵ類土器 ————— 凹線文系土器 (凹線文を主文様とする系統)

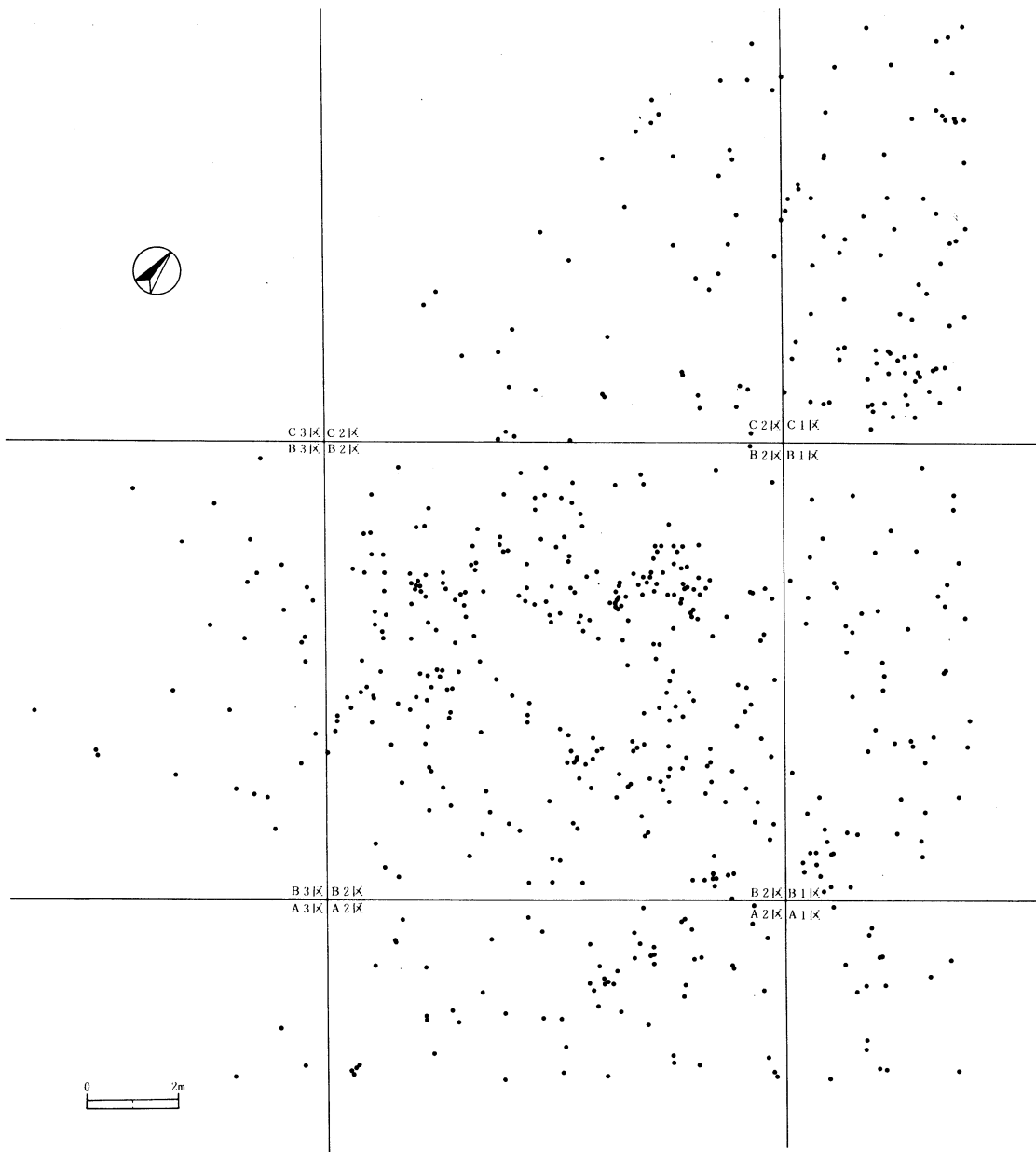
この凹線文の系統には、次の3種類がみられる。

- Ⅵ-1類 — 太形凹線文系土器
- Ⅵ-2類 — 貝殻刺突文+凹線文系土器
- Ⅵ-3類 — 細形平行凹線文系土器
- Ⅶ類土器 ————— 凹線文+貝殻刺突充填文系土器
- Ⅷ類土器 ————— 口縁部屈曲系土器
- Ⅸ類土器 ————— 各種底部

以上のように、榎田下遺跡出土のⅥ層出土の土器は、便宜的に8類-10細別に類別した。このなかでⅨ類については、各種の底部を一括したものである。なお、各々の類別は、一型式を示すものではなく、土器形式の系統を示すものである。まず、系統毎に類別し説明することにする。



第17図 榎田下遺跡遺物出土分布図



第18図 榎田下遺跡土器出土分布図

① II 類土器 (第20図～第21図-8～30)

II 類土器は、8～30で隆帯文系土器である。隆帯文系土器は、7タイプに分かれる。

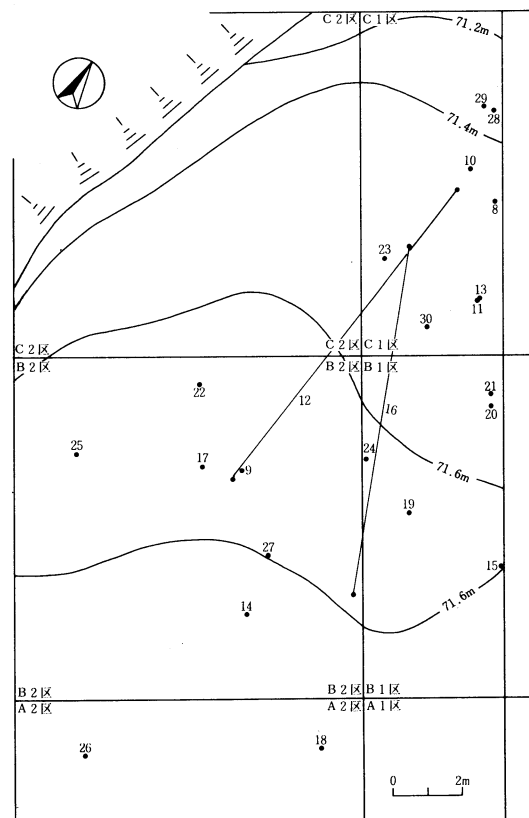
8～14は、断面三角形の隆帯を貼付するもので、その貼付の手法に特徴がみられる。隆帯の貼付の仕方は、器面に貼付される際指頭で押圧貼付されるが、あまり強く接着されず若干隙間が残る。そのためか、10のように途中の隆帯が剥落しているものがある。口縁部に貼付される隆帯文は間隔をもって横位に巡るが、9のように隆帯を縦位に貼付するものもある。しかし、形態や隆帯の特徴はいずれも類似しており、このタイプには部分的に縦位の隆帯を貼付することも考えられる。また、口唇部が8や11のように平坦面を造るものと12～14のように断面三角形に尖るものがあるが、これは口縁部の仕上げの部分的な状況と考えられ、別個体とは考えられない。器内外面には、荒い条痕を施す。色調は暗黒灰色を呈し、胎土には石英細粒や金雲母を多量に含むのが特徴としてあげられる。焼成は堅緻である。

15・16は、間隔の密な隆帯を口縁部下に多条で横位に巡らせ、その下には二本並行の隆帯を波状(或は山形)に貼付するものである。隆帯は指頭で強く押圧貼付され、いわゆるミズ腫れ状隆帯文となっている。そのため、隆帯文は、隆帯の稜部を鋭く残す形状となる。器内外面には、荒い条痕を施す。色調は暗黒灰色を呈し、胎土には石英細粒を含む。焼成は比較的堅緻である。

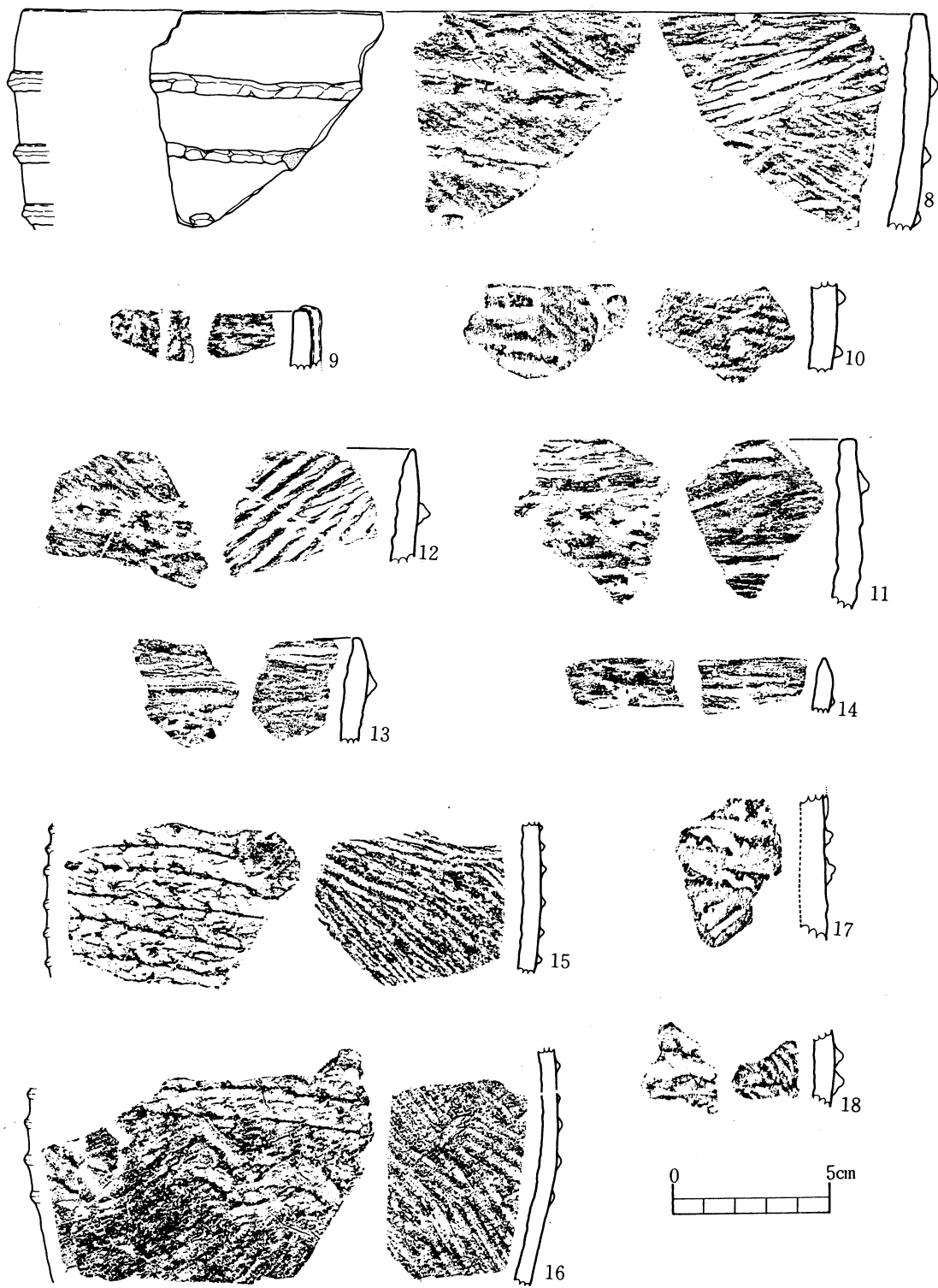
17は、胴部片で細片のため定かでないが、1本の縦位の突帯文と2本の横位の突帯文を組合せたタイプである。さらに、横位の突帯文の上から貝殻刺突文を施す珍しいタイプである。器外面には荒い条痕文を施すが、内面は剥落して不明である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母を混入する。

18は、細片のため定かでないが、2本が並行に密着した指頭押圧の比較的しっかりした突帯文が横位に巡るタイプのものである。器内外には条痕文が施される。色調は灰黄色から黒色の部分を呈するものもある。胎土には長石粒を混入する。焼成は非常に堅緻である。

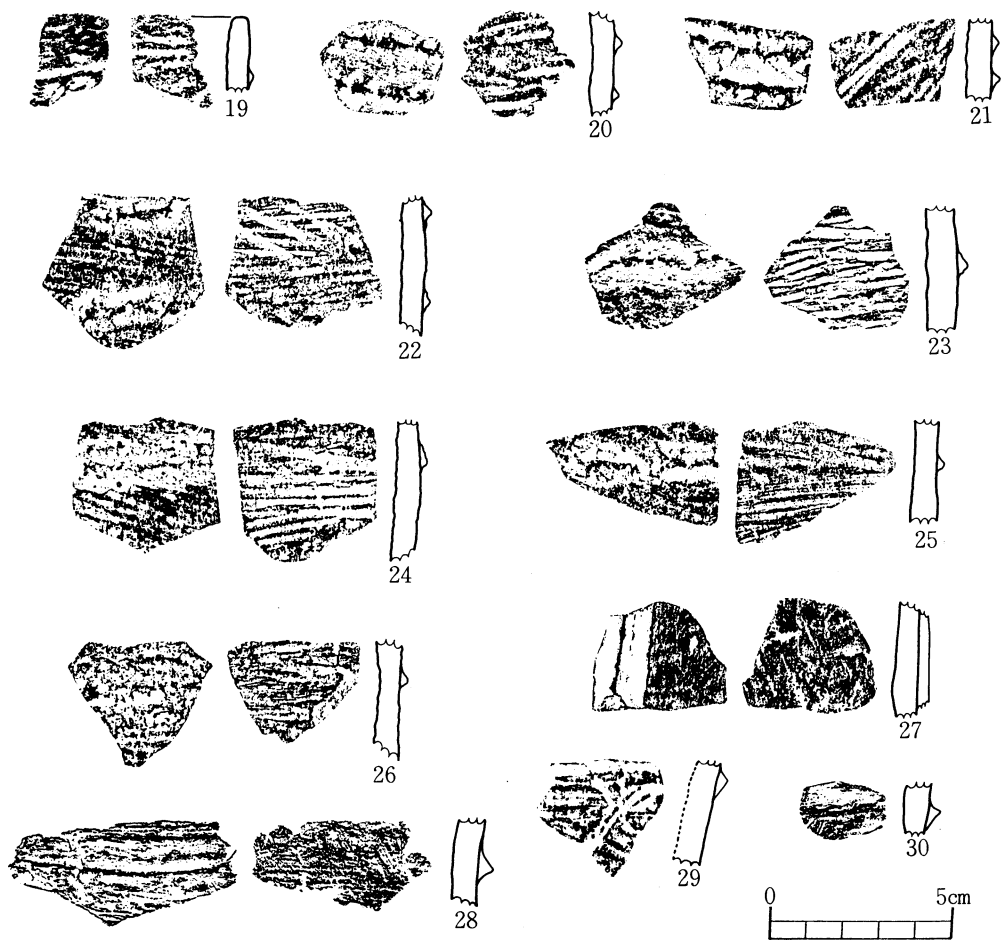
19～21は、比較的幅狭な隆帯文を口縁部に沿って横位に巡らすタイプである。外面は細片の中に隆帯を施すため確認されないが、内面は条痕仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土には僅かな長石を含むだけである。焼成は、比較的良好である。



第19図 II 類土器出土分布図



第20图 II類土器実測図(1)



第21図 II類土器実測図(II)

22~26は、間隔をもって横位に巡る隆帯を施すタイプである。隆帯の貼付には拙稚な手法が看取される。器内外面には、荒い条痕を施す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石のほか多量の金雲母を含むのが大きな特徴である。焼成は比較的堅緻である。

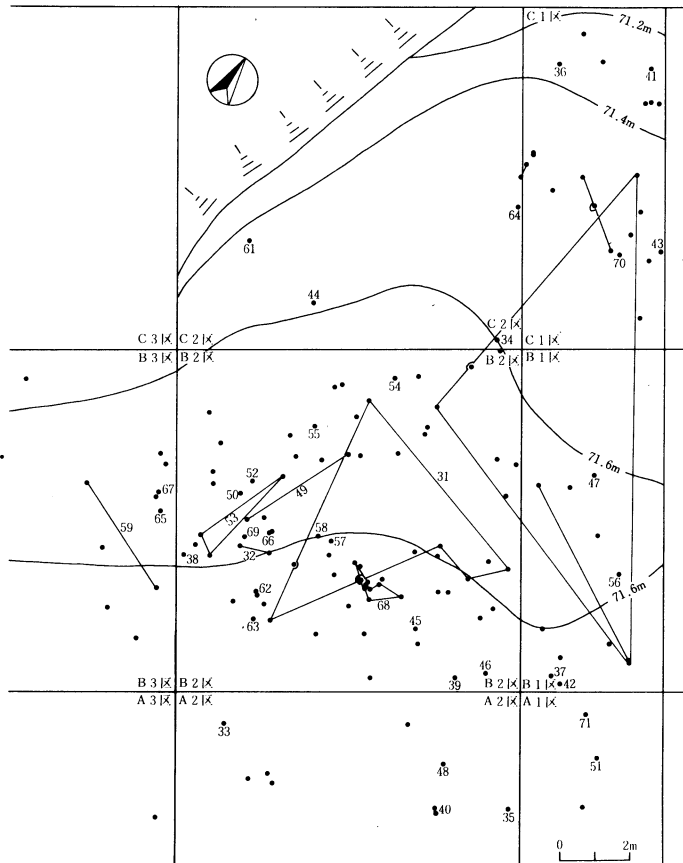
27~30は、隆帯をナデ整形して貼付して鋭利な断面三角の隆帯文をつくるタイプである。そのためか、器内外は丁寧なナデ整形で仕上げ、条痕文は見られない。27のように縦位に突帯文を施文するものもある。また、29のように突帯文下に弧状のヘラ沈線文を施すものもある。色調は茶褐色から黒褐色を呈し、胎土には僅かな長石を含む。焼成は、いずれも良好であり堅緻である。

これらの7タイプは、その特徴から8~16と17~26と27~30の3つのタイプに括ることが可能である。

②Ⅲ類土器 (第24図～第28図-31～71)

Ⅲ類土器は、31～71で条痕文系の土器である。条痕文系土器は、4タイプに分かれる。31～35は、1 cm程度の部厚い器壁をもち、荒く強い条痕文で調整した尖底状の底部をもつ土器形式である。特に、31の口縁部から胴部片と32の底部片は同一個体である。そのほかに図化されない多量の破片が存在するが、その接合関係は第23図のようにかなり広い範囲で接合している。この土器は、復元高約30cm、口径33cmを測る尖底土器である。器外面には、幅広い施文具での荒く拙稚な条痕文が施されている。口唇部は、わずかな平坦面を作るが、現存する破片では無文である。内面は、摩滅して保存が悪いが荒いヘラ削り仕上げが看取される。さらに底部下面まで荒い条痕文が施されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒や金雲母を多量に含む。33は、その形態からほぼ同類と考えられるが同一個体ではない。器外面は、31同様に荒く拙稚な条痕が施される。器内面は、荒いヘラ削り仕上げである。器壁は若干薄く0.8 cm～1.0 cm程度を測る。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒を含むが金雲母は含まない。

36～61は、比較的薄手の器壁の条痕文系統の土器である。このタイプの器形は、36～39のように口縁部が比較的直行して丸く納めるものから40・43・44のように外反するものがある。器外面の条痕文も様々で、斜位に施すものから横位、縦位あるいは横位の条痕文の上から縦位の条痕文を重ねるもの等である。また、53のように条痕文を波状に施すものもある。器内面は、ほとんどが条痕文で整形するが、45・46・48・52のようにナデ整形やヘラ削り状の整形がみられるものもある。41のように条痕の上からナデ整形を行うものもあり、ナデ整形やヘラ削り整形のみられるものは部分的な部位の可能性もある。色調は、いずれも茶褐色を呈し、胎土には細粒の長石や石英等を混和させるだけである。58～60



第22図 Ⅲ類土器出土分布図

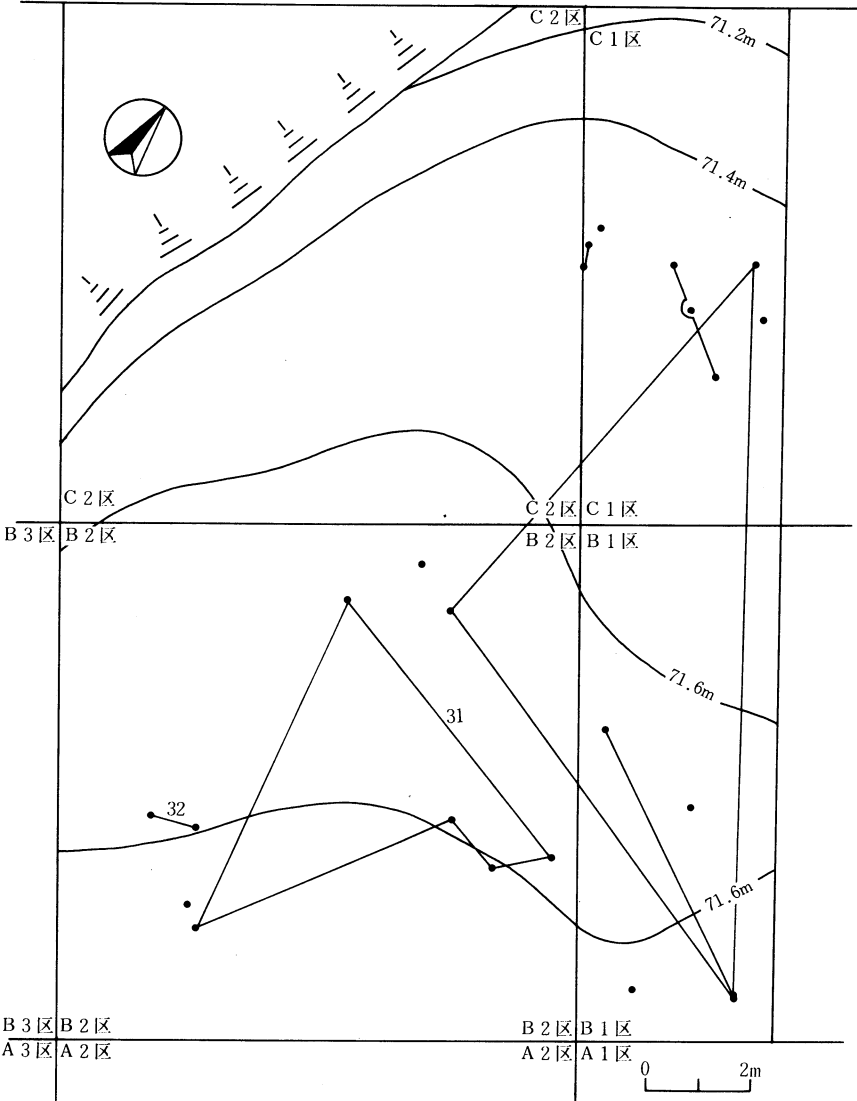
は、口唇部にヘラ刻みに目文を巡らせている。

62・63・68は、口唇部に刺突文を施すタイプである。

施文具は、半截竹管状のものである。器外面の条痕文は、横位や縦位や斜位が重なるものがあり、規則性が薄い。

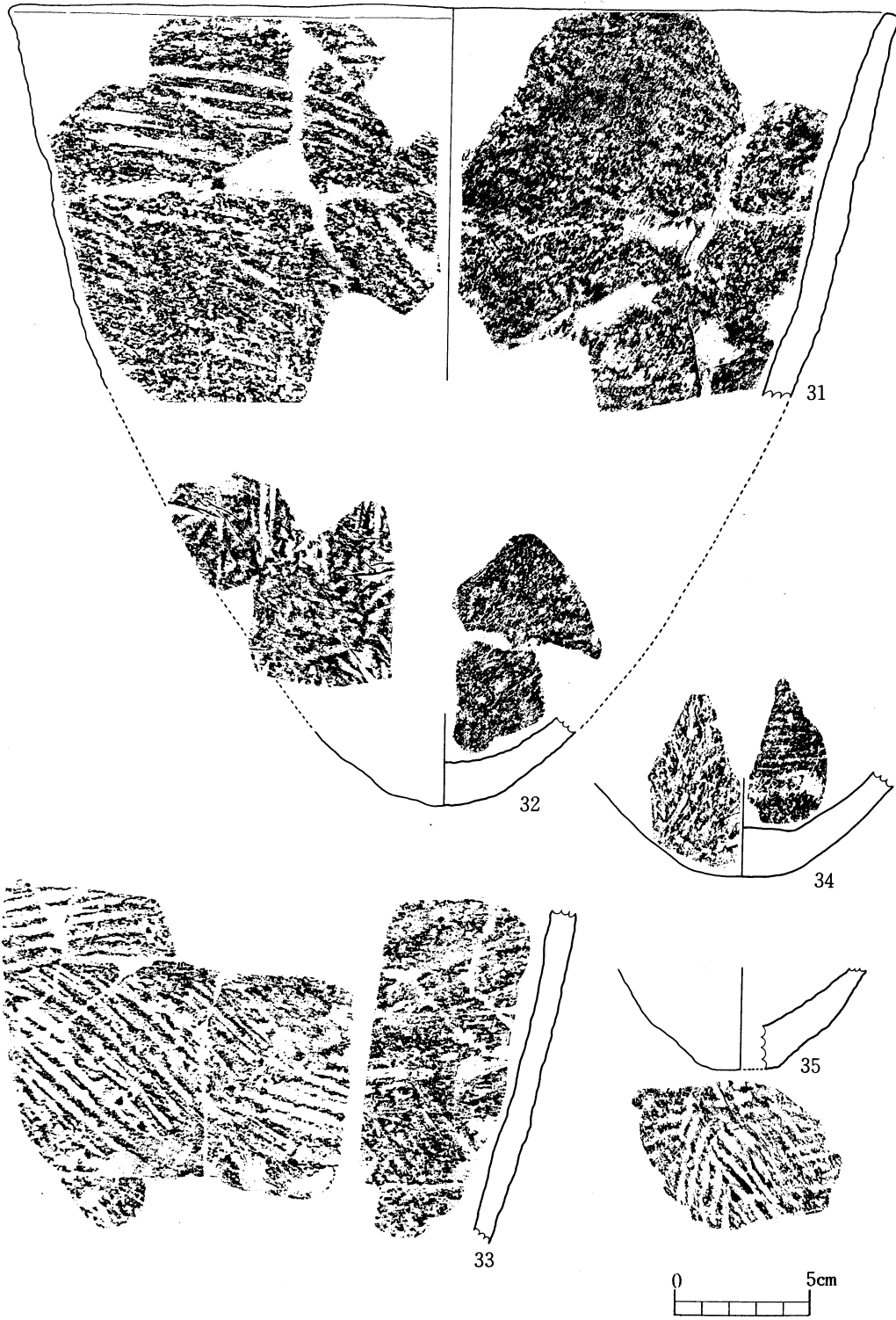
68は、口縁部内面にも刺突文が施文されるタイプである。

69～71は、条痕文の施された丸底の底部である。整形や

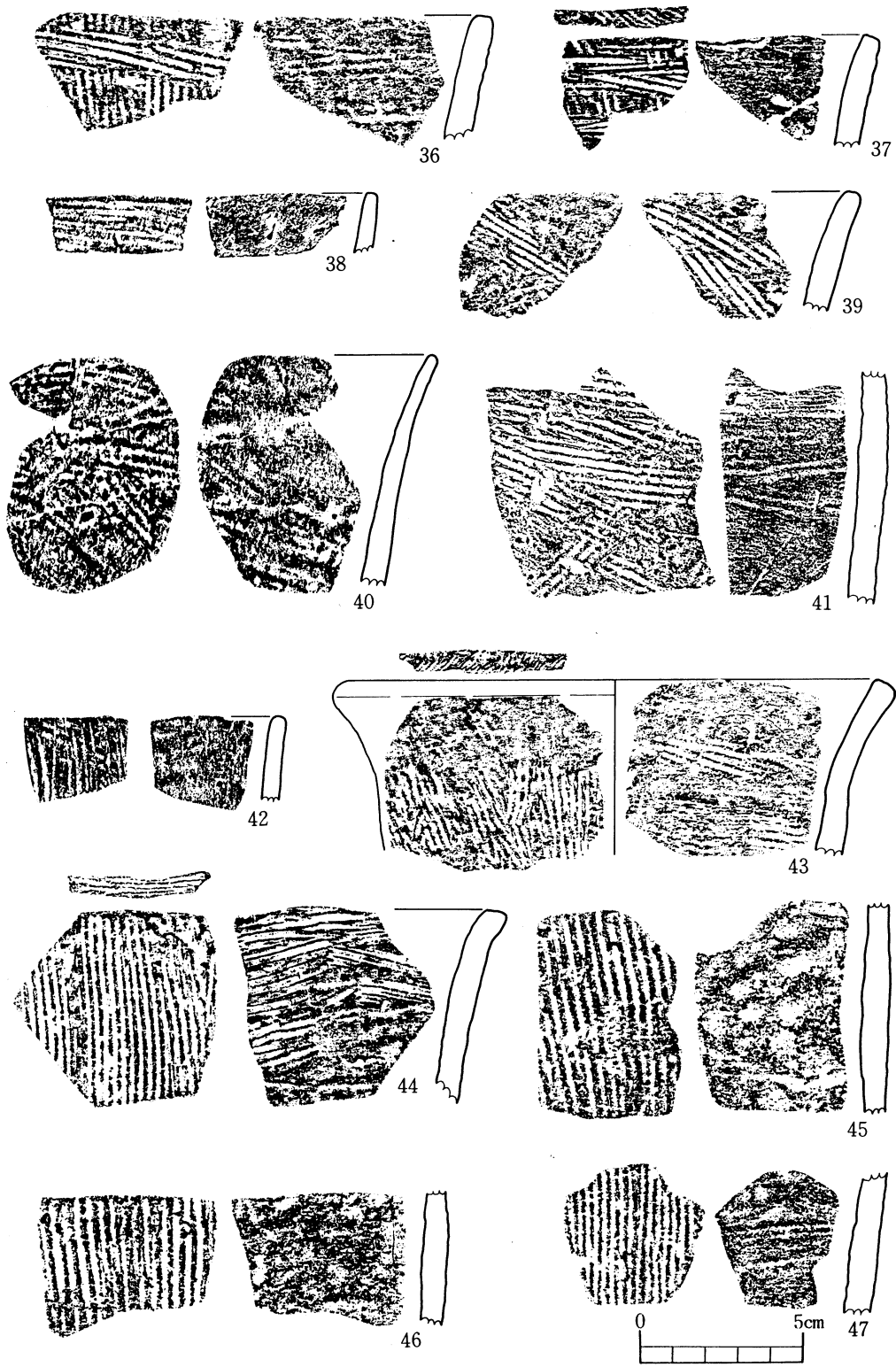


第23図 Ⅲ類土器同個体(31・32)出土分布図

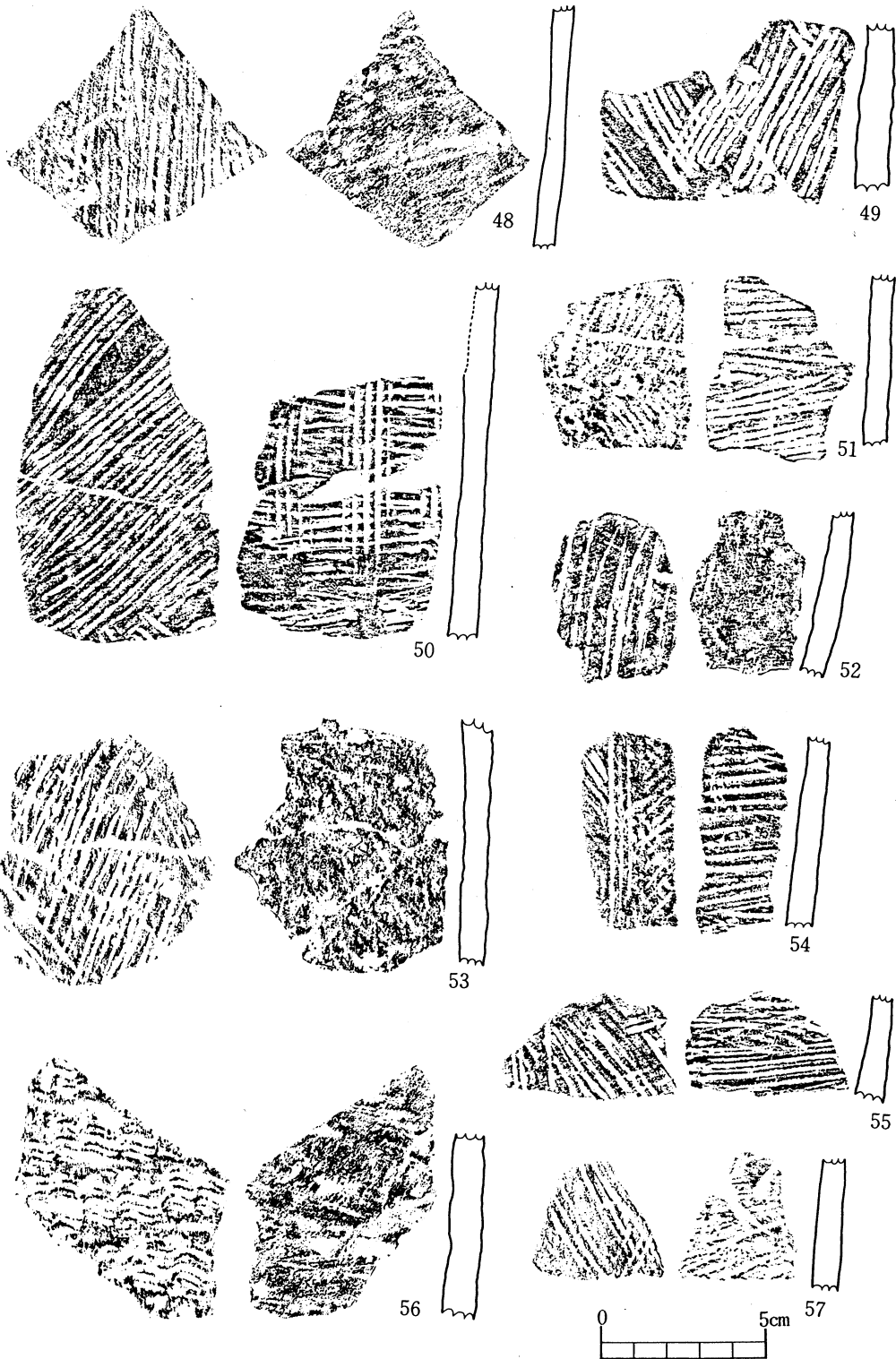
胎土から36～68のタイプに属する底部であることが考えられる。



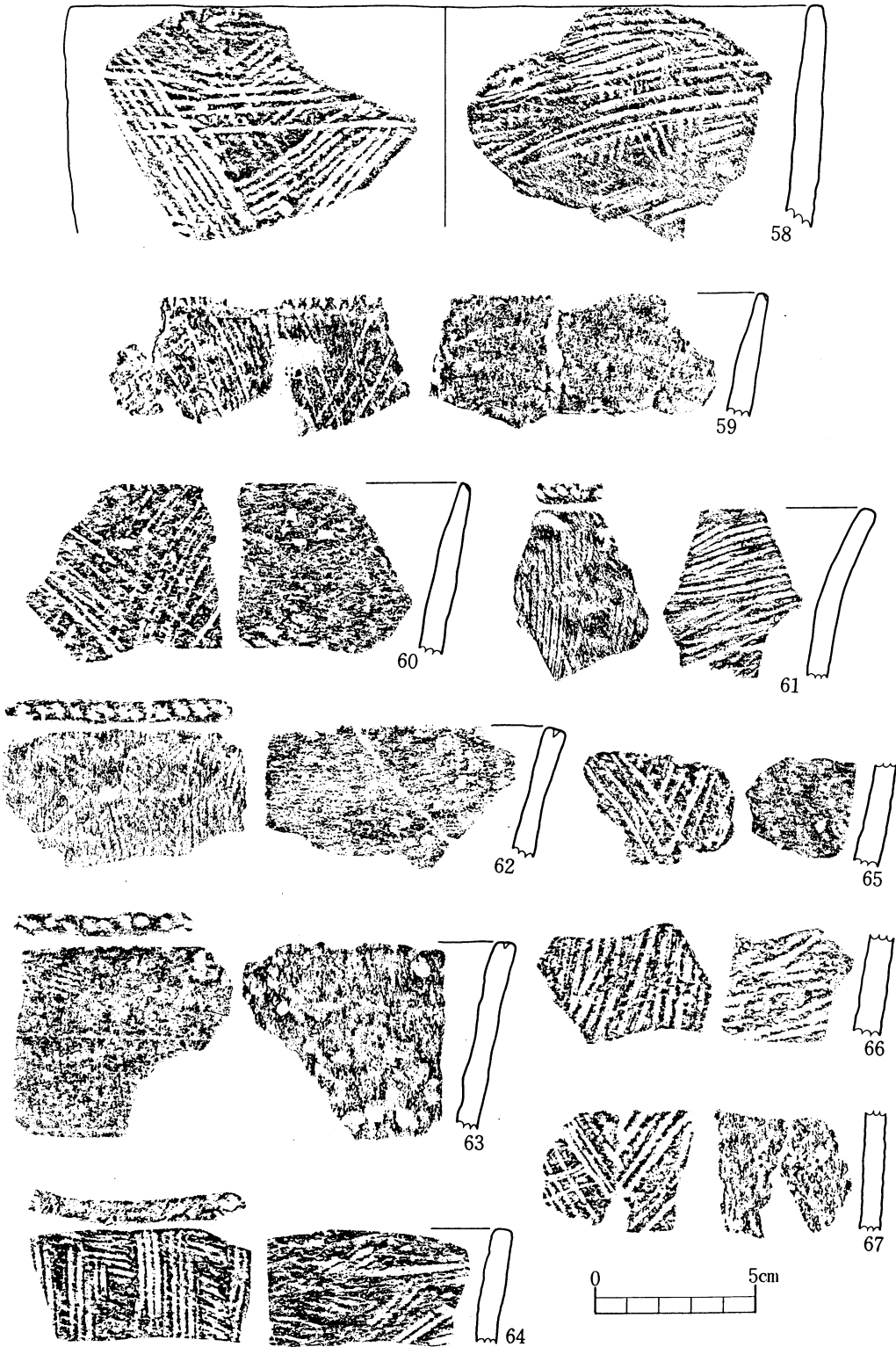
第24図 III類土器実測図(1)



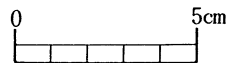
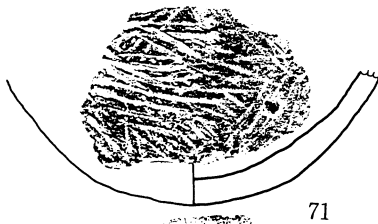
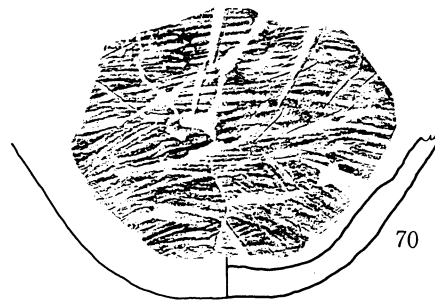
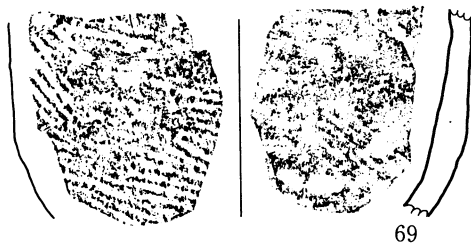
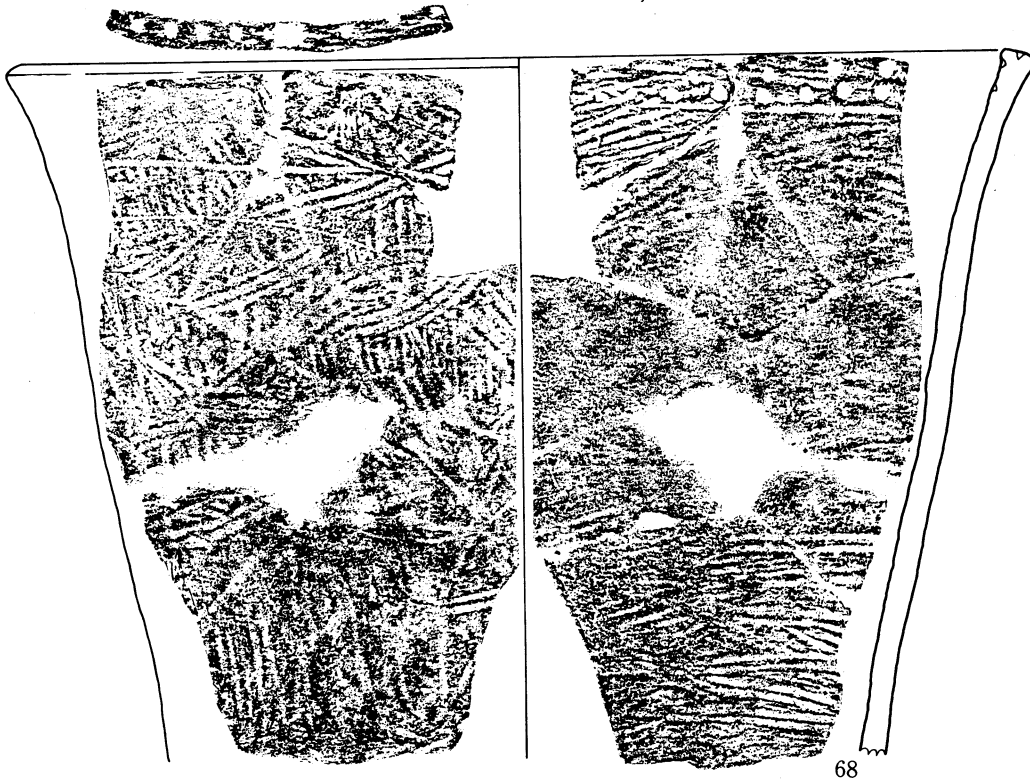
第25図 III類土器実測図(2)



第26図 III類土器実測図(3)



第27图 III類土器実測图(4)



第28図 Ⅲ類土器実測図(5)

③Ⅳ類土器 (第30図～第31図-72～96)

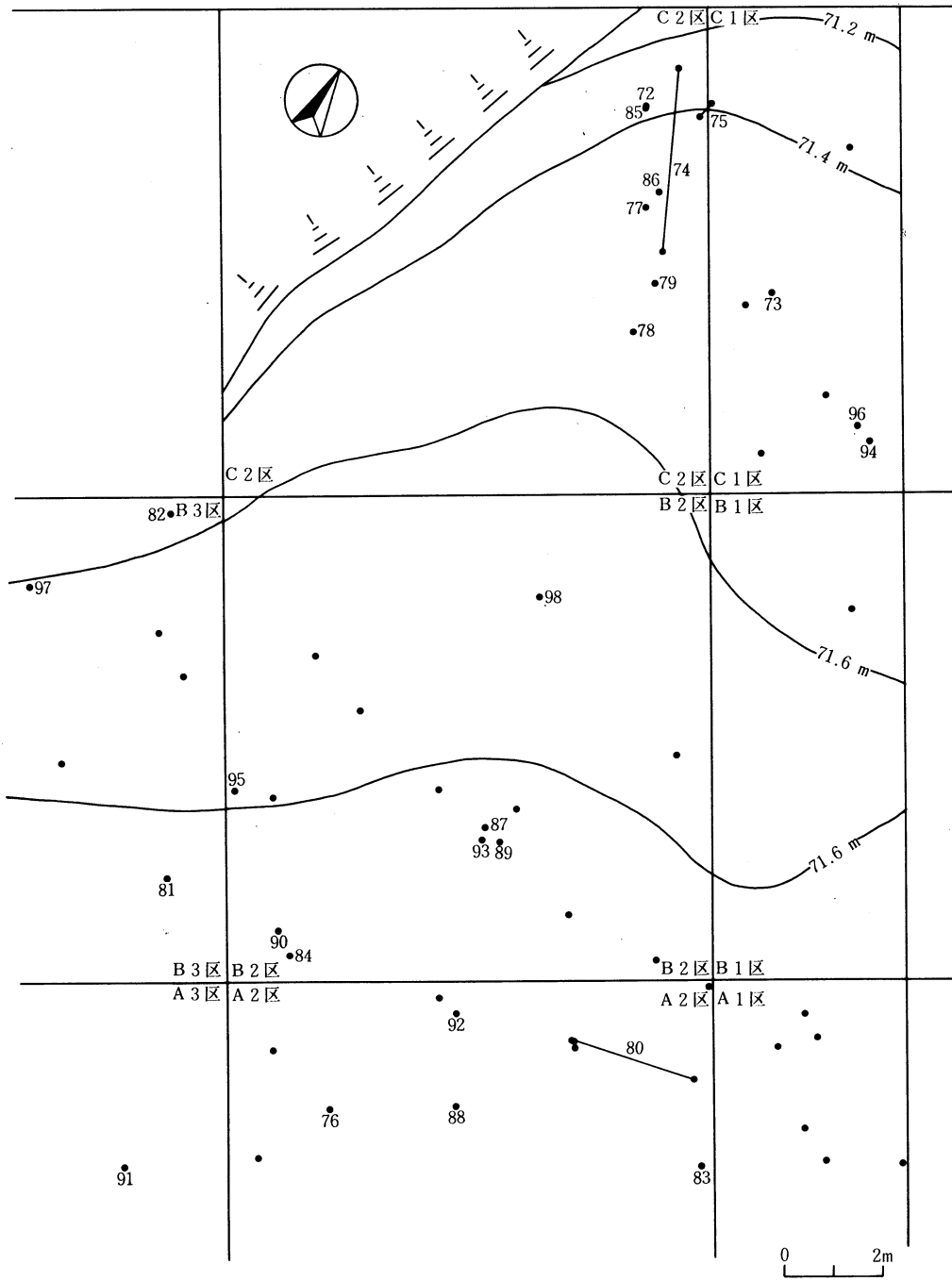
Ⅳ類土器は、72～96で沈線文系土器である。この沈線文系土器は、3タイプに分かれる。

72～79は、比較的シャープな沈線文を施すタイプである。直接の接合はみられないが、その形態からほぼ同一個体と考えられる。72・73は、口縁部片である。口唇部の僅かな平坦面には細長のヘラ状刺突文を巡らせるが、部分的に無文部を作っている。その口縁部外面には、同様な刺突文を2列施文している。そして、それ以下は横位の沈線文が施文されている。内面は、数条の横位の沈線文が施され、その2段目に刺突文を施文している。74～79は、このタイプの胴部片である。いずれも沈線文帯を交叉させ、幾何学文を描く。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げられている。器壁厚は、0.6cm～0.8cmと薄い仕上げである。色調は暗褐色を呈する。胎土には、長石粒はみられるが、通常このタイプにみられる滑石は混入されていない。

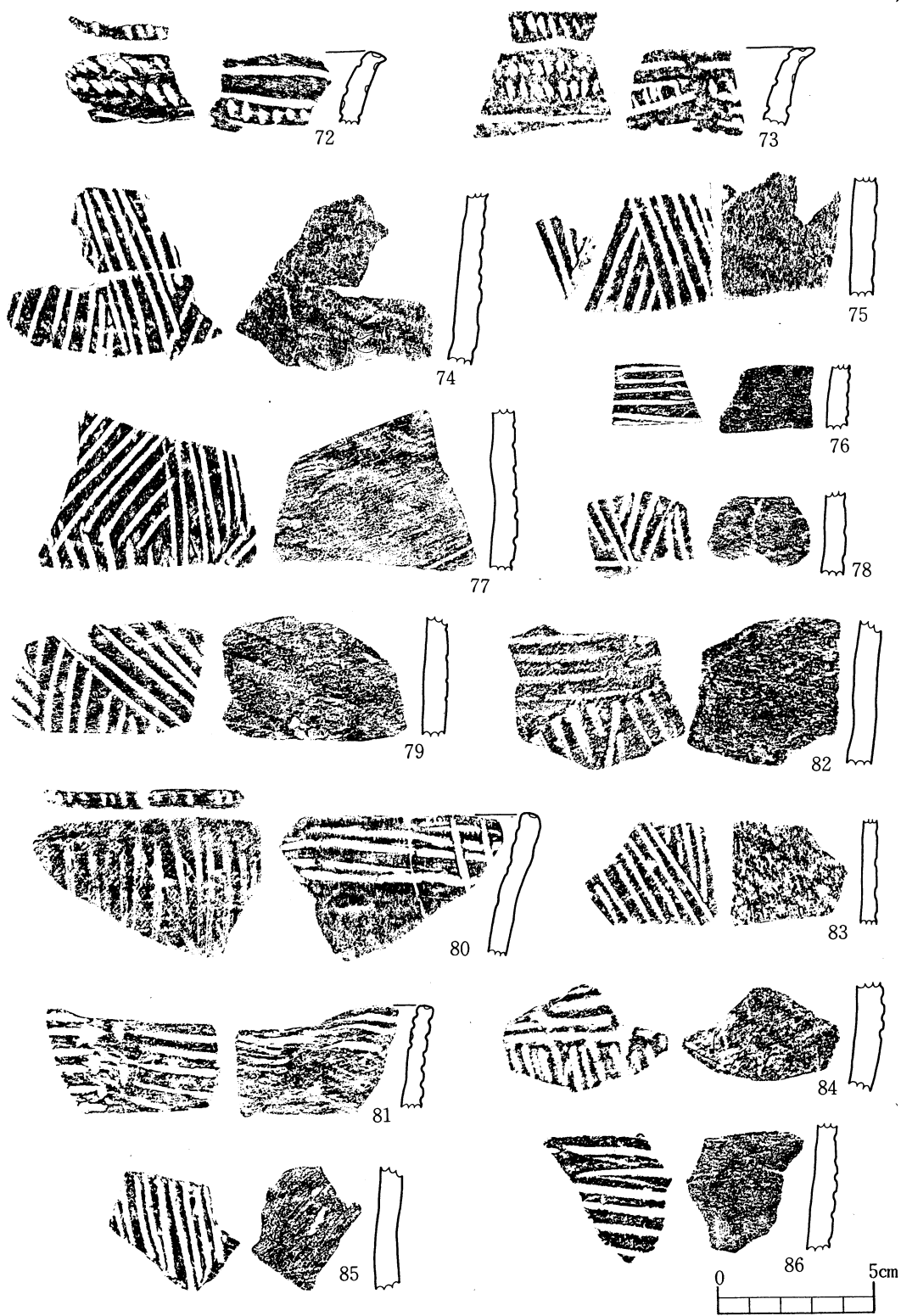
80～86は、沈線文等が若干あまいもので薄手のタイプとして括られるが、それぞれ別個体の破片のようである。80・81は口縁部片である。80は、丸味をもった口唇部には荒い刺突文が施される。口縁外面には、荒いタッチで縦位の沈線文が施文されるが、下地には斜位の沈線文も看取される。内面は横位の沈線文が施文されるが、途中が部分的に止切れる。さらに、部分的には横位の沈線文の上から斜位の沈線文も施されている。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げる。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石や角閃石を若干含む。81は、丸味をもった口唇部に刺突文が施文される。口縁外面は、数条の横位の短沈線文が施されるが、途中が止切れ、その無文部には2列の縦位の刺突文が施文されている。口縁内面には横位の短沈線文が施文される。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げる。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石粒・石英粒の他金雲母を含む。82～86は胴部破片である。いずれも横位の短沈線文に斜位の短沈線文を幾何学的に組合せている。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げる。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。

87～96は、器壁が0.9cm～1.3cmと厚く、沈線文が若干太いタイプである。87～91は、口縁部片で形態から同一個体と考えられる。87・88・91は、口唇部は丸味をつくり、口縁部外面には横位の沈線文を巡らす。内面にも3条の横位の沈線文を施文する。87は、口縁は波状に立ち上がる。89・90は同じ口縁部であるが、波状の頂部付近である。丸味をもつ口唇部は無文であるが、口縁部の内外面には刺突文が施文される。92～94は、口縁部に近い破片である。いずれも横位の沈線文を巡らせる。地文には薄い条痕文で整形し、その上からナデ整形で仕上げている。内面はナデ整形である。色調は赤黄褐色で、胎土には長石粒を含む。

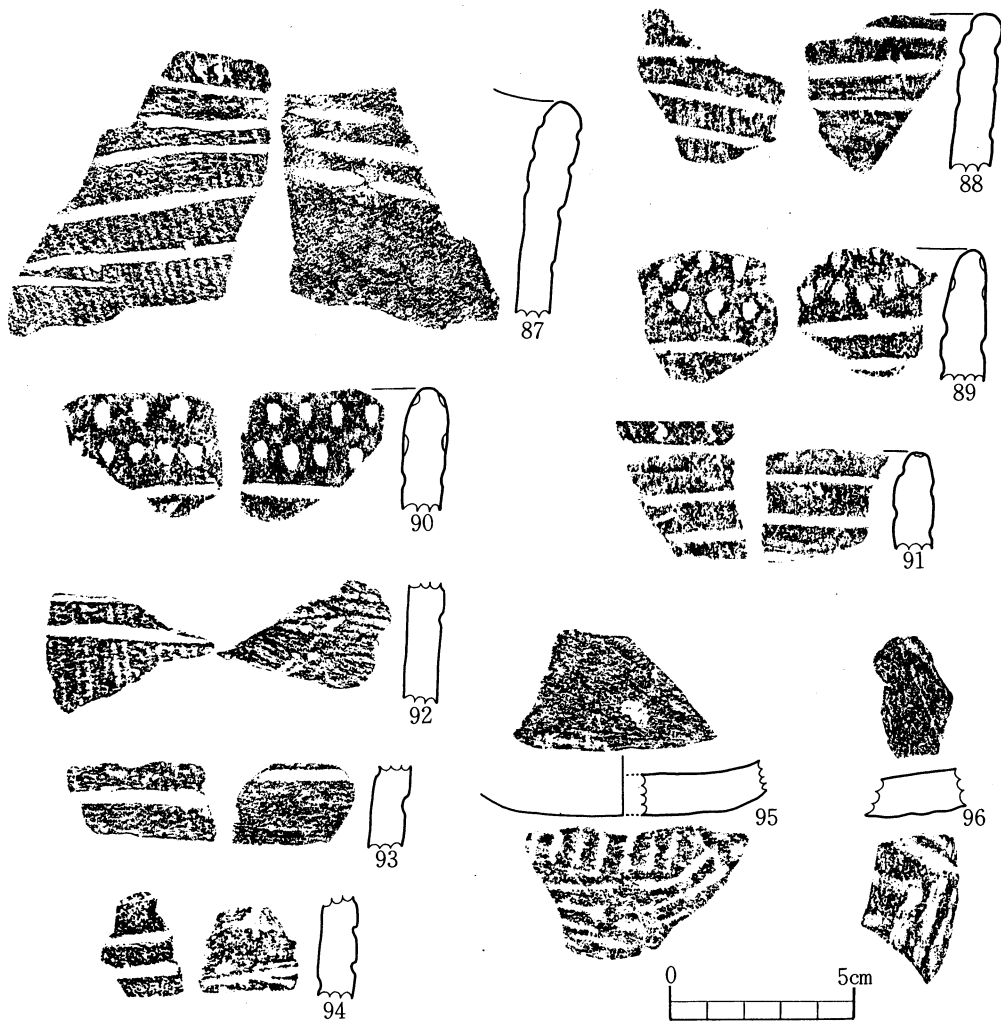
95・96は、丸底の底部片である。その形態から87～96のタイプに属することが考えられる。底部下面には蜘蛛巣状の短沈線文が施文される。内面は、丁寧なナデ整形で仕上げる。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石を若干含む。



第29図 IV類土器出土分布図



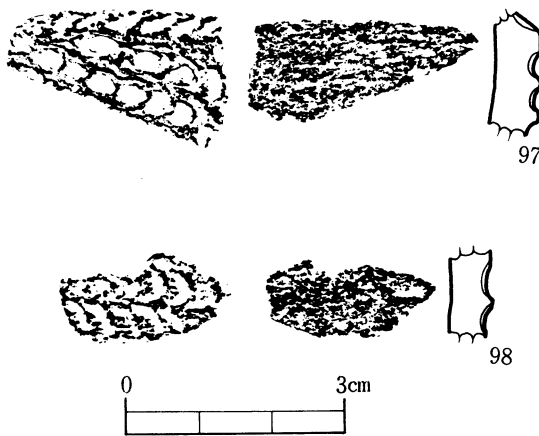
第30图 V類土器実測図(1)



第31図 IV類土器実測図(2)

④V類土器 (第32図-97・98)

V類土器は、97・98で押引刺突文系土器である。いずれも半截竹管状の施文具で、力強い押引刺突文が数条施されている。細片のため形態は不明であるが、若干内湾気味の口縁部付近と考えられる。内面は丁寧なナデ整形で、焼成は堅緻である。色調は、97は暗黒褐色を呈し、98は黄褐色を呈する。胎土には、長石・石英の細粒を含む。



第32図 V類土器実測図

⑤VI類土器（第36図～第41図-99～127）

VI類土器は、99～125で凹線文系土器である。この凹線文の系統には、次の3種類がみられる。VI-1類=太形凹線文系土器、VI-2類=貝殻刺突文+凹線文系土器、細形平行凹線文系土器の3種類である。VI類土器の出土は、B1区～B2区を中心に分布している。

VI-1類土器

VI-1類土器は、99～103の土器である。このタイプは、7mm程度のやや太形の凹線文を施すものであり、器壁も12mm～15mmと厚い。

99・100は口縁部付近であるが、凹線文は口唇部の下の約8cm程度を巡らせている。凹線文は、比較的密接に施文され曲線やS字状に文様は展開している。凹線文間の無文部の地文には、荒い条痕文が看取される。内面の整形は、若干荒いがナデ整形を施している。色調は赤褐色を呈し、胎土には長石粒や角閃石等を混入する。焼成は普通である。99は、口径約29cmを測る比較的大形の深鉢である。口唇部は、僅かに丸味をもって平坦面をつくる。

101・102は、接合はみられないが99や100と同個体の口縁部付近の破片である。103は、二本の粘土紐を組併せて形成された口唇部上の突起部である。

VI-2類土器

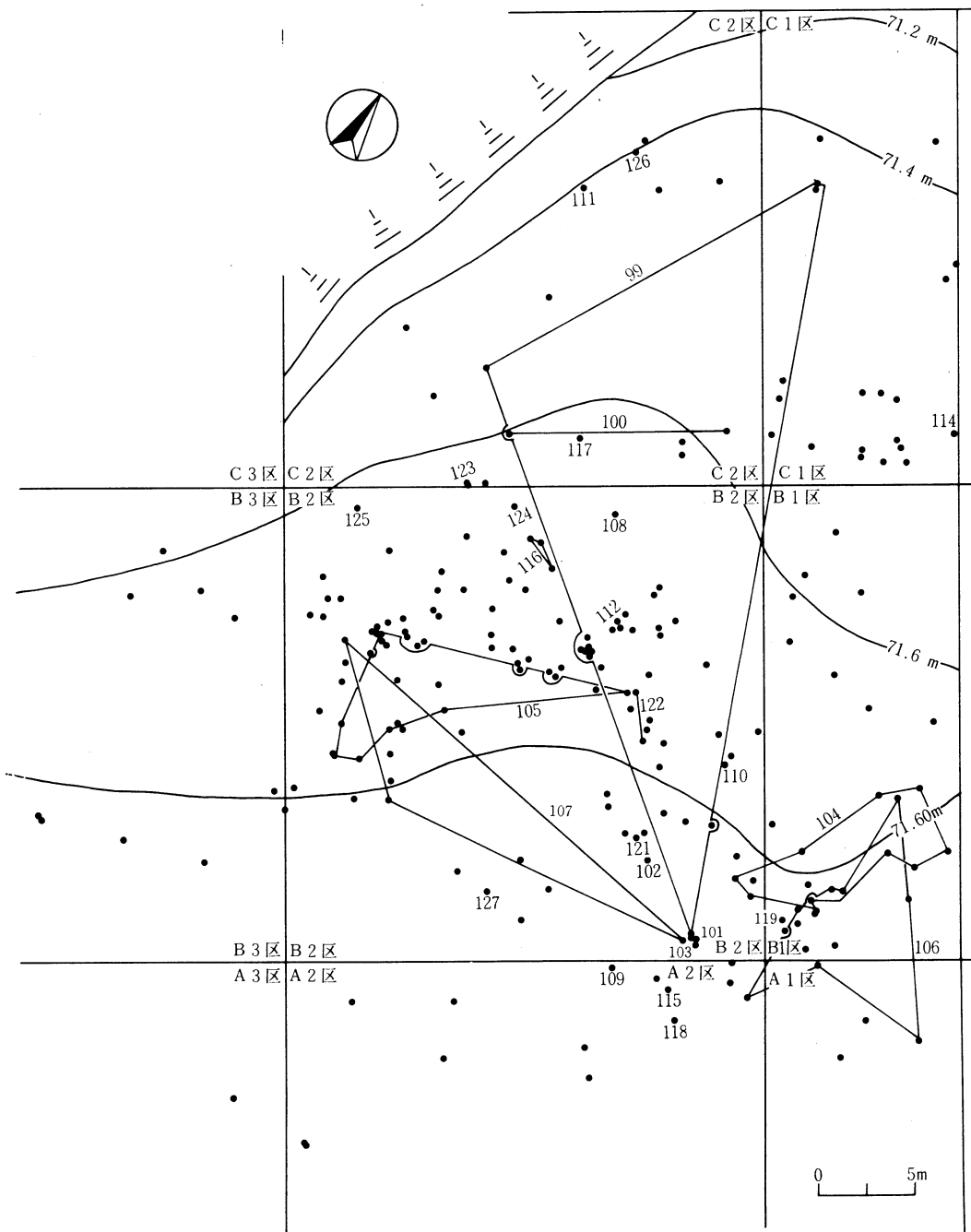
VI-2類土器は、104～122で、貝殻刺突文を口縁部の上端に1条巡らせその下方には凹線文を展開するタイプである。貝殻刺突文の下方の凹線文は、VI-1類土器と同様の曲線やS字状の文様を展開するが、凹線文の幅は5mm～6mmと若干細線化している。

104～106は、その形態から同一個体であることが考えられる。このタイプは、B2区から東側に出土の中心がみられ、B1区から東側の未調査地域が最も濃厚であることが判明した（第34図）。104は、頸部から若干内湾気味に立ち上がりながら口縁部で外反する。口縁部の口径は30cmを測り、口唇部は丸味をもっておさめる。器面の整形は、条痕文で仕上げた後、丁寧なナデ整形がみられる。刺突文は、貝殻腹縁の2肋を使用した施文具で施文している。凹線文は、半截竹管状の施文具を使用して展開している。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石や石英や金雲母等を混入する。焼成は堅緻で良好である。

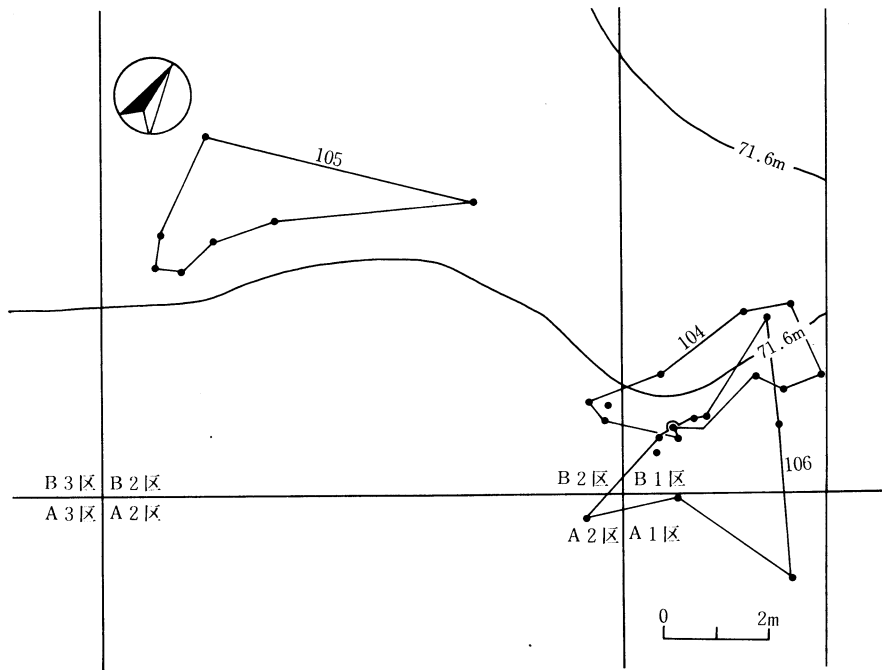
107～114も同類の形態を所持するが、貝殻刺突文や器面調整に若干の違いが認められる。さらに、器壁が6mm程度で若干薄くなり精巧なつくりが看取される。

107・109は同一個体と考えられるが、器内外面は丁寧な条痕仕上げがみられる。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や石英や金雲母等を混入する。焼成は堅緻で良好である。108・110は、6肋程度の幅広い貝殻腹縁で貝殻刺突文が施文されるタイプである。

115は、口縁部が波状の山形を呈し大きく外反するタイプである。波状口縁内面の山形の頂部には、貝殻刺突文でアクセントが付けられている。器壁は7mmと薄い。内外面とも条痕整形の後ナデ仕上げの整形をおこなっている。凹線文は、5mm程度の細い幅で二本平行線で施文されている。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母を混入する。焼成は堅緻で良好である。



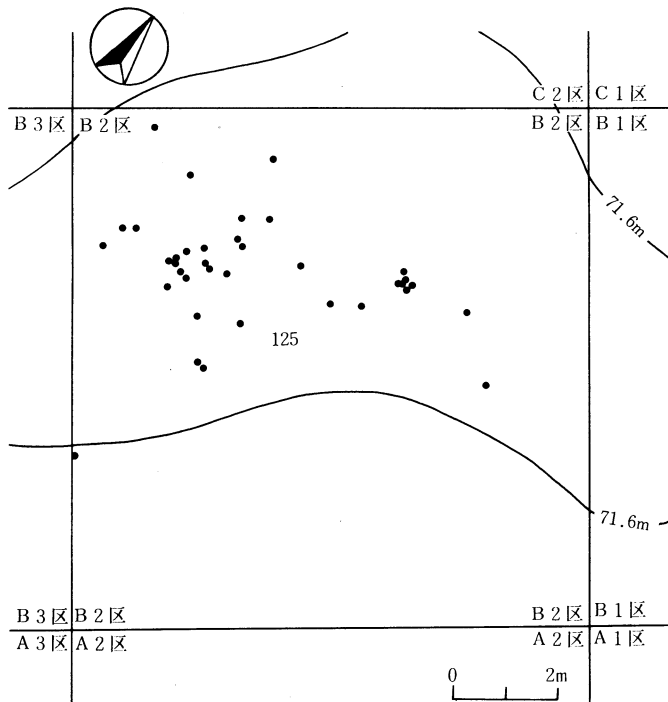
第33图 VI類土器出土分布图



第34図 VI類土器同個体 (104~106) 出土分布図

116・117は同一個体の頸部から胴部片であるが、3本平行の約3mm程度の細凹線文が鈎形や山形に展開する。器壁は、約12mm程度と比較的厚い。内外面とも条痕文整形の後にナデ整形で仕上げていることが看取される。胴部は若干膨らむ傾向にあるが、頸部で縮まり口縁部は外反することが考えられる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母を混入する。焼成は堅緻で良好である。

119・120は、貝殻刺突文の代わりに半截竹管文が施文されるものである。120は、半截竹管文の施文具の形が明瞭に分かるものである。半截竹管の施文具は、直径6mmで先端は平坦に仕

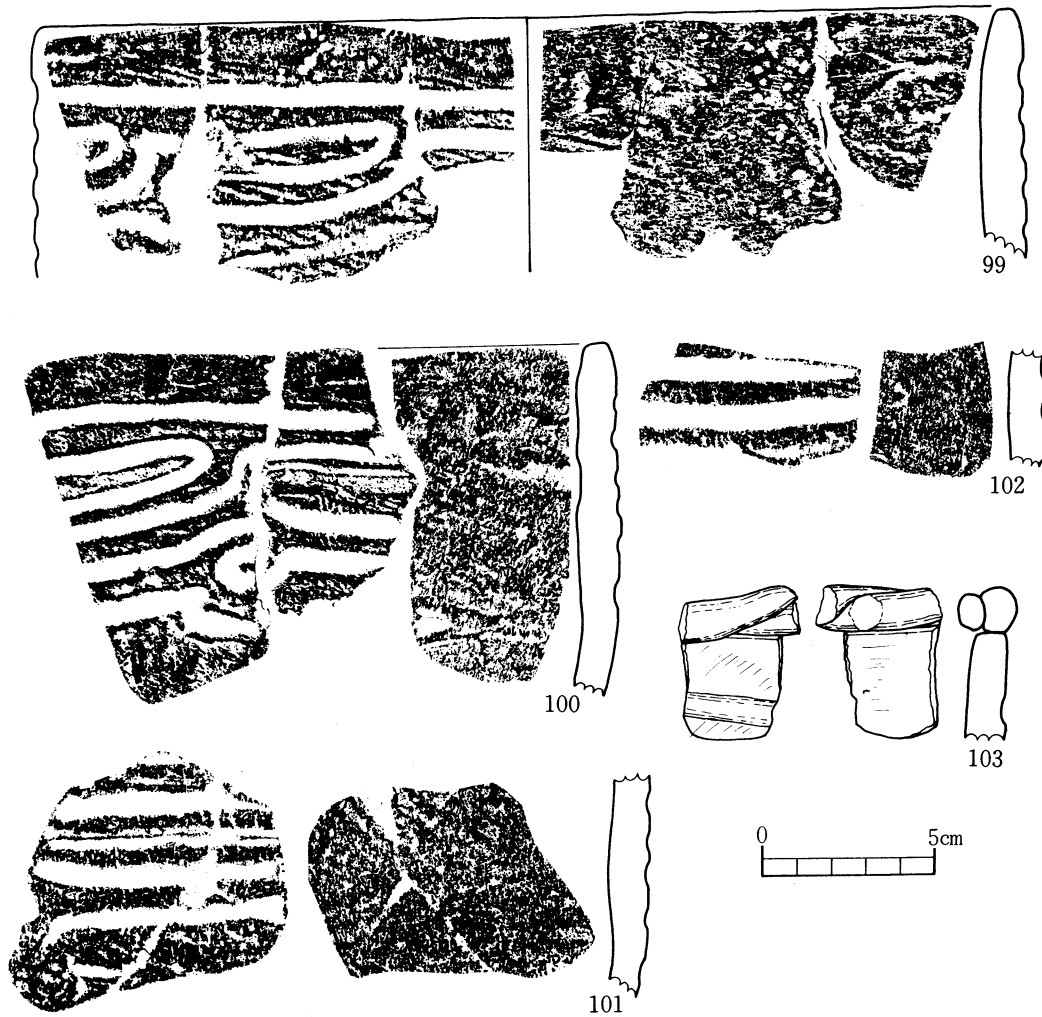


第35図 VI類土器同個体 (125) 出土分布図

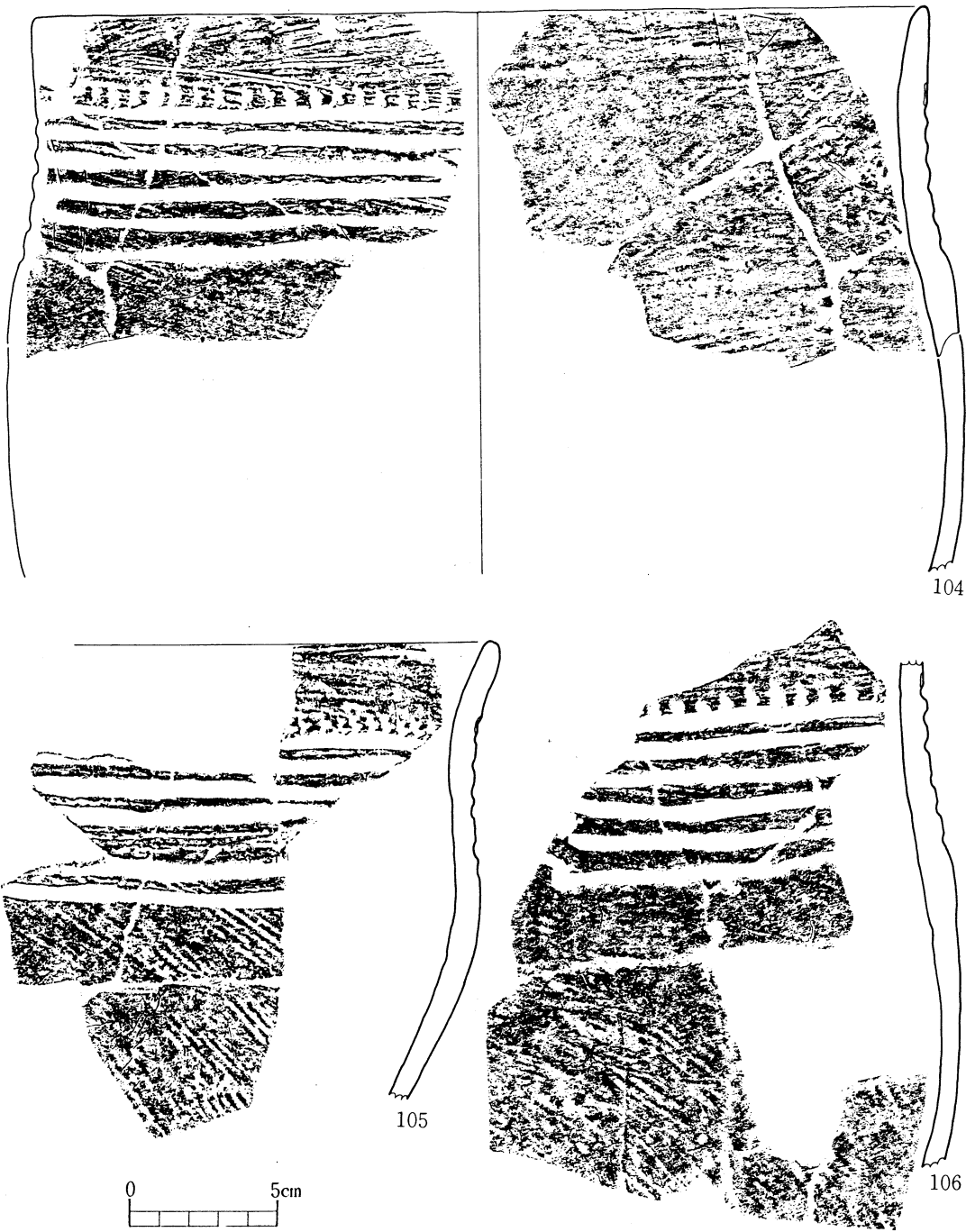
上げたものである。上部の一部が欠けているのが文様効果を出している。なお、凹線文の幅は約6mmであり、半截竹管文の施文具と同じ大きさである。器内外面はナデ整形の丁寧な仕上げがみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石や金雲母を混入する。焼成は、堅緻で良好である。

121・122は、口縁部上端に貝殻刺突文を施文するものである。そのため、貝殻刺突文と凹線文の間に無文部が広がる。器壁は8mmの厚さを測る。凹線文は、2mm～3mmと極端に細い。121は、小破片であるが3本平行の凹線文が施文される。器内外面とも若干荒い整形であるが、ナデ仕上げで整形されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を混入する。

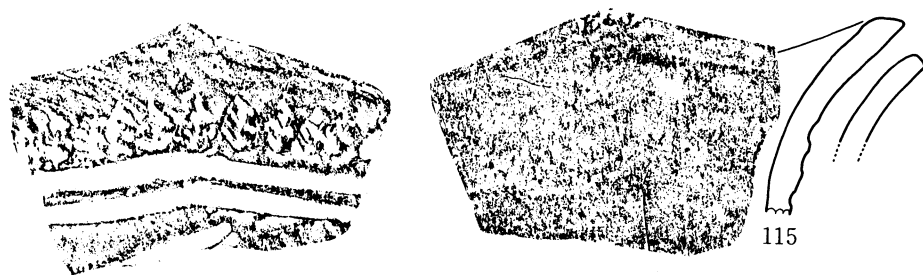
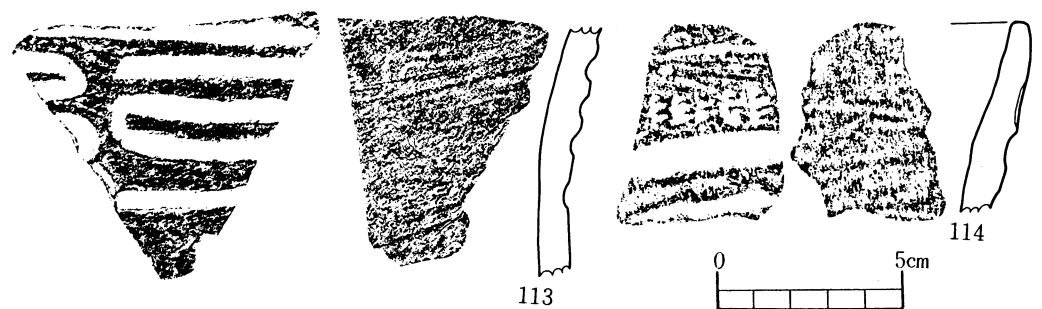
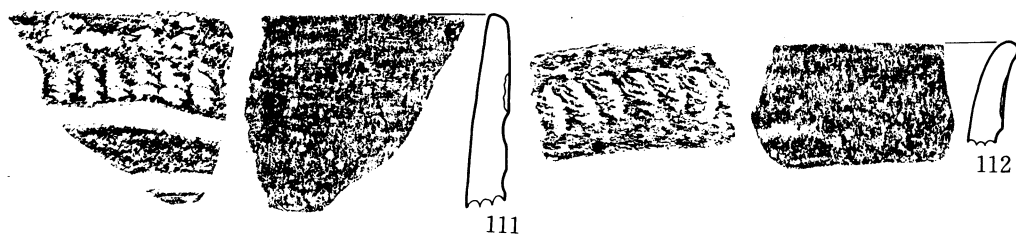
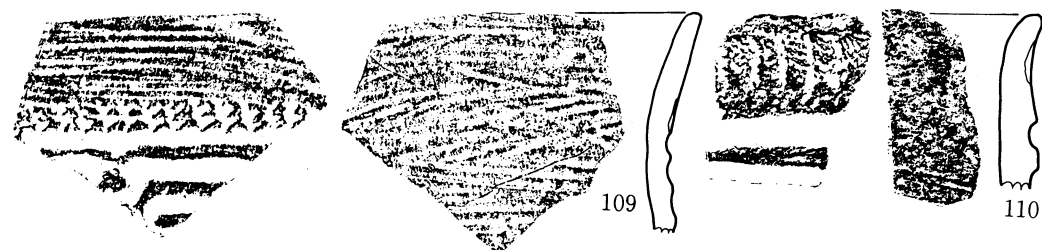
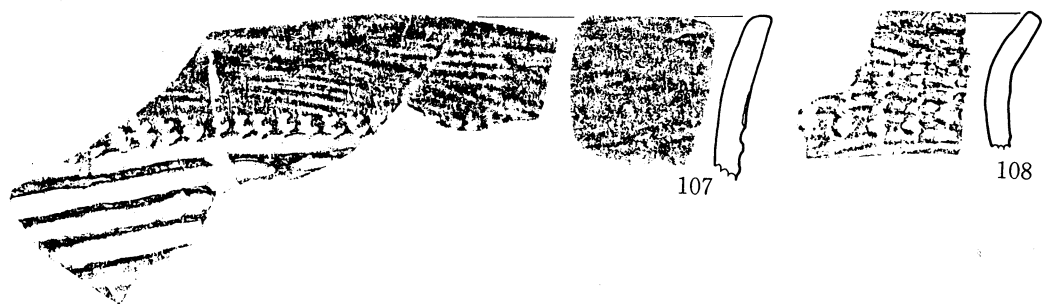
123・124は、口縁部上端に突帯文が巡らされ、その上に貝殻刺突文が施文されるタイプである。このタイプはこの系統に属するか定かでないが、2点と少数のためこの類で説明するこ



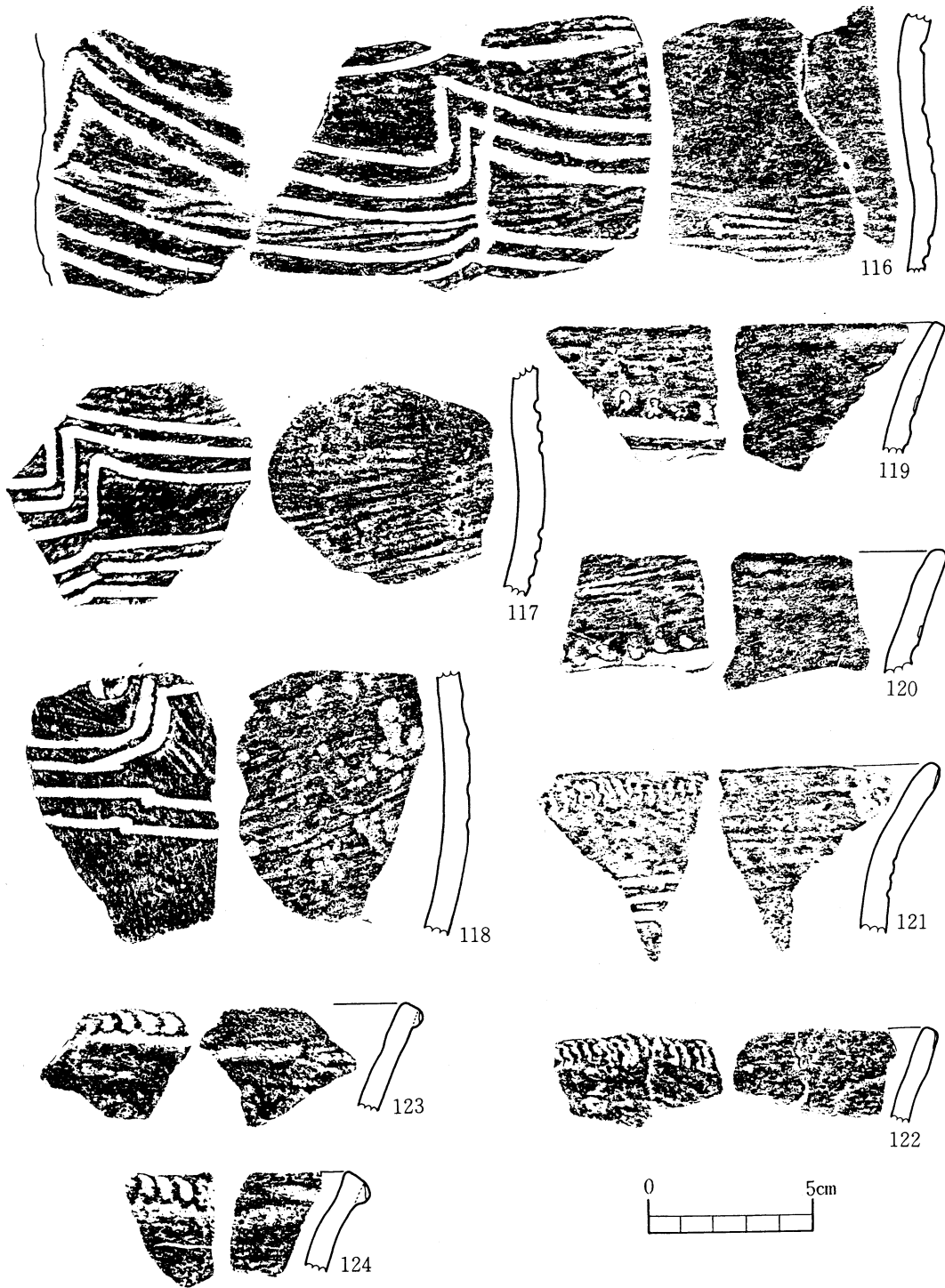
第36図 VI類土器実測図(1)



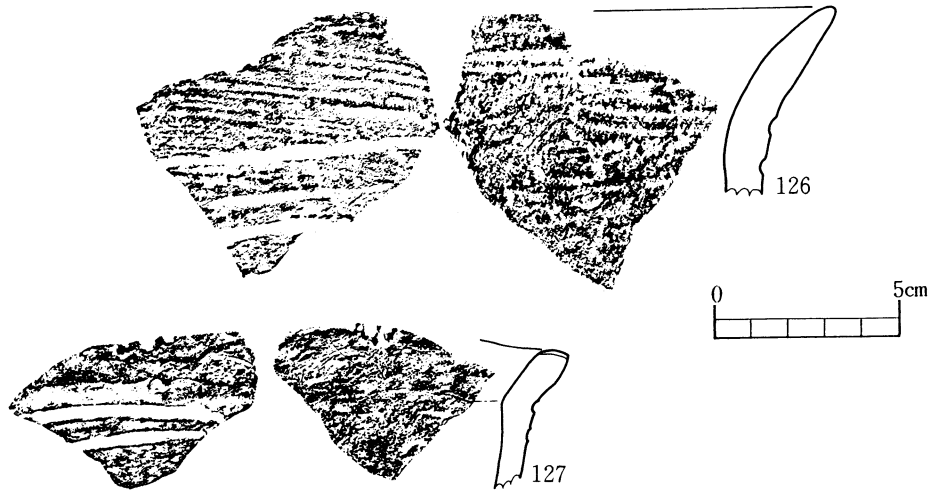
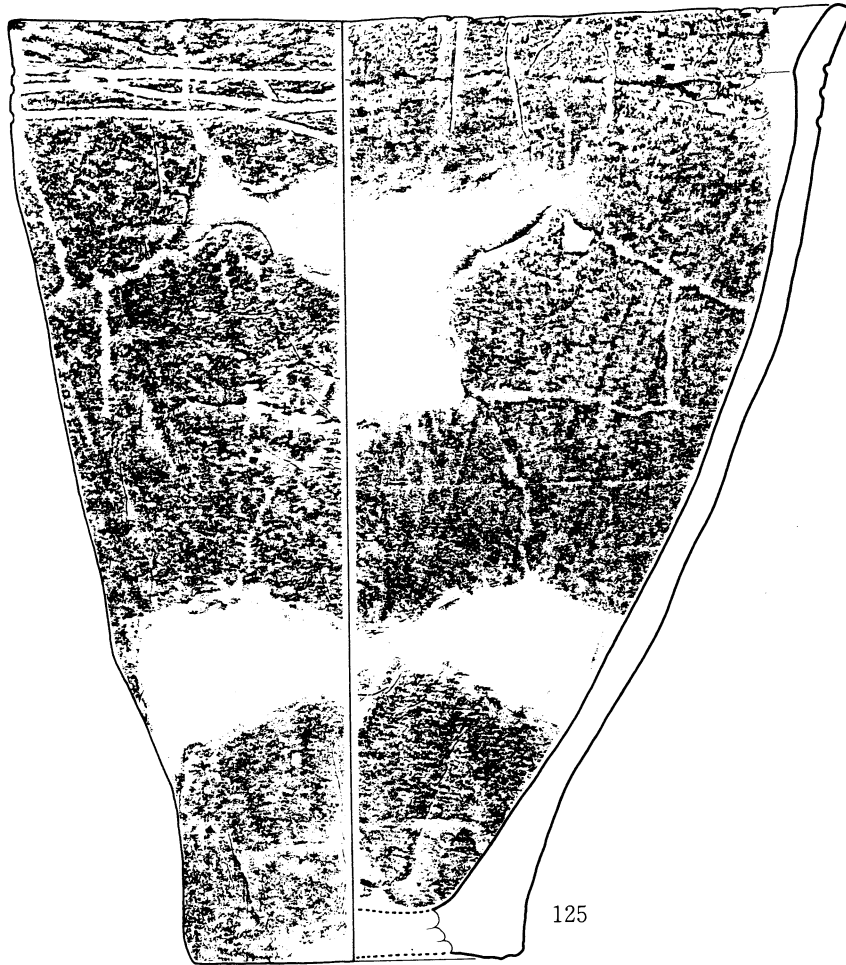
第37图 VI類土器実測図(2)



第38图 VI類土器実測図(3)



第39圖 VI類土器実測圖(4)



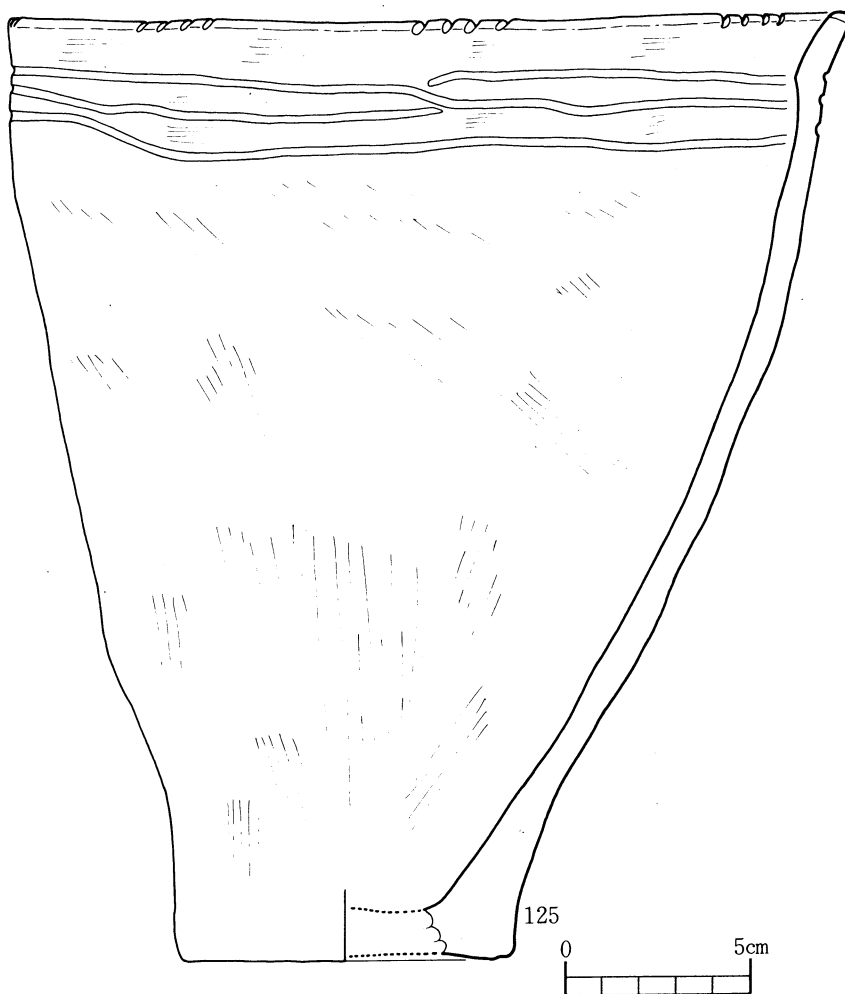
第40図 VI類土器実測図(5)

とにする。その突帯文の下方は無文であるが、小破片のためその下に凹線文が施文されるかどうか不明である。器壁は7mm程度と薄い。器内外面は、ナデ整形の丁寧な調整が施される。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・金雲母・角閃石等を混入する。

VI-3 類土器

VI-3 類土器は、125～127であり細形凹線文系土器である。

125は、本遺跡出土の唯一の完形品である。B2区の狭い範囲に集中して出土している（第35図）。口縁部の直径は22.7cm、底部径は9cm、器高は25.5cmの深鉢形土器である。器形は、底部は平底で胴部は僅かに張る。外面はそのまま外反気味に立ち上がるが、内面は頸部で締まるように内向して稜をつくる。そのため、この稜の部分の器壁は若干厚くなる。そして、口縁部はそのまま外反する。口縁部は平縁口縁で、口唇部は丸みをもって納める。器形は片方に傾



第41図 VI類土器実測図(6)

いており、左右対称とはならない。器外面は荒いヘラ削り整形で仕上げられ、器内面は若干荒いがナデ整形の仕上げが看取される。文様は、口唇部と口縁部の上端だけに集約される。口唇部文様は、斜位の刻目4個が1組となり8箇所へ施文される。口縁外面文様は、3mm程度の細形凹線文が途中で止切れたり交叉したり屈曲したりするが、基本的には3本平行に口縁部を巡る形をつくる。色調は、赤褐色を呈し、胎土には比較的大粒の長石や角閃石を混入する。焼成は普通である。

126は、口縁部破片である。口縁部は大きく外反して、口唇部は細く尖る。内外面とも荒い条痕仕上げである。器壁厚は、約1.2cmを測り比較的厚い。文様は、細片の中に3mm程度の細形凹線文が3本平行に施文されている。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母等を混入する。焼成は普通である。

127は、口縁部破片である。細片ではあるが、その部位から口縁部は、波状山形口縁を呈する。口縁部は、頸部で締まり、そこから大きく外反する。口唇部は丸味をもって納める。口唇部には口縁に直行した3本1組の刻目文が施文される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石や角閃石を混入する。焼成は良好である。

⑥Ⅶ類土器（第44図～第46図－128～148）

Ⅶ類土器は、128～148の土器で平行凹線文間の無文部に貝殻刺突文を充填させるタイプのものである。Ⅶ類土器は、B2区とC2区を中心に分布している。このタイプの貝殻刺突文の施文の仕方には異なった各種の手法がみられる。

128～138は、貝殻腹縁の2肋程度の短い施文具で平行凹線文間に縦位或は若干斜位に刺突充填させるものである。このなかでも個体別に若干の違いが看取される。

128～130・132は、接合はみられないがその形態から同一個体と考えられるものである。128は、その口縁部破片である。口縁部は大きく外反して、口唇部は平坦に納める。まず、その口唇部平坦面の下端の稜部に貝殻刺突文が施文される。そして、頸部付近には、平行する2本の凹線文間に貝殻刺突文を施文している。貝殻刺突文は、若干斜位に施文されている。器壁は8mm程度の厚さである。129・130・132は、いずれも胴部破片である。器壁厚は8mm～9mm程度を測る。器外面の貝殻文の充填された凹線文は、平行及び直角に曲がり文様を展開している。内外面ともナデ整形で仕上げ、焼成も良好である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒や金雲母等を混入する。

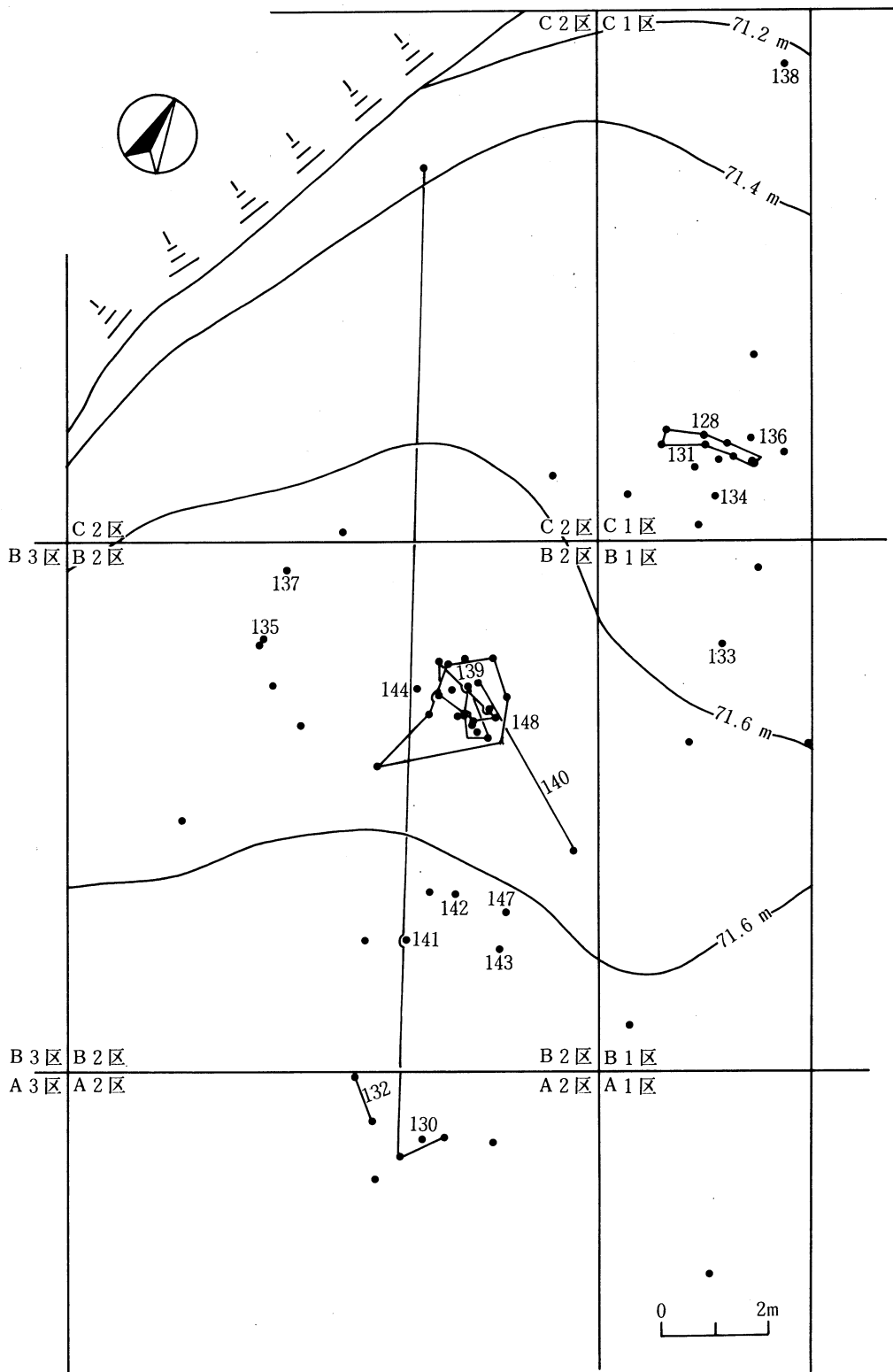
131は、凹線文を流水文状に施文し、その間の無文部に交互に貝殻刺突文を充填させるタイプである。流水文の端部の曲線が文様効果をあげ、さらに、区切りの部分には縦位の流水文状の凹線文も施文される。これらの凹線文は、1本の凹線文が連続して平行線文様を構成しているものである。内外面ともナデ整形で仕上げ、焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒を混入する。

133～137は胴部片である。平行する凹線文間に斜位の貝殻刺突文が充填されている。137のように、平行線文から曲線文へ連続しているものもある。133・134・136は、直接接合しないが同一個体の可能性が強い。色調は明黄褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒を多量に含む。焼成は普通である。135・137も直接接合しないが同一個体の可能性が強い。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母を混入する。焼成は、堅緻で良好である。

138は、口縁部片である。口縁部は大きく外反し、口唇部はやや丸く納める。口唇部の下端には貝殻刺突文を施文している。幅狭な平行凹線文間に、貝殻刺突文を丁寧に施文している。器内外面は、丁寧なナデ整形で仕上げられている。器壁は6mm程度を測り、均厚な仕上げである。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石の細粒が含まれる。焼成は、堅緻で良好である。

139～145・148は、平行凹線文間に横位の1条の貝殻刺突文を施文するタイプである。

139・140・144・145・148は、同一個体片である。胴部は若干張り、頸部で僅かに締まり口縁部は大きく外反する。口唇部は丸味をもって納める。口縁の外反部の外面は無文部で、頸部以下胴部にかけて2本平行凹線文が施文される。2本平行凹線文は、平行線文の他渦文などの曲線文を描く。凹線文間に1条の貝殻刺突文が施されている。器内外は、ナデ整形の丁寧な仕上げがみられる。器壁厚は7mmから8mmを測る。色調は灰褐色から明褐色を呈し、胎土には長石の細粒が含まれる。焼成は、堅緻で良好である。

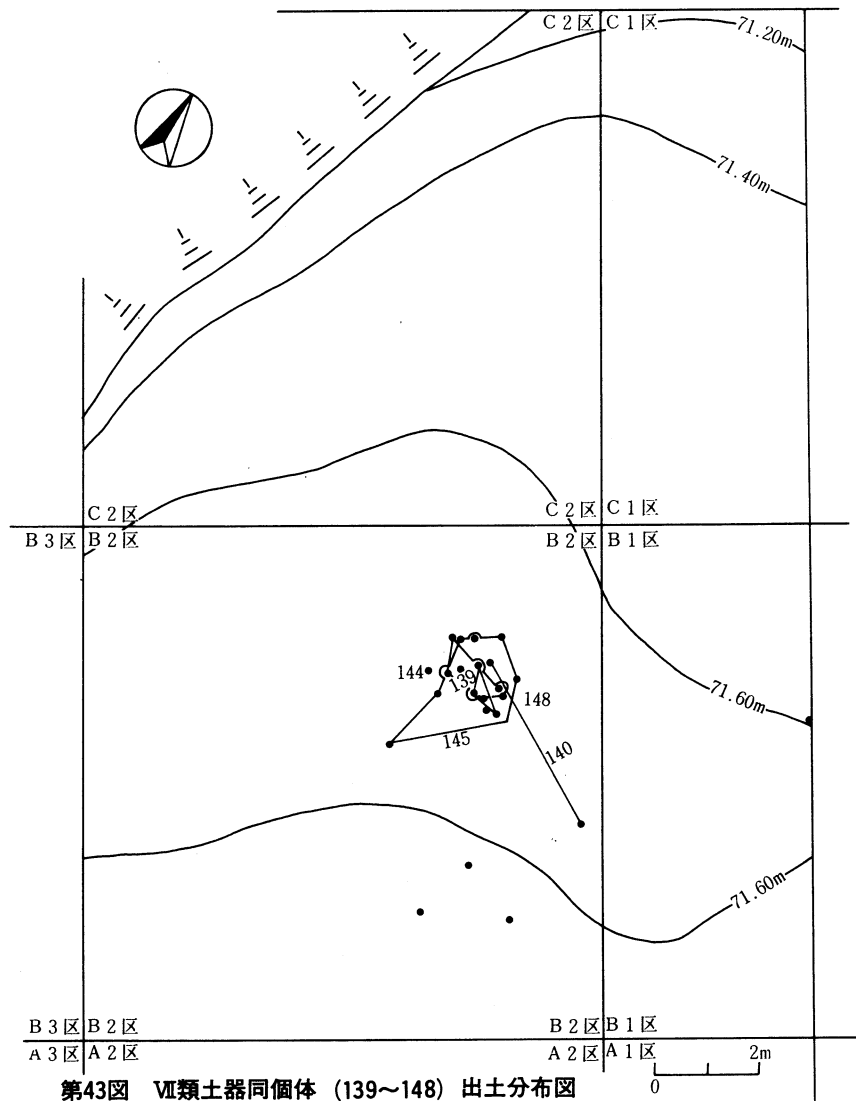


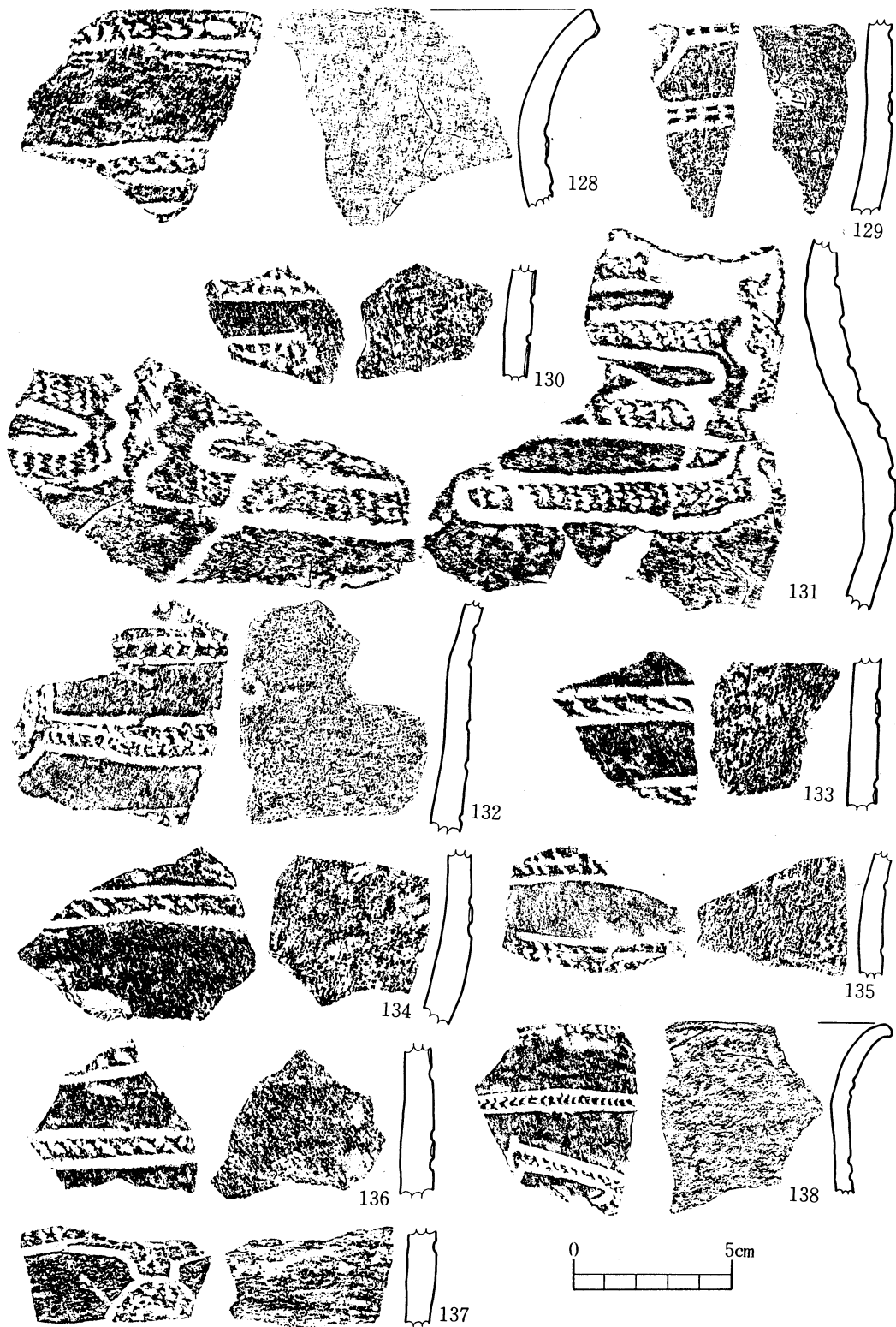
第42图 VII类土器出土分布图
-45-

141～143は、同タイプの別個体である。148などとはほぼ同形態であるが、平行凹線文が口縁直下から施文されている。色調・胎土・焼成は、ほぼ類似している。

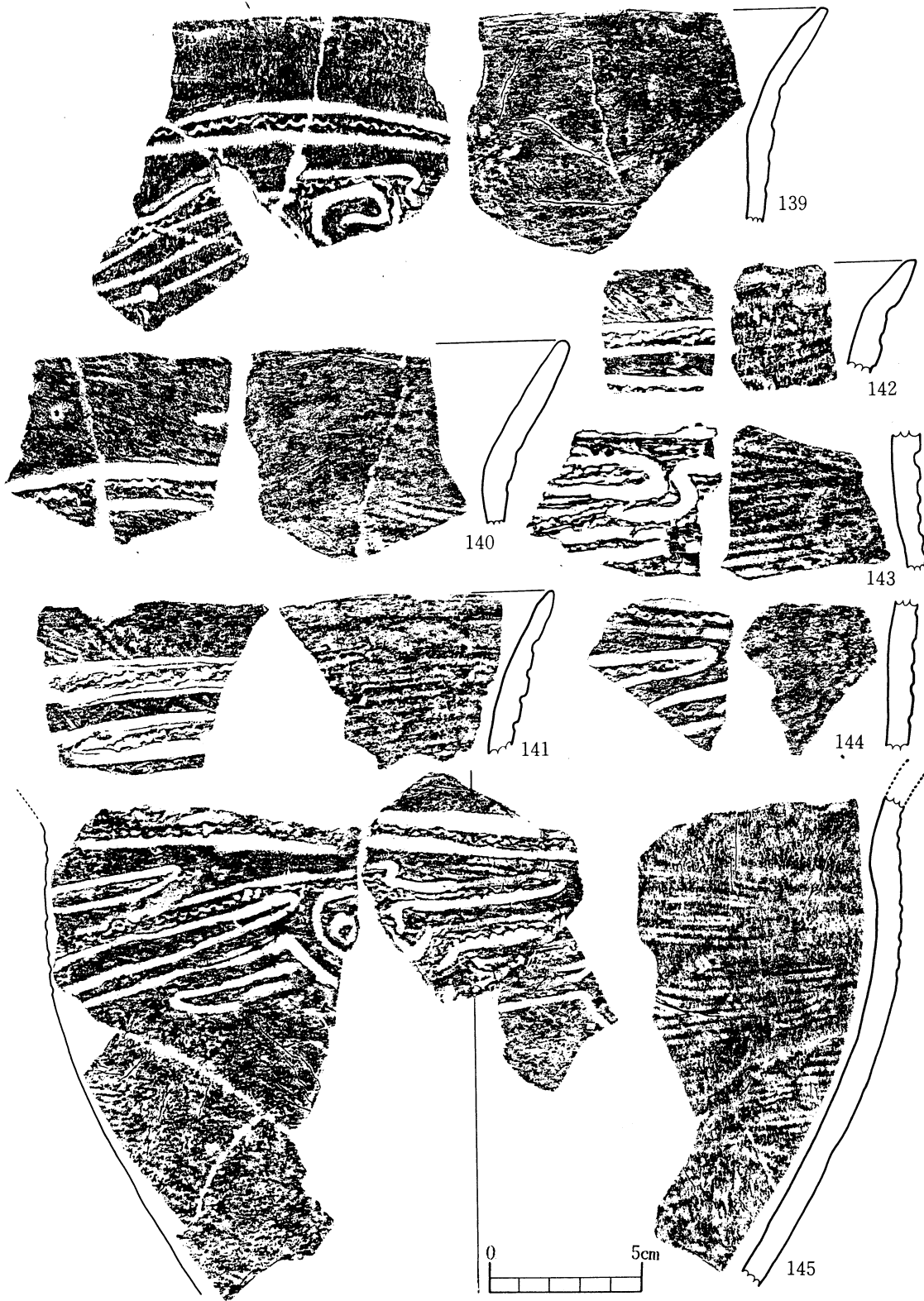
146・147は、平行凹線文間にヘラ状刺突文や円形刺突文を施文するタイプである。このタイプはこの系統には属さないが、2点と少数のためこの類で説明することにする。

146は、若干張った胴部破片である。2本平行の凹線文間にヘラ状施文具で斜位の刺突文が施文されている。器内外とも丁寧なナデ整形で仕上げられている。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石粒や金雲母を混入する。147は、胴部から頸部片である。3本組凹線文は平行線文と渦文を組合せて文様構成している。渦文の内側に円形刺突文が連続して施文されるタイプである。円形刺突文は、約2mm程度の直径を測る。この円形刺突文は平行凹線文と同じ大きさを測り、平行凹線文と同じ施文具で施された可能性が強い。

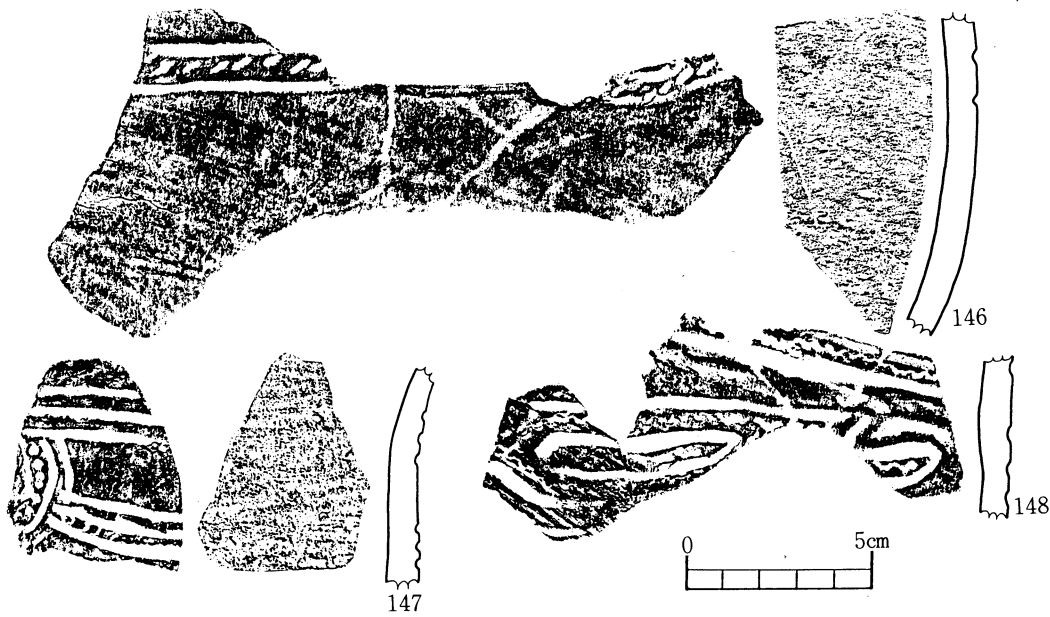




第44图 VII類土器実測図(1)



第45图 VII類土器実測图(2)



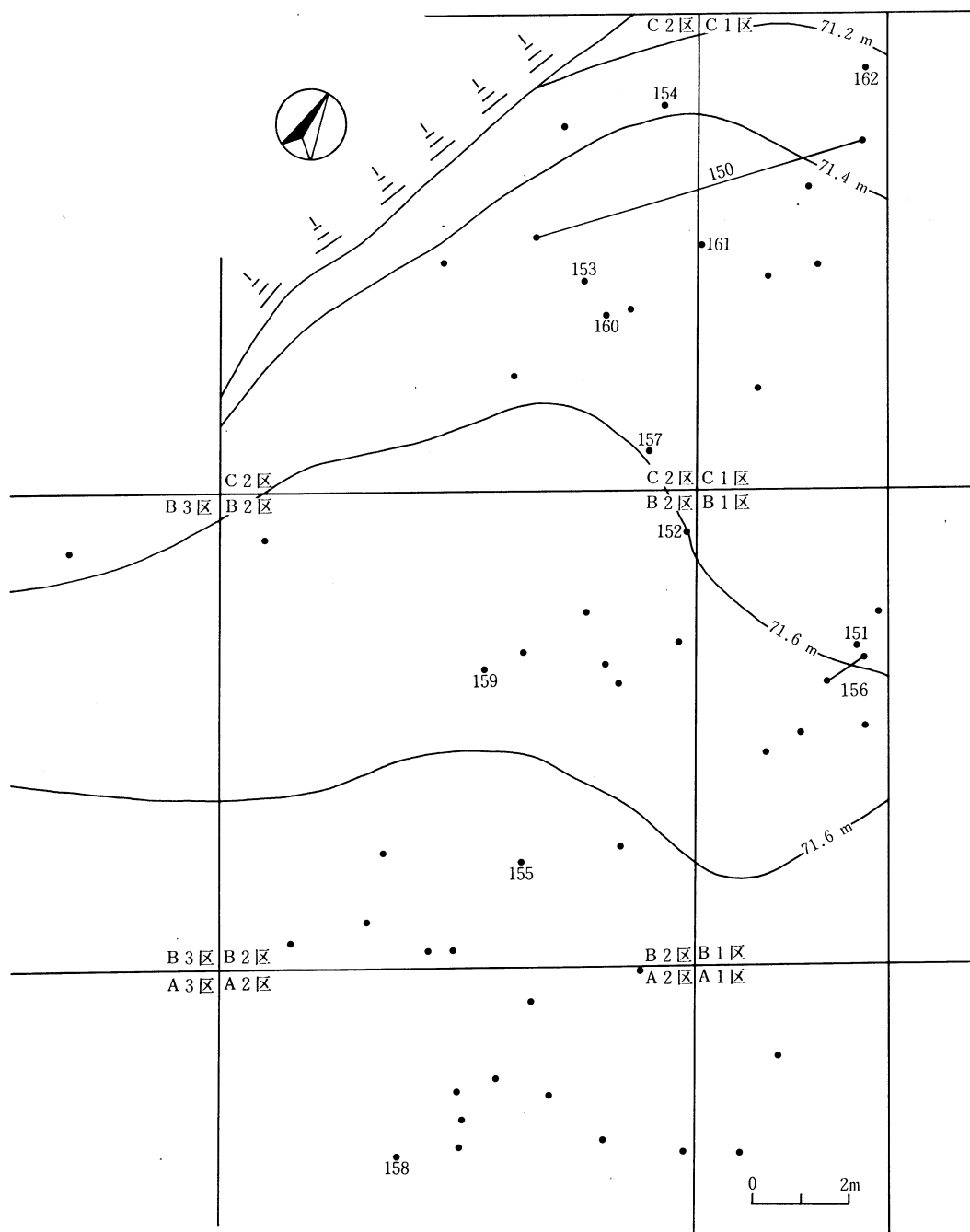
第46図 VII類土器実測図(3)

⑦VIII類土器 (第47図～第49図-149～162)

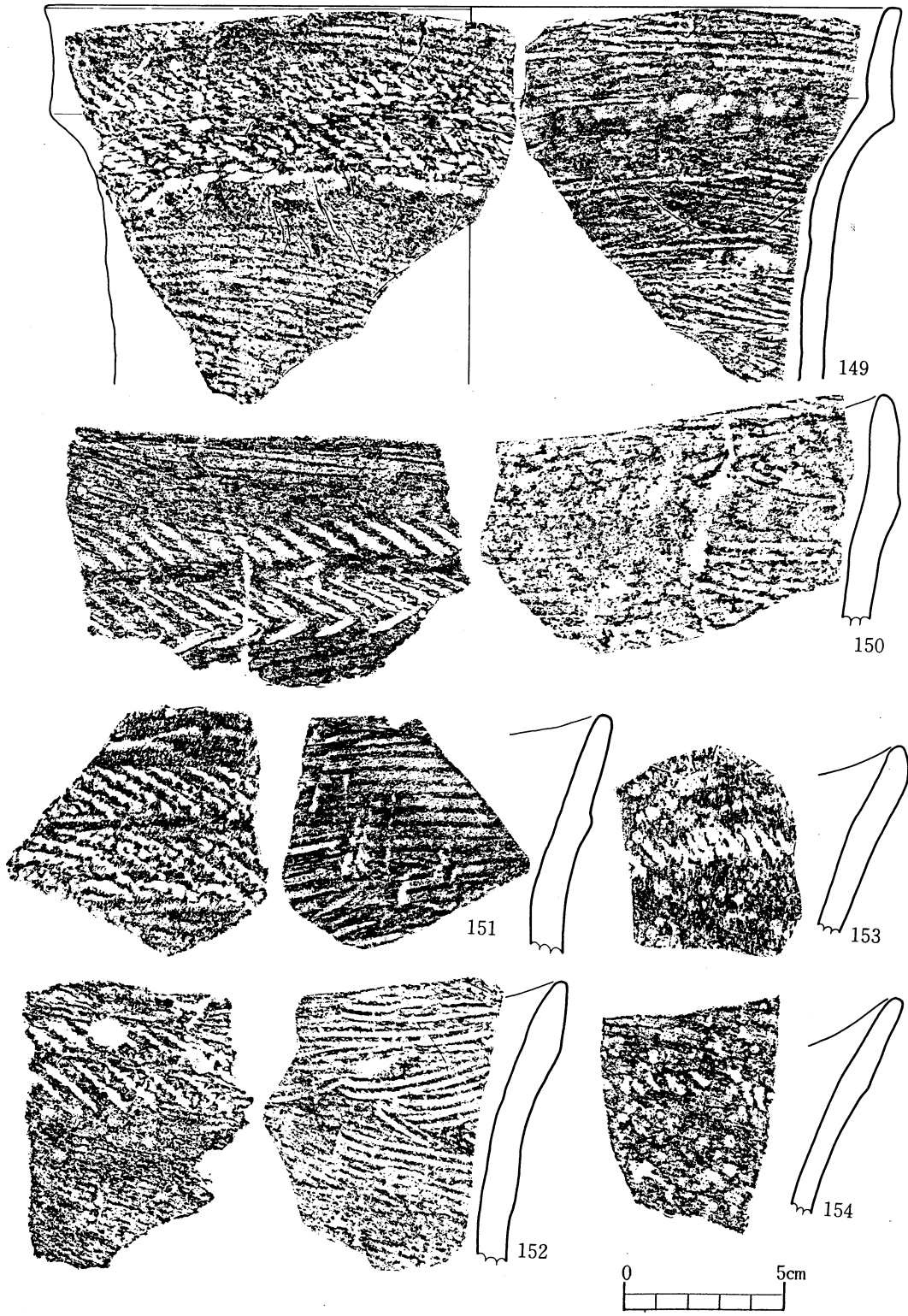
VIII類土器は、149～162で口縁部屈曲系土器である。VIII類土器は、各区から万遍なく出土しているが、特に集中する部分はみられない。口縁部が、平縁口縁(149)と波状の山形口縁(150～162)とがある。また、文様の施文具と手法に若干の違いがみられる。

149は、口縁部が「く」字状に明瞭に屈曲し外反するタイプである。そのため口縁下端に屈曲の明瞭な稜線をつくる。口縁部は平縁で、口唇部は丸味をもった平坦面をつくる。この屈曲稜線の上下には、斜位の貝殻刺突文が施文される。そして下位の貝殻刺突文の下端には横位の貝殻刺突文が施文される。口径は約27cmを測り、器壁は7mm～8mmの均厚に仕上げる。器内外面は、丁寧な条痕整形の後部分的にナデ整形で仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石粒や石英粒を比較的多量に含む。焼成は普通である。

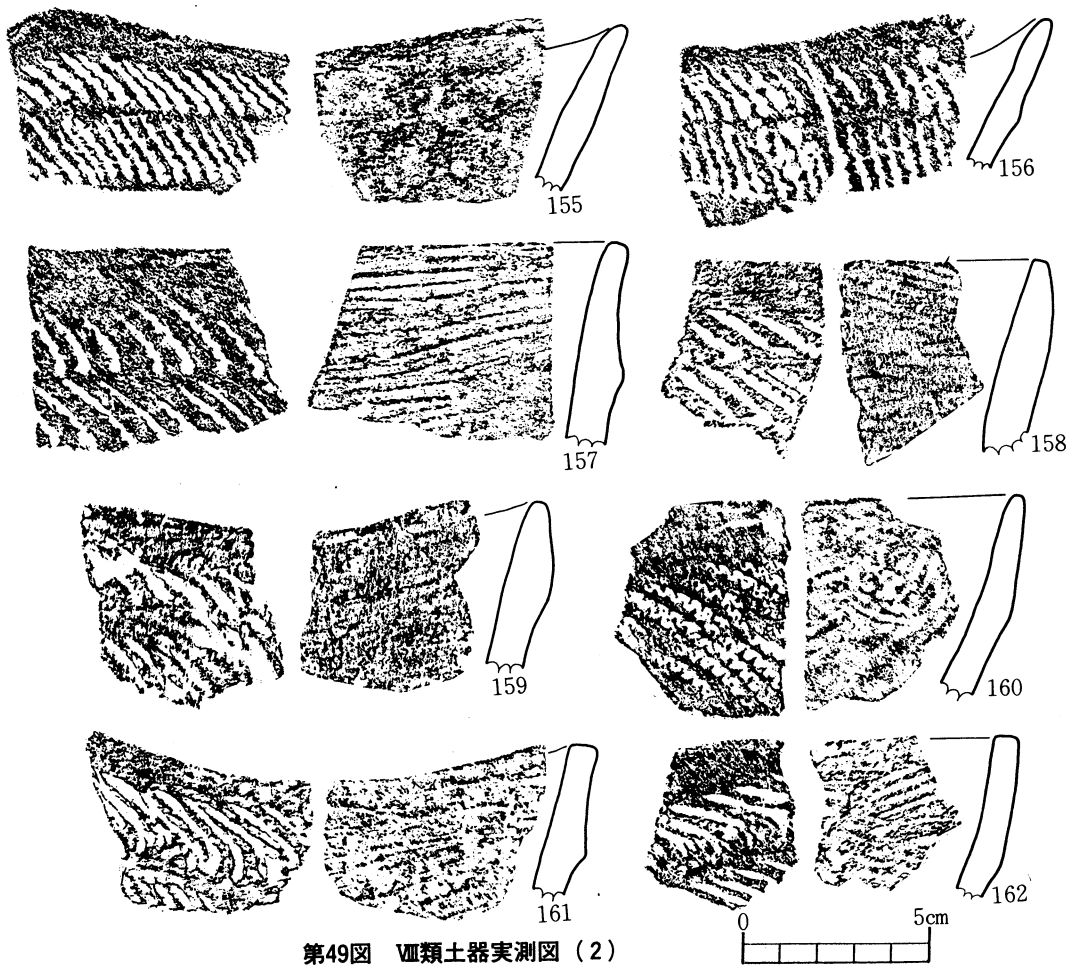
150～162は、口縁外面にわずかに屈曲の稜線を残し、波状の山形口縁をつくるタイプである。150・151は、稜線の上下に斜位の貝殻刺突文を巡らせ、下位の貝殻刺突文の下端にさらに刺突文を施すタイプである。150は、左から右下がりの貝殻刺突文の下に逆斜位のヘラ状の刺突文を施文している。151は、同じ左から右下がりの貝殻刺突文の下に同斜位の貝殻刺突文を施文している。152は稜線の上下の貝殻刺突文だけの施文である。153・154は、稜線の下だけに刺突文が施文されるものである。両方とも刺突文はヘラ状の施文具である。155・156はその形態から同一個体が考えられ、稜線の上下に貝殻刺突文が施され、下端の貝殻刺突文の下にさらに貝殻刺突文を施すタイプである。158・159・161・162は、稜線の上下にヘラ状施文具で刺突文を施すタイプである。下端の刺突文は小破片のため不明である。160は、貝殻刺突文を施すものであるが、貝殻腹縁の筋が明瞭に観察されるものである。



第47图 VII類土器出土分布图



第48図 Ⅷ類土器実測図(1)



第49図 VIII類土器実測図(2)

⑧ IX類土器 (第51図～第52図-163～179)

IX類土器は、各種の底部を一括した。底部には、平底と上げ底がある。上げ底は、178 が1点のみで他は平底である。

平底の底部はそのまま斜めに胴部に立ち上がるものと、172 のように底部の接地面が外側へ拡張して踏ん張り側面で締まりそこから胴部へ立ち上がるものがある。

平底には、圧痕を有するものと無文のものがある。圧痕を有する平底には網代ともじり編みの二種類がある。173・175 はもじり編みで、他は網代である。

163～166 は、網代底で平編みである。経(たて)条は直径2.5mm程度の棒状の植物繊維状の素材で、緯(よこ)条は幅6mmの平たい植物繊維状の素材で編んでいる。

167～172・174 は、網代底の綾編みである。

167 は、網代底の編みの絡みが比較的明確に看取される。経条は径2mm程度の角材が使用され、緯条は4mm程度の平たい素材が使用されている。編みは、変形綾編みである。1本の緯条をみると、右から左へ3超え2潜り1超え2潜り3超え1潜り1超え1潜り1超え1潜り3超えの繰り返しの様である。また、端部は少し編み方が乱れている部分も観察される。

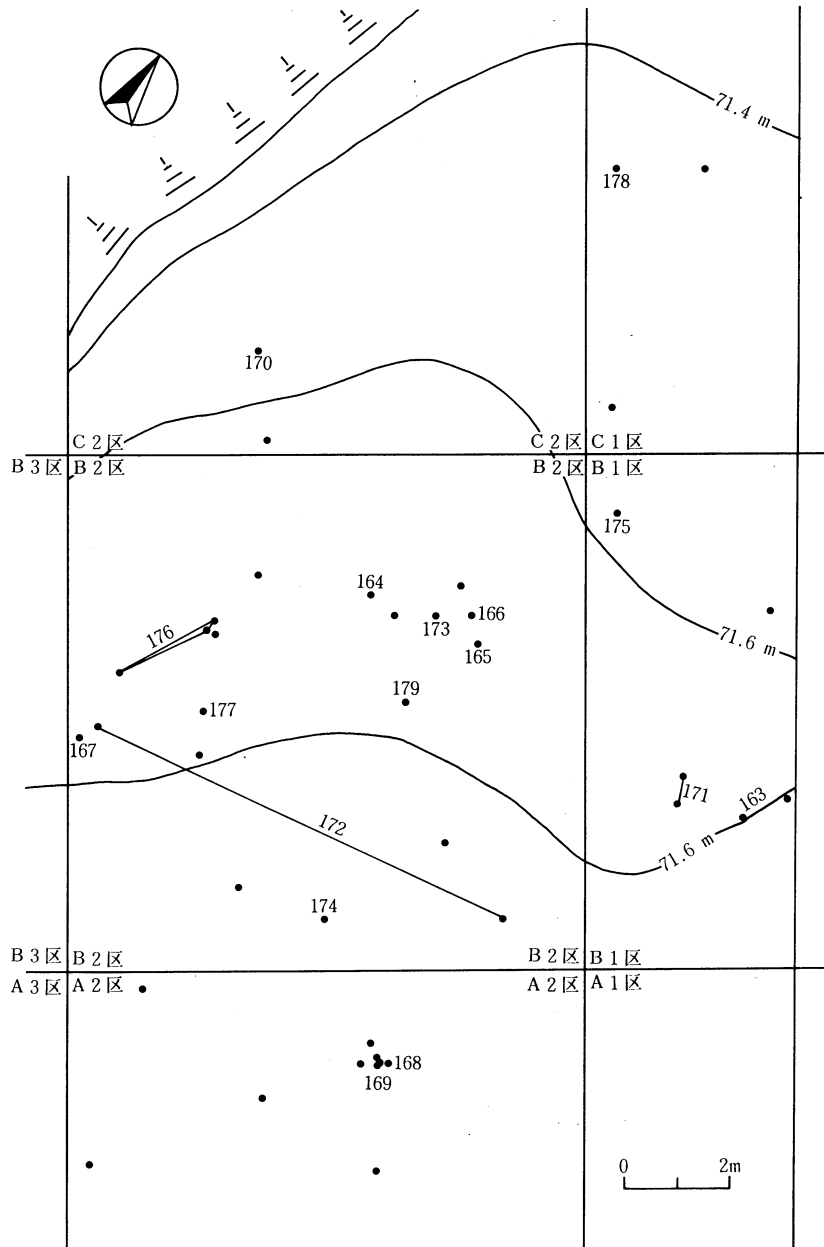
168・169は、綾編みである。同一個体の可能性があり、3超え3潜り1送りであろう。
 170・171は、網代痕跡が僅かに中央に残り、周囲は磨消している。綾編みであろう。
 172は、変形の綾編みである。
 173は、もじり編みである。経条の間隔は4mm～5mmで、緯条の間隔は約1cm幅のもじり編みである。

174は、若干荒いが網代の平編みの可能性が強い。

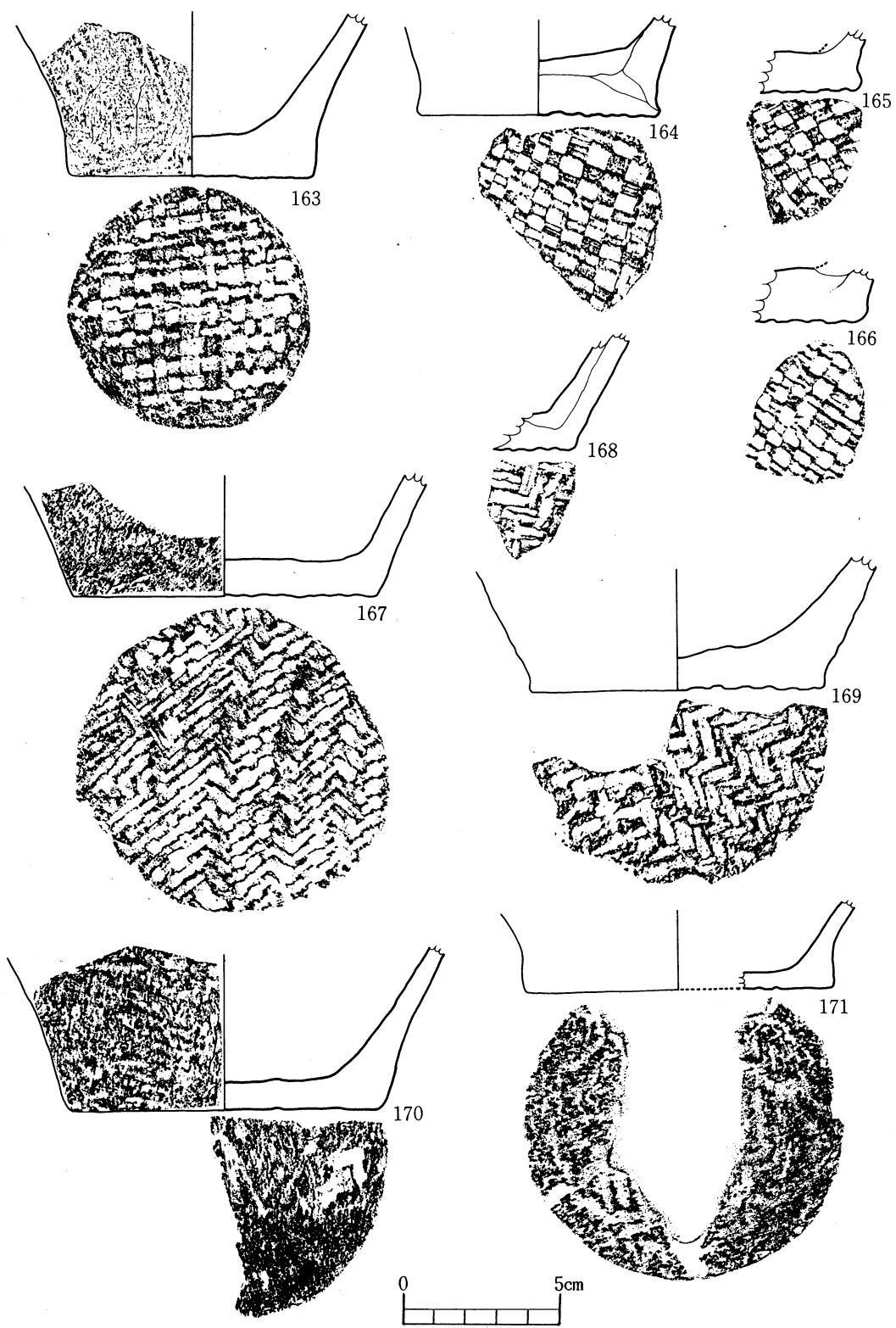
175は、最も明瞭に判明するものでもじり編みである。経条は2mm程度の丸い素材で、経条の間隔は約5mm程度である。緯条は比較的太い紐で絡み、緯条の間隔は約1cm幅のもじり編みである。

176・177・179は、無文の平底である。
 177は、底部側辺は垂直に立ち上がりそこから大きく外反して胴部へ続き、底部が誇張されるものもある。

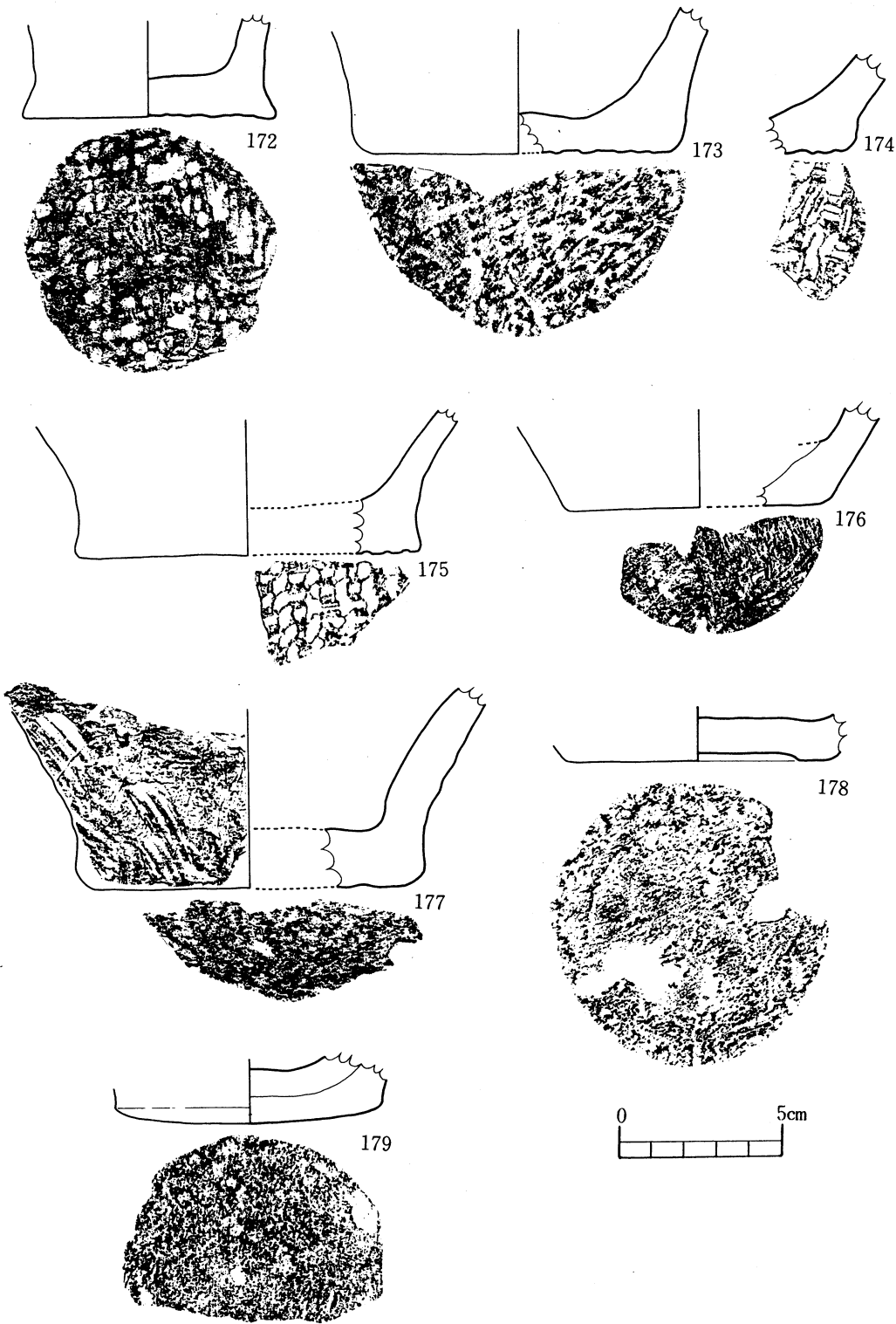
178は、上げ底の底部である。底部の接地面は、幅約1.5cm、高さ約2mm程度の高台状になる。



第50図 区類土器出土分布図



第51图 Ⅹ類土器実測図(1)



第52図 Ⅹ類土器実測図(2)

第1表 出土土器一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調
1	I	71.17	B-2X	深鉢	胴部	器壁厚 0.8~0.9	長石・石英	ナデ	普通	茶褐色
2	〃	71.7	B-3X	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃
3	〃	71.1	B-2X	〃	〃	〃 0.7	長石・金雲母	〃	良好	灰黄色
8	II	63.8	C-1VI	〃	口縁部	口径28.5, 器厚0.8	石英粒・金雲母	条痕	堅緻	暗黒灰色
9	〃	71.395	B-2VI	〃	〃	器壁厚 0.7	長石・金雲母	ナデ	〃	〃
10	〃	71.24	C-1VI	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石	〃	〃	〃
11	〃	64.1	C-1VI	〃	〃	〃 0.8	石英	条痕	〃	黒茶灰色
12	〃	71.28 (他)	C-1VI	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	灰黒色
13	〃	70.975	C-1VI	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	条痕・ナデ	普通	黒灰色
14	〃	70.505	B-2VI	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・金雲母	〃	〃	茶褐色
15	〃	71.61	B-1VI	〃	胴部	〃 0.5~0.6	長石・石英	条痕	堅緻	暗黒灰色
16	〃	71.35 (他)	B-2VI	〃	〃	〃 0.5~0.6	〃	〃	〃	〃
17	〃	71.3	B-2VI	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・金雲母	?	普通	茶褐色
18	〃	71.34	A-2VI	〃	〃	〃 0.7	長石	条痕	堅緻	黄灰色
19	〃	71.56	B-1VI	〃	口縁部	〃 0.7	〃	〃	良好	茶褐色
20	〃	71.49	B-1VI	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	〃	〃	〃
21	〃	71.26	B-1VI	〃	〃	〃 0.6	長石	〃	〃	〃
22	〃	71.46	B-2VI	〃	胴部	〃 0.8	長石・金雲母	〃	堅緻	暗茶褐色
23	〃	71.25	C-1VI	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	〃
24	〃	71.43	B-1VI	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃
25	〃	71.45	B-2VI	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃
26	〃	71.52	A-2VI	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃
27	〃	71.36	B-2VI	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	ナデ	〃	黒色
28	〃	70.97	C-1VI	〃	〃	〃 0.8	長石	条痕	〃	茶褐色
29	〃	62.2	C-1VI	〃	〃	〃 ?	〃	?	〃	茶黒色
30	〃	71.51	C-1VI	〃	〃	〃 0.7	〃	?	〃	茶褐色
31	III-(1)	71.47 (他)	B-2VI	〃	口縁部	復元高29.0, 口径32.7	長石・石英	条痕・ヘラ	〃	暗茶褐色
32	〃	71.67 (他)	B-2VI	〃	底部	底部厚 1.6	〃	ケズリ・ナデ	〃	暗褐色
33	〃	71.445	A-2VI	〃	胴部	器壁厚 0.8~1.0	〃	ケズリ	〃	〃
34	〃	71.5	C-2VI	〃	底部	底部厚 1.8~0.8	〃	ケズリ・ナデ	〃	黄褐色
35	〃	71.585	A-2VI	〃	〃	〃 1.5	〃	?	〃	〃
36	III-(2)	71.33	C-1VI	〃	口縁部	器壁厚 0.8~0.9	〃	条痕	〃	〃
37	〃	71.47	B-1X	〃	〃	〃 0.8	〃	ナデ	〃	〃
38	〃	71.555	B-2VI	〃	〃	〃 0.6	長石・金雲母	〃	良好	茶褐色
39	〃	71.2	B-2VI	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	条痕	普通	黄褐色
40	〃	71.65 (他)	A-2VI	〃	〃	〃 0.4~0.7	〃	条痕・ナデ	〃	茶褐色
41	〃	71.12	C-1VI	〃	胴部	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃
42	〃	71.67	B-1VI	〃	口縁部	〃 0.6	〃	ナデ	〃	〃

第2表 出土土器一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調
43	Ⅲ-(2)	63.7	C-1VI	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8	長石・石英	条痕・ナデ	普通	茶褐色
44	〃	71.46	C-2VI	〃	〃	〃	〃	〃	堅緻	赤褐色
45	〃	71.51	B-2VI	〃	胴部	〃	〃	ケズリ・ナデ	〃	〃
46	〃	71.53	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
47	〃	71.3	B-1VI	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃
48	Ⅲ-(3)	71.61	A-2VI	〃	〃	〃	〃	ケズリ・ナデ	〃	〃
49	〃	71.52 (他)	B-2VI	〃	〃	〃 1.0~1.1	〃	条痕	普通	茶褐色
50	〃	70.315	〃	〃	〃	〃 0.8	〃	条痕・ナデ	〃	〃
51	〃	71.5	A-1VI	〃	〃	〃 0.7	〃	条痕	〃	〃
52	〃	71.34	B-2VI	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	ケズリ・ナデ	〃	〃
53	〃	71.63 (他)	B-2VI	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	〃	〃
54	〃	71.275	B-2VI	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	条痕	〃	〃
55	〃	71.4	〃	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	〃
56	〃	71.53	B-1VI	〃	〃	〃 0.9~0.1	〃	ケズリ・ナデ	〃	〃
57	〃	71.26	B-2VI	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	条痕	〃	〃
58	Ⅲ-(4)	71.27	B-2VI	〃	口縁部	口径23 器壁厚 ^{0.6~} _{0.7}	〃	条痕・ナデ	普通	茶褐色
59	〃	71.69 (他)	B-3VI	〃	〃	器壁厚 0.6~0.7	〃	ナデ	堅緻	〃
60	〃	71.505	〃	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	普通	〃
61	〃	71.43	C-2VI	〃	〃	〃 0.7	〃	条痕・ナデ	〃	〃
62	〃	71.7	B-2VI	〃	〃	〃	〃	ナデ	普通 (やや堅緻)	黄褐色
63	〃	71.645	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
64	〃	71.56	C-2VI	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	条痕・ナデ	普通	茶褐色
65	〃	71.25	B-3VI	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃
66	〃	71.57	B-2VI	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石	〃	〃	〃
67	〃	71.23	B-3VI	〃	〃	〃 0.7	〃	ナデ	〃	赤褐色
68	Ⅲ-(5)	71.48 (他)	B-2VI	〃	口縁部	口径28 器壁厚 0.7	長石・石英	条痕・ナデ	〃	〃
69	〃	71.63	B-2VI	〃	底部近く	器壁厚 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃
70	〃	63.9	C-1VI	〃	底部	底部厚 0.9	〃	条痕	〃	黄褐色
71	〃	71.76	A-1VI	〃	〃	器壁厚 0.6~0.7	〃	〃	良	赤褐色
72	Ⅳ-(1)	71.135	C-2VI	〃	口縁部	〃 0.8	〃	ナデ	堅緻	茶褐色
73	〃	71.33	C-1VI	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
74	〃	71.59 (他)	C-2VI	〃	胴部	〃 0.7~0.8	〃	〃	良好	暗褐色
75	〃	71.37 (他)	C-2VI	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃
76	〃	71.54	A-2VI	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃
77	〃	71.56	C-2VI	〃	〃	〃 0.75	〃	〃	〃	〃
78	〃	71.6	〃	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃
79	〃	71.59	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃
80	〃	71.6 (他)	A-2VI	〃	口縁部	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃

第3表 出土土器一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調
81	Ⅳ-(1)	71.795	B-3Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8	長石・石英	ナ デ	堅緻	暗褐色
82	〃	71.23	B-3Ⅵ	〃	胴部	〃 0.8~0.9	〃	〃	普通	黄褐色
83	〃	71.71	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	良好	茶褐色
84	〃	71.615	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	普通	黄褐色
85	〃	71.135	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石	〃	良好	茶褐色
86	〃	71.54	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	〃	〃	〃
87	Ⅳ-(2)	71.71	B-2Ⅵ	〃	口縁部	〃 1.0	〃	〃	普通	茶褐色
88	〃	71.78	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0~1.1	〃	〃	〃	黄褐色
89	〃	71.57	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.1	〃	〃	〃	茶褐色
90	〃	71.6	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃
91	〃	71.6	A-3Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	〃	〃	〃	〃
92	〃	71.71	A-2Ⅵ	〃	胴部	〃 〃	〃	条痕・ナデ	〃	赤黄褐色
93	〃	71.62	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.1	〃	ナ デ	〃	〃
94	〃	71.42	C-1Ⅵ	〃	口縁近く	〃 1.0	〃	〃	〃	〃
95	〃	71.56	B-2Ⅵ	〃	底部	〃 1.1	〃	〃	〃	〃
96	〃	71.62	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 1.2	〃	〃	〃	〃
97	V	71.42	B-2Ⅵ	〃	口縁近く	〃 0.6~0.7	〃	〃	堅緻	暗黒褐色
98	〃	71.69	B-3Ⅵ	〃	〃	〃 0.5~0.6	〃	〃	〃	黄褐色
99	Ⅵ-(1)	71.57 (他)	C-2Ⅵ	〃	口縁部	口径28.5, 厚1.2	長石・角閃石	条痕・ナデ	普通	赤褐色
100	〃	71.26	C-2Ⅵ	〃	〃	器壁厚 1.1~1.2	〃	〃	〃	〃
101	〃	71.745	B-2Ⅵ	〃	胴部	〃 1.0~1.1	長石・石英	〃	〃	〃
102	〃	71.73	〃	〃	〃	〃 1.0~1.1	〃	〃	〃	〃
103	〃	71.69	〃	〃	口縁部	〃 1.0~1.2	〃	〃	〃	〃
104	Ⅵ-(2)	71.68 (他)	〃	〃	〃	口径30, 器壁厚 ^{0.9} ~1.0	長石・石英・金雲母	〃	良好	黄褐色
105	〃	71.66 (他)	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃
106	〃	71.71 (他)	B-1Ⅵ	〃	胴部	器壁厚 0.9~1.0	〃	〃	〃	〃
107	Ⅵ-(3)	71.74 (他)	B-2Ⅵ	〃	口縁部	〃 0.7	〃	〃	〃	茶褐色
108	〃	71.42	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石・金雲母	〃	〃	暗褐色
109	〃	65.2	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	長石・石英・金雲母	〃	〃	茶褐色
110	〃	71.69	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	長石・金雲母	ナ デ	〃	茶褐色
111	〃	71.345	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	〃	条痕・ナデ	〃	〃
112	〃	71.69	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	長石・石英	ナ デ	〃	〃
113	〃	71.67	B-1Ⅵ	〃	胴部	〃 0.9	長石	〃	〃	黄褐色
114	〃	71.46	C-1Ⅵ	〃	口縁部	〃 1.0	〃	条痕・ナデ	〃	茶褐色
115	〃	71.72	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	長石・金雲母	〃	〃	灰黄褐色
116	Ⅵ-(4)	71.36	B-2Ⅵ	〃	胴部	〃 0.8~0.9	〃	〃	堅緻	〃
117	〃	71.65	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8~1.0	長石・石英・金雲母	〃	〃	〃
118	〃	71.75	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	〃	〃	黄褐色

第4表 出土土器一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調
119	Ⅵ-(4)	71.715	B-1Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8	長石・金雲母	条痕・ナデ	普通	黄褐色
120	〃	〃	A-1表	〃	〃	〃 0.9	〃	ナデ	〃	〃
121	〃	71.69	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	条痕・ナデ	良好	赤褐色
122	〃	71.555 (他)	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	〃	ナデ	〃	〃
123	〃	71.62	C-2Ⅵ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄灰色
124	〃	71.44	B-2Ⅵ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
125	Ⅵ-(5)	71.7	B-2Ⅵ	〃	完形	口径22.7, 高さ25.5	長石・角閃石	ケズリ・ナデ	普通	赤褐色
126	〃	71.53	C-2Ⅵ	〃	口縁部	器壁厚 1.2	長石・金雲母	条痕	〃	茶褐色
127	〃	71.745	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.6	長石・角閃石	条痕・ナデ	良好	〃
128	Ⅶ-(1)	71.5	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.9	〃	ナデ	〃	赤褐色
129	〃	71.55	B-2Ⅵ	〃	胴部	〃 0.8~0.9	長石・石英・金雲母	〃	〃	暗黄褐色
130	〃	71.415	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	良	〃
131	〃	71.51 (他)	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.9	長石・石英	〃	普通	明黄褐色
132	〃	71.575 (他)	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.6~1.0	長石・石英・金雲母	〃	良好	暗黄褐色
133	〃	71.45	B-1Ⅵ	〃	口縁部	〃 0.9~1.0	〃	〃	〃	明黄褐色
134	〃	63.2	C-1Ⅵ	〃	胴部	〃 0.8~1.1	〃	〃	〃	〃
135	〃	71.68	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・金雲母	〃	〃	暗黄褐色
136	〃	71.38	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.9~1.2	長石・石英	〃	〃	明黄褐色
137	〃	71.63	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・金雲母	〃	〃	暗黄褐色
138	〃	71.26	C-1Ⅵ	〃	口縁部	〃 0.6	長石	〃	〃	暗褐色
139	Ⅶ-(2)	71.62 (他)	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	堅緻	灰明褐色
140	〃	71.73 (他)	B-2Ⅵ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
141	〃	71.7	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.9	長石・金雲母	条痕・ナデ	良好	茶褐色
142	〃	71.58	B-2Ⅵ	〃	〃	〃	長石・石英・金雲母	ナデ	〃	〃
143	〃	71.67	B-2Ⅵ	〃	胴部	〃 0.6~0.9	長石・金雲母	条痕・ナデ	〃	暗褐色
144	〃	71.64	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	ナデ	〃	灰明褐色
145	〃	71.65 (他)	B-2Ⅵ	〃	〃	胴径 28	〃	〃	〃	〃
146	Ⅶ-(3)	71.61	A-2Ⅵ	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0	長石・金雲母	〃	〃	黄褐色
147	〃	71.67	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7~0.9	長石・石英	〃	〃	赤褐色
148	〃	71.42 (他)	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	灰明褐色
149	Ⅶ-(1)	71.695	C-2Ⅵ	〃	口縁部	口径27, 器壁厚0.7~0.8	〃	条痕・ナデ	普通	茶褐色
150	〃	71.32 (他)	C-1Ⅵ	〃	〃	器壁厚 1.0	〃	〃	良	〃
151	〃	71.53	B-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	〃	普通	赤褐色
152	〃	71.64	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	長石・金雲母	〃	〃	茶褐色
153	〃	71.65	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	〃	〃	〃
154	〃	71.26	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	長石・石英・金雲母	〃	〃	〃
155	Ⅶ-(2)	71.69	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英	ナデ	〃	〃
156	〃	71.53	B-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃

第5表 出土土器一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調
157	Ⅶ-(2)	71.405	C-2Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚 1.0	長石・金雲母	条痕・ナデ	良好	赤褐色
158	〃	71.74	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.1	長石・石英	〃	普通	褐色
159	〃	71.78	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0~1.4	〃	〃	〃	〃
160	〃	71.7	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.0	〃	〃	〃	〃
161	〃	71.45	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃
162	〃	71.25	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・金雲母	〃	〃	茶褐色
163	Ⅸ-(1)	71.35	B-1Ⅵ	〃	底部	底径 7.9	長石・石英・金雲母	〃	〃	灰褐色
164	〃	71.63	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 7.8	長石・石英	ナデ	良好	灰褐色
165	〃	71.28	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.4	〃	?	〃	〃
166	ノ	71.57	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 1.8	〃	?	〃	〃
167	〃	71.715	〃	〃	〃	〃 9.7	〃	ナデ	普通	〃
168	〃	71.555	A-2Ⅵ	〃	〃	〃 ?	〃	〃	〃	暗褐色
169	〃	71.41	〃	〃	〃	〃 9.4	〃	〃	〃	灰褐色
170	〃	71.63	C-2Ⅵ	〃	〃	〃 10.3	長石・石英・金雲母	条痕・ナデ	良好	茶褐色
171	〃	71.54	B-1Ⅵ	〃	〃	〃 9.8	長石・金雲母	ナデ	〃	〃
172	〃	71.685	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 7.9	長石	〃	普通	茶褐色
173	Ⅸ-(2)	71.55	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 10.0	〃	〃	〃	〃
174	〃	71.7	B-2Ⅵ	〃	〃	?	長石・石英	条痕・ナデ	〃	〃
175	〃	71.495	B-1Ⅵ	〃	〃	底径10.8	〃	〃	〃	〃
176	〃	71.395	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 8	〃	〃	良	暗褐色
177	〃	71.73	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 11	〃	ナデ	普通	灰褐色
178	〃	71.59	C-1Ⅵ	〃	〃	〃 8.5	〃	〃	良好	茶褐色
179	〃	71.73	B-2Ⅵ	〃	〃	〃 8.0	〃	〃	〃	〃

加工品(1)

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調
417		71.49	C-1Ⅳ	深鉢	口縁部	径 5×4.7	長石・石英	やや面取り	普通	黄褐色
418		71.785	A-2Ⅳ	〃	胴部	〃 6×4.8	長石・金雲母	打ち欠き	〃	赤褐色
419		71.56	B-1Ⅳ	〃	〃	〃 4.3×4.1	〃	やや面取り	〃	茶褐色
420		71.77	B-2Ⅳ	〃	〃	〃 4×4.5	長石	打ち欠き	〃	〃
421		71.55	B-1Ⅳ	〃	〃	〃 3.3×3.4	長石・金雲母	〃	〃	〃
422		71.76	B-2Ⅳ	〃	〃	〃 3.3×3.4	長石	やや面取り	〃	暗褐色

3 石器

石器は、いずれもⅥ層出土のものである。石器Ⅰ（石鏃）、石器Ⅱ（石錐・石匙）、石器Ⅲ（石斧）、石器Ⅳ（磨石）、石器Ⅴ（敲石）、石器Ⅵ（石弾）、石器Ⅶ（凹石）、石器Ⅷ（石皿）に類別して説明する。

①石器Ⅰ（石鏃）（第56図～第67図—180～361・363・365～381）

石器Ⅰ（石鏃）は、完形品・破損品・破損部分品・未製品・用途不明品等を含め202点出土している。材質のほとんどは黒耀石で、気泡の多いものと透き通った縞模様のもの、光沢のある黒色の良質のものがある。そのほか、わずかに玄武岩、石英製のものもみられる。

形態はバラエティーに富んでおり、ここでは比較的まとまりのあるものを9つに分類を試みた。まず、大別してⅠ類（平基式）・Ⅱ類（凹基式）・Ⅲ類（円基式）とし、さらに、Ⅰ類をAとBの2つに、Ⅱ類をC・D・E・F・Gの5つに、Ⅲ類をHに、最後に未製品及び特殊な形態のものをⅣ類にそれぞれ分類した。以下に説明をする。

石鏃形態分類模式図



ⅠA類



ⅠB類



ⅡC類



ⅡD類

ⅠA類—ほぼ正三角形を呈する形態（第56図—180・182～18

6・188～191・193・195・196 第57図—199・202～208）

204・205・207はずいぶん破損しているが、この形態に属するものと推定できる。193・199・203は正三角形で丸みをもつものである。計測平均値は大体長さが13.8mm、最大幅16.8mm、厚さ3.16mmで破損品がきわめて多い。ほとんどがB2区のⅥ層出土である。材質は透明感の少ない黒色の黒耀石と気泡のやや多い黒耀石とがある。

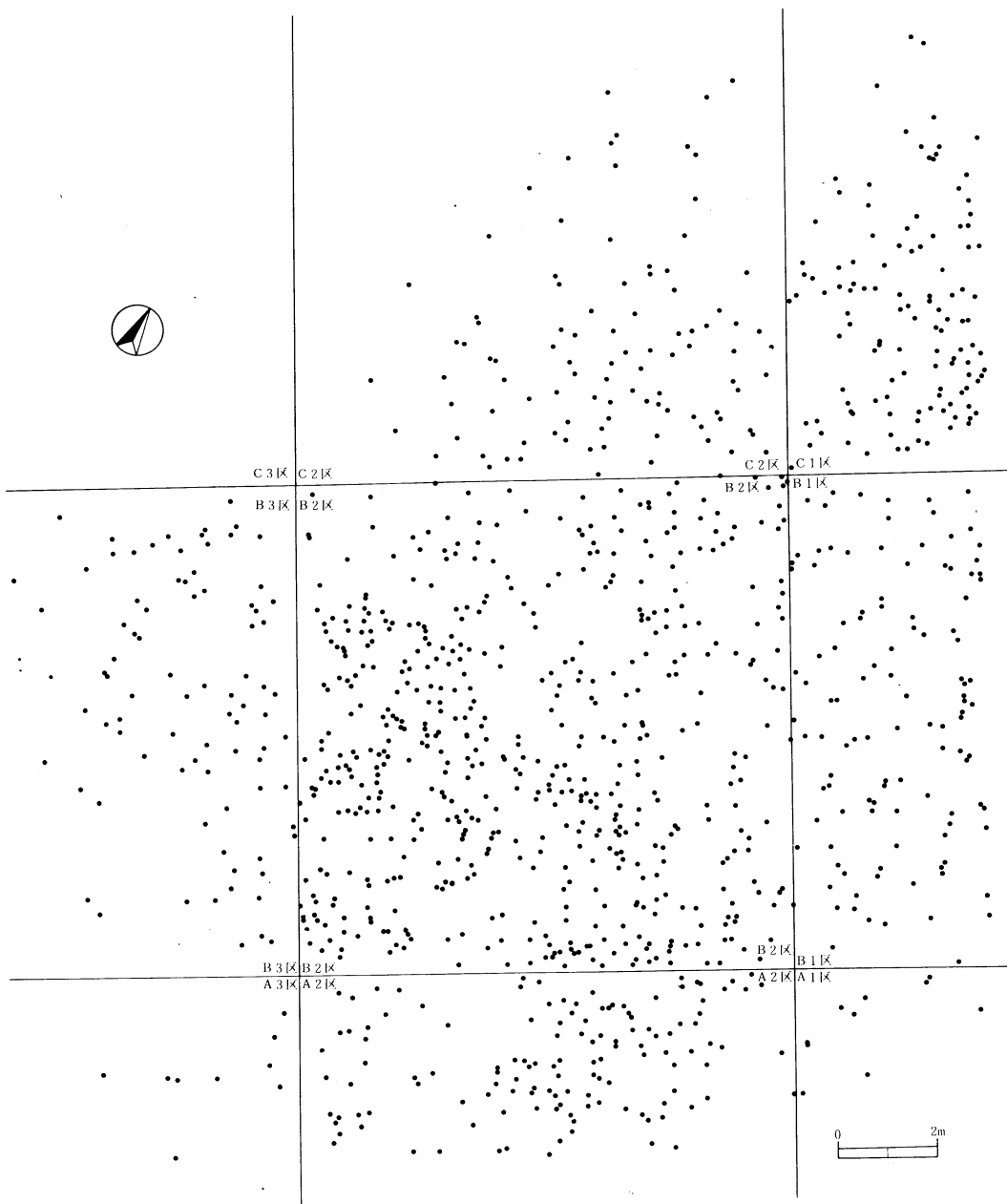
ⅠB類—ほぼ二等辺三角形を呈する形態（第56図—181・187・

192・194・197 第57図—198・200・201・209・210）

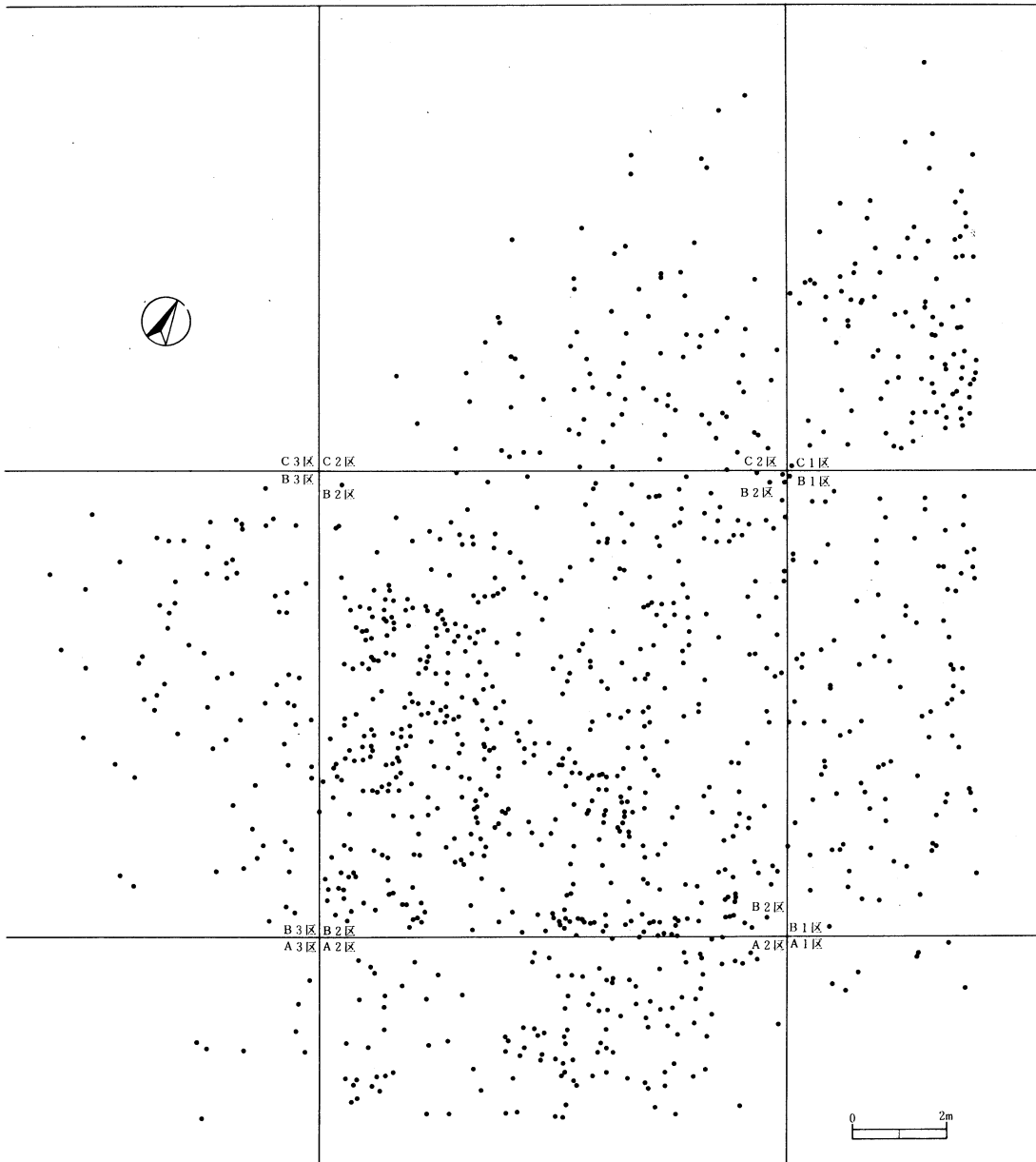
194は基部両端を欠くが、197は側縁部を欠き、やや分厚く歪な形態を有するが、ここに分類できる。計測平均値は大体長さが15.35mm、最大幅13.0mm、厚さ3.5mm、ⅠA類より長く、最大幅は短い。ⅠB類は、C2区のⅥ層からの出土が多い。縄文時代後期土器に伴うものと推定できる。材質は黒色を呈する気泡の多い黒耀石である。

ⅡC類—正三角形または二等辺三角形の基底部にゆるやかな弧状の抉りがはいる形態

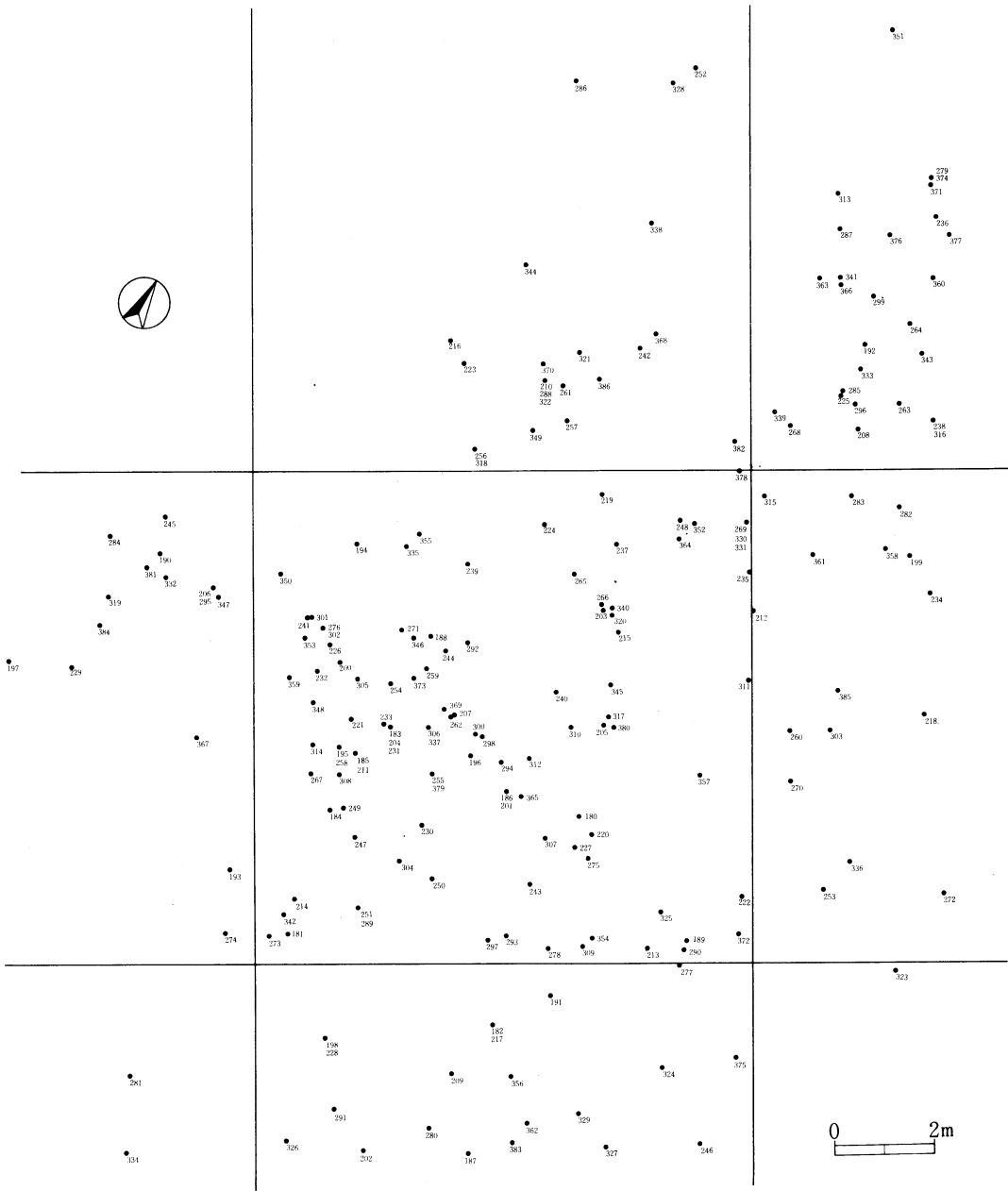
（第58図—211～214・216～219・222・226～229・232・



第53図 石器出土分布図



第54図 黒耀石出土分布図



第55図 石器 I (石鏃) 出土分布図

233・235 第59図—238・243・244・246・248・250
 第61図—273・276・277)



II E類

長幅比が小さい一群である。このタイプは212・215・223のような側縁部分が内湾気味のもの、219・222・227・229・235のような外湾気味の側縁部とに分けることができる。この形態は小型のものが多く、比較的大きな破損は少ない。計測平均値は長さが約11.8mm、最大幅14.0mm、厚さ約2.3mm、抉りの深さ約1.17mm、抉りの幅約9.5mm、重さ0.30gを測る。材質は比較的良好の黒耀石が多く226・229等は透き通った縞模様の黒耀石である。

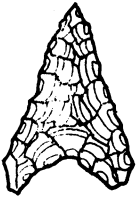


II F類

II D類—正三角形または二等辺三角形の基底部中央に小さく抉りをもつ形態

(第58図—215・220～225・230・231・234・236

第59図—237・239～242・245・247・249・251～254、第61図—275)



II G類

II C類と同様、長幅比の小さな一群である。小型のものが多く計測平均値は長さが13.3mm、最大幅約14.9mm、厚さ約2.7mm、抉りの深さ約1.15mm、抉りの幅約7.2mmを測る。比較的に透き通った縞模様の黒耀石がみられる。



II H類

II E類—ほぼ正三角形を呈し、側縁部がやや内湾気味で先端または両脚部のいずれかが丸味を帯びた状態

(第60図—255～267)



IV類

265のような抉りの深いもの、258のような抉りの浅いもの、261・263のような未製品状のものもあるが同一のグループに含めた。計測平均値は長さが約14.4mm、最大幅14.4mm、厚さ3.12mm、抉りの深さ1.4mm、抉りの幅約9.5mmを測る。材質はすべて黒耀石であるが、267は鈍い色の黒耀石で他のものと様相が異なる。

II F類—形態はそれぞれ異なるが比較的に抉りの深い一群。

(第61図—268～272・274・275・279～281、第62図—286・287)

抉りの深さの平均値約5.5mm、270・272の両脚部がやや細長くつくられ「く」の字形になったもの、279のような側縁部下半に一对の突起部を作り出している有刺状のもの280・281のような側縁全体に歯をつけた鋸歯鏃、274は深い抉りと肩をもつ特殊な鏃である。286は本遺跡出土中最大の石鏃である。全体に丁寧な調整が施されており、他にみられない良好の黒耀

石を使用している。287 も長さ30mmと大きく、乳白色を呈した黒耀石である。

II G類—胴部がややすぼまり脚部が張り出す形態。先端・脚部は鋭く尖り、なだらかな挟りをもつ形態

(第61図— 278・282～285)

284・285は、大小の違いはあるものの形態的にはほとんど同じである。材質も共に玄武岩である。282は、表裏ともに主要剥離面を残し基底部は未調整の剥片鏃である。

III H類—最大幅が下位にあり、基底部が半円形ないしは平基形になる形態

(第62図— 288～297)

293は、一部欠損しているが基部が円状に突出した円基鏃とよばれるものである。295は、円基鏃というよりは五角形鏃に近い。表裏ともに主要剥離面を残す。全体的にB2区からの出土が多い。すべて黒耀石製である。

VI類—石鏃の破損品及び形態不明品

(第63図— 298～306・311)

片方あるいは両方に押圧調整剥離を施し、表裏に剥離面を残した製作途中品の他、素材剥片のもの、素材剥片に気持だけ調整を加えたものなどがある(第63図～第67図)。片方の両面だけに丁寧な剥離を施したスクレーパー状の石器(第67図— 373～381)などがある。なかでも300は逆ハートの形態をなし、透き通った石英製の珍しいものである。324は、未調整ではあるが五角形鏃に含まれる。365～367は細かい調整が加えられているが、用途は不明である。332・353・357は、素材剥片から形状調整と厚みの調整に入った段階で製作を中止したものと考えられる。IV類は明らかに削器と考えられるものもあるが、いずれにしても、大部分のものは製作途上品と考えられる。

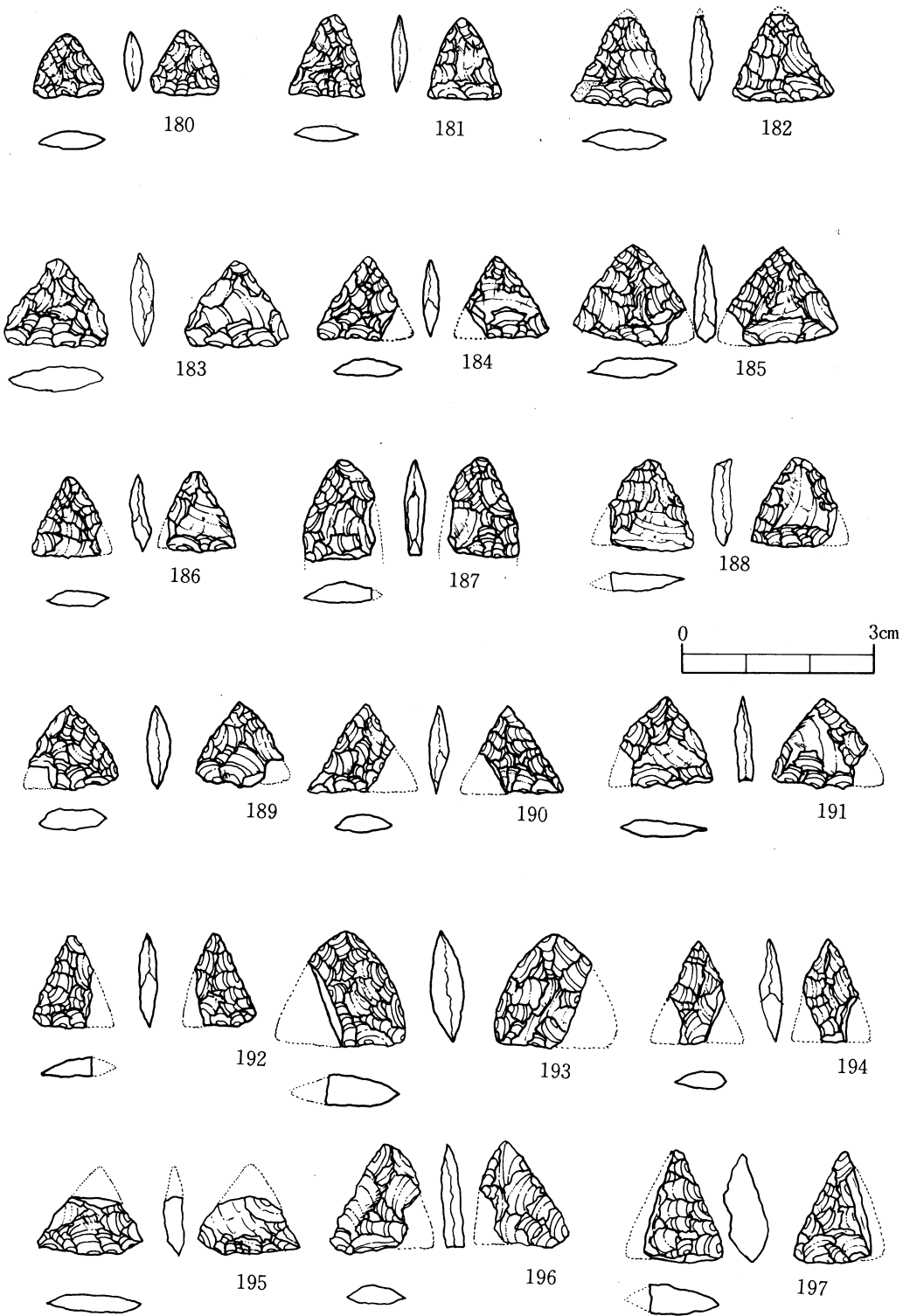
②石器II (石錐・石匙)

石錐 (第66図— 362・364、第68図— 382～385)

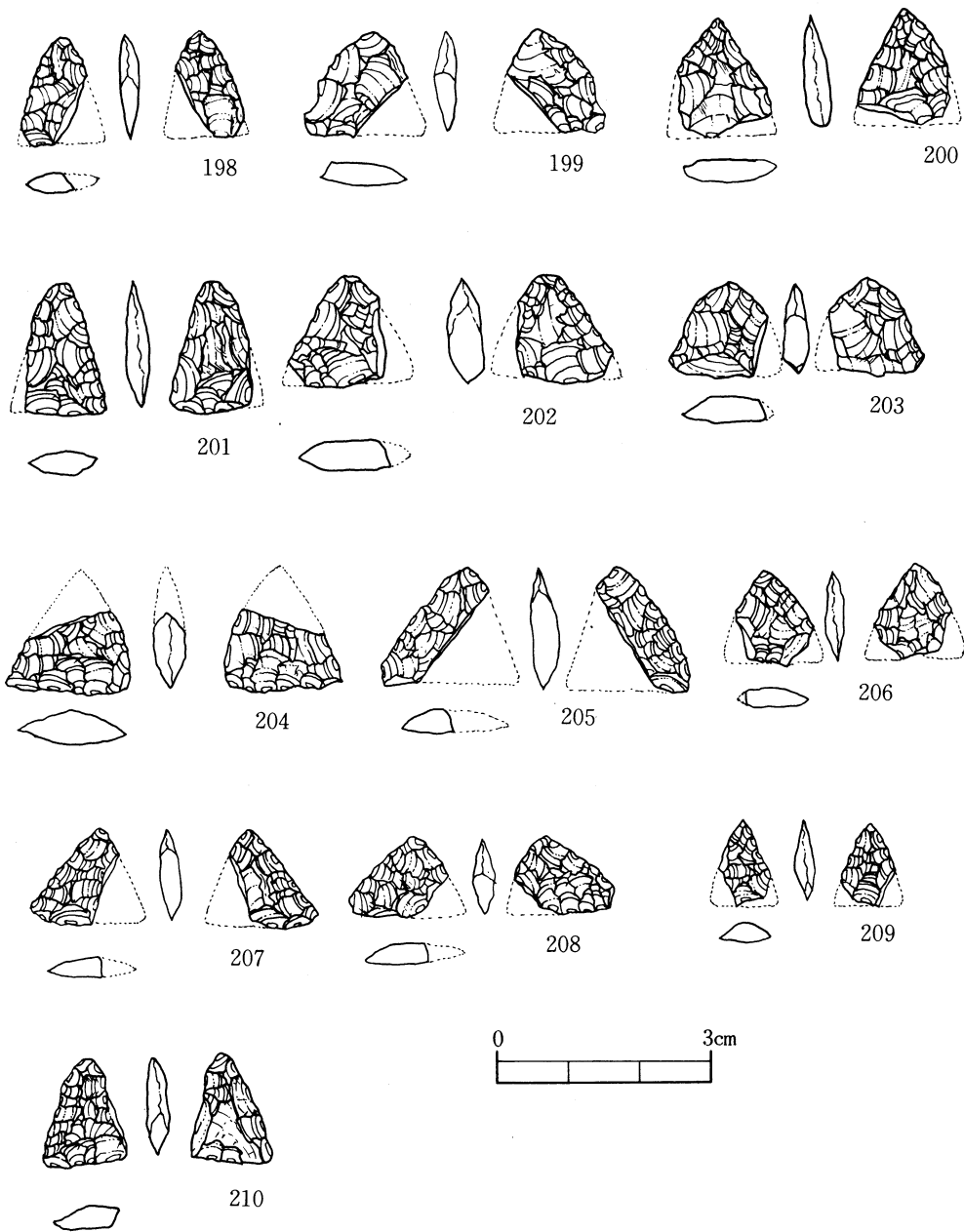
定型化した石錐2点がある。384は摘みを作り出し、錐部には調整をしっかりと施し、丸みをつけている。385は、36mm、最大16.5mmと比較的大きなものである。IV層検出の集石4号内からの出土である。362・364は、先端部の作り出しと摩滅痕から石錐であることがわかる。382は、先端部が破損しているが全体の形状から石錐と判断した。

石匙 (第68図— 386)

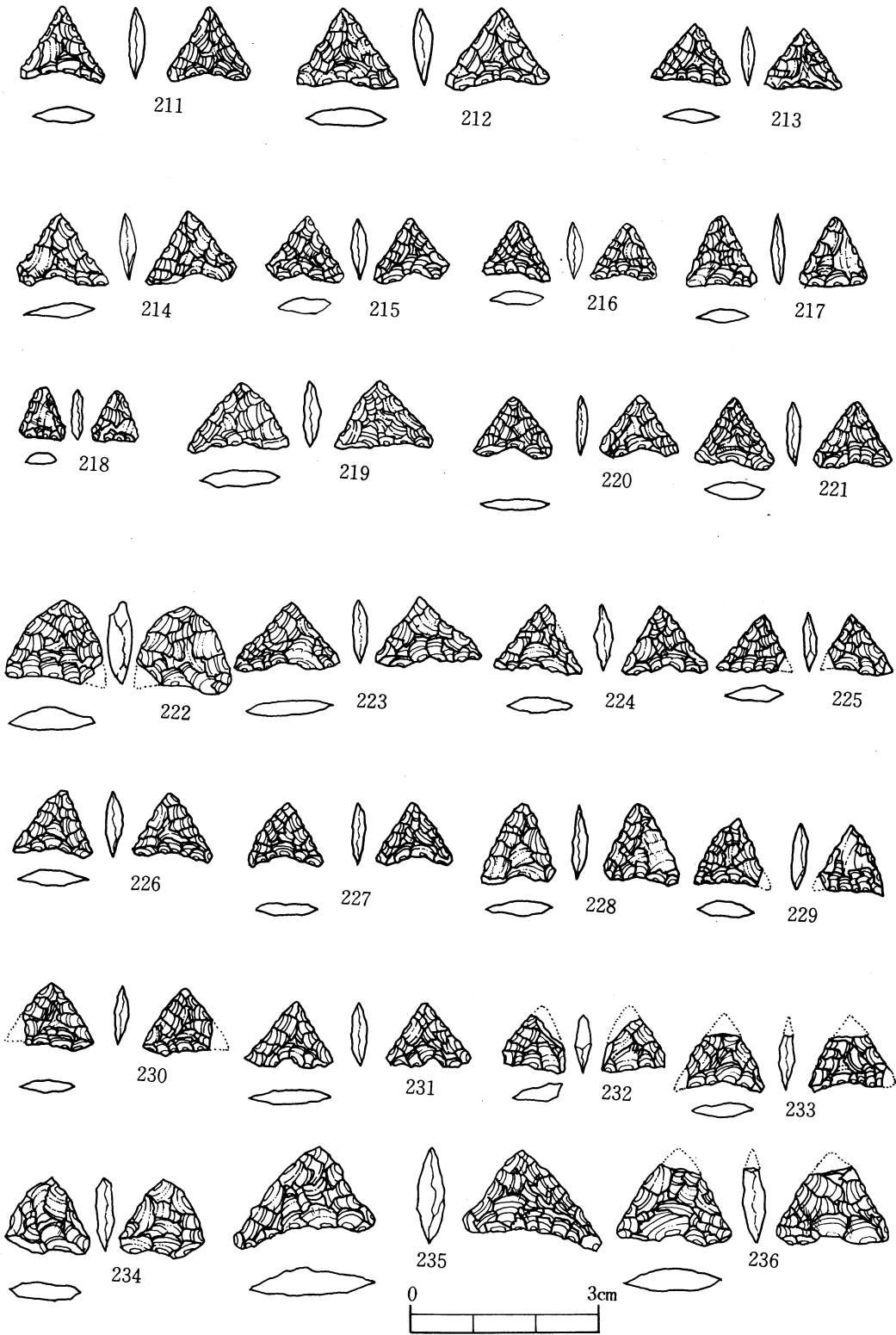
両面に挟りを設けた縦型の石匙である。表裏とも主要剥離面を多く残し、所々に調整を施している。黒耀石でも気泡を多く含む荒い材質のものである。最大長43mm、最大幅29mm、厚さ9mm、重さ12.3gを測る。本遺跡唯一の石匙である。



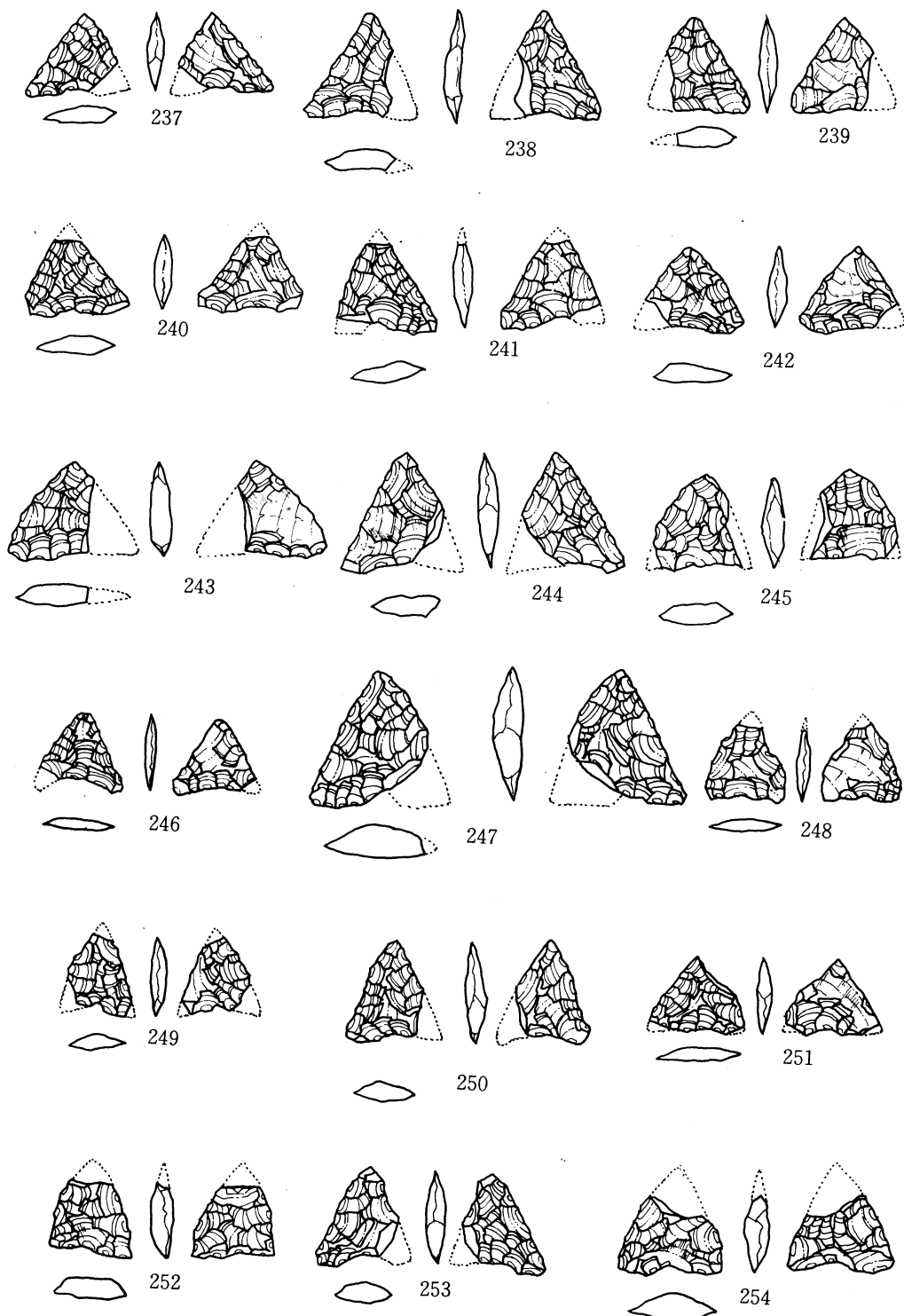
第56图 石器 I (石鏃) 实测图 (1)



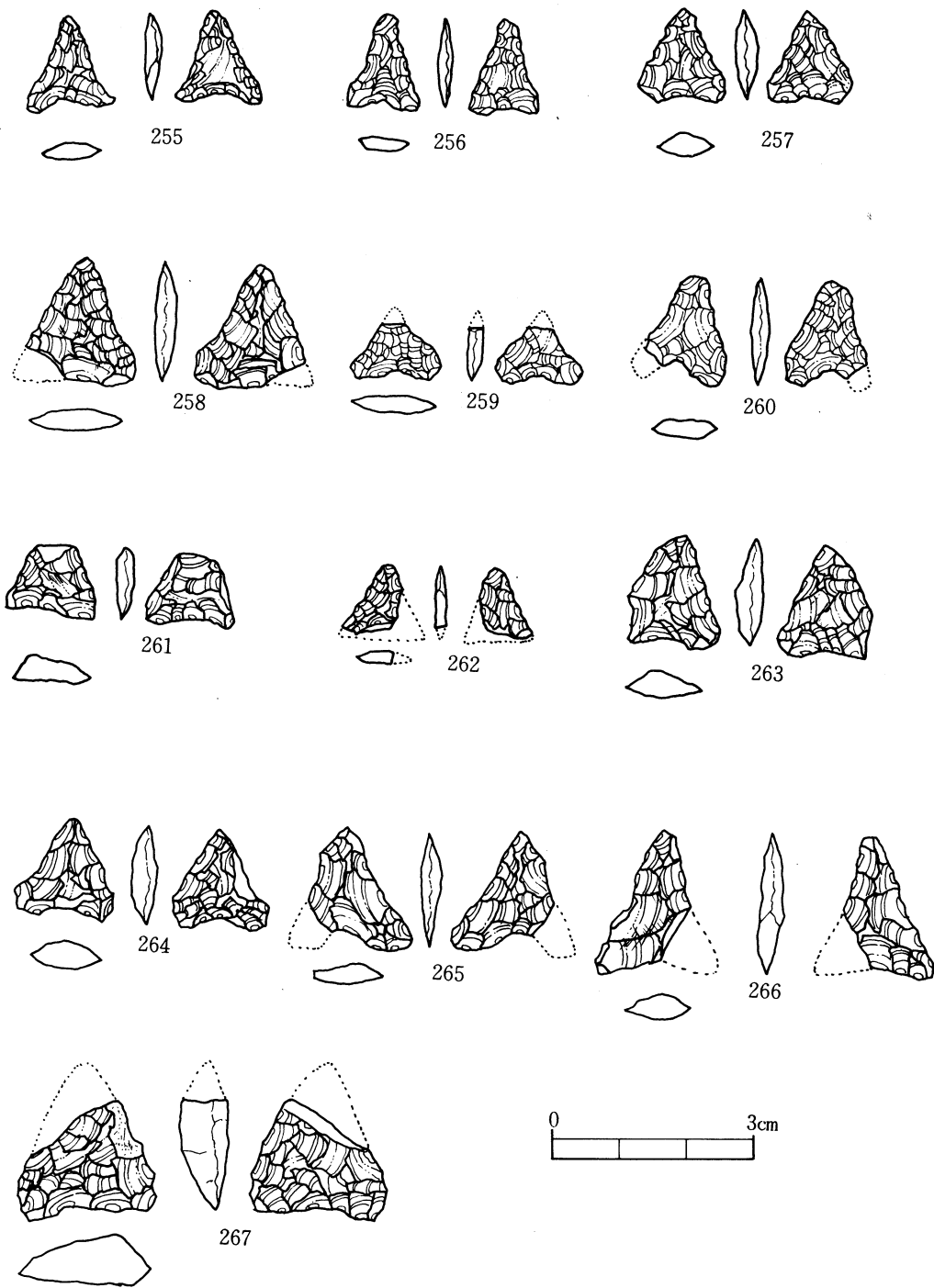
第57图 石器 I (石鏃) 实测图 (2)



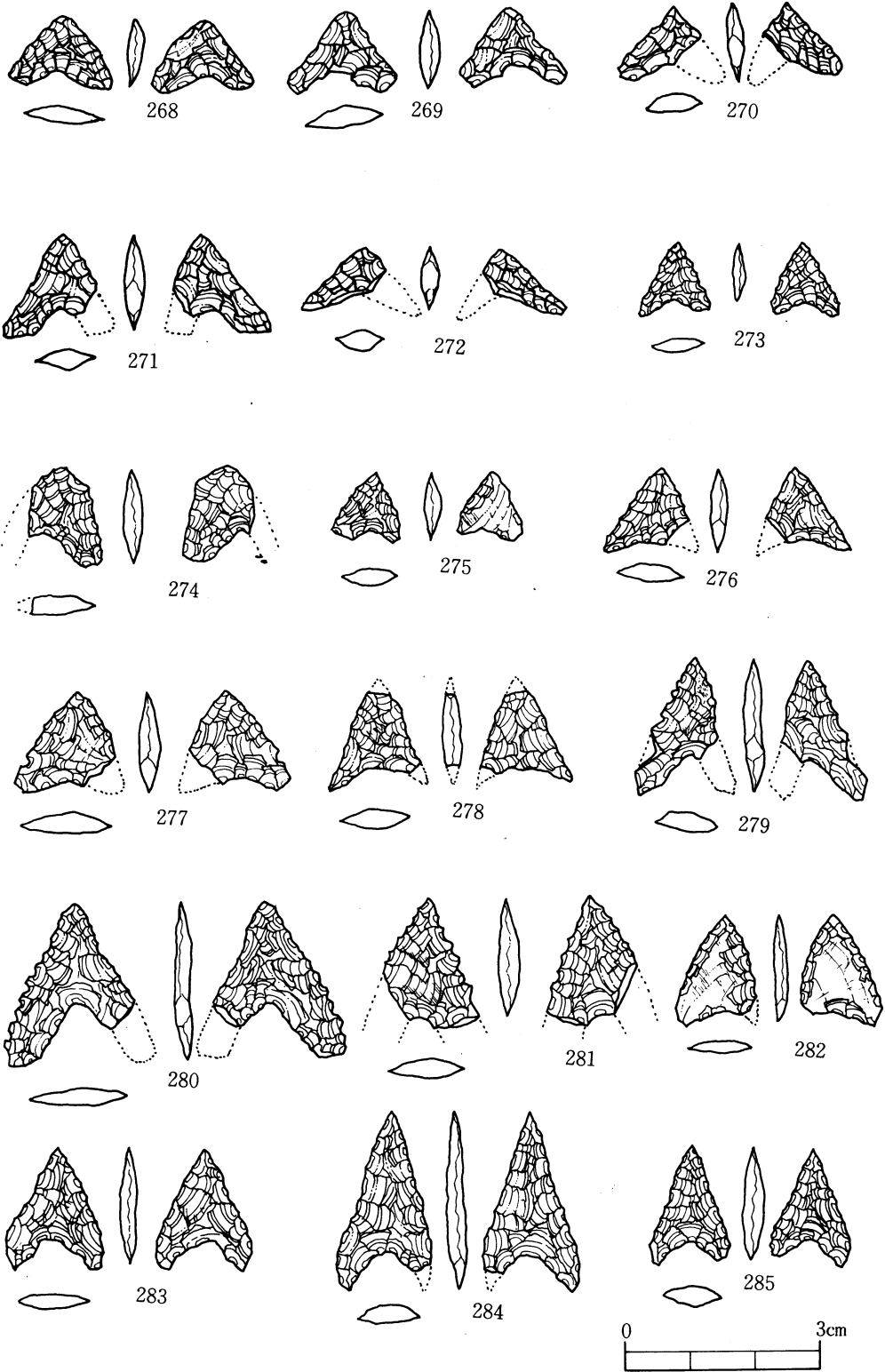
第58图 石器 I (石鏃) 实测图 (3)



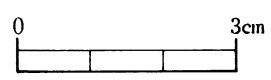
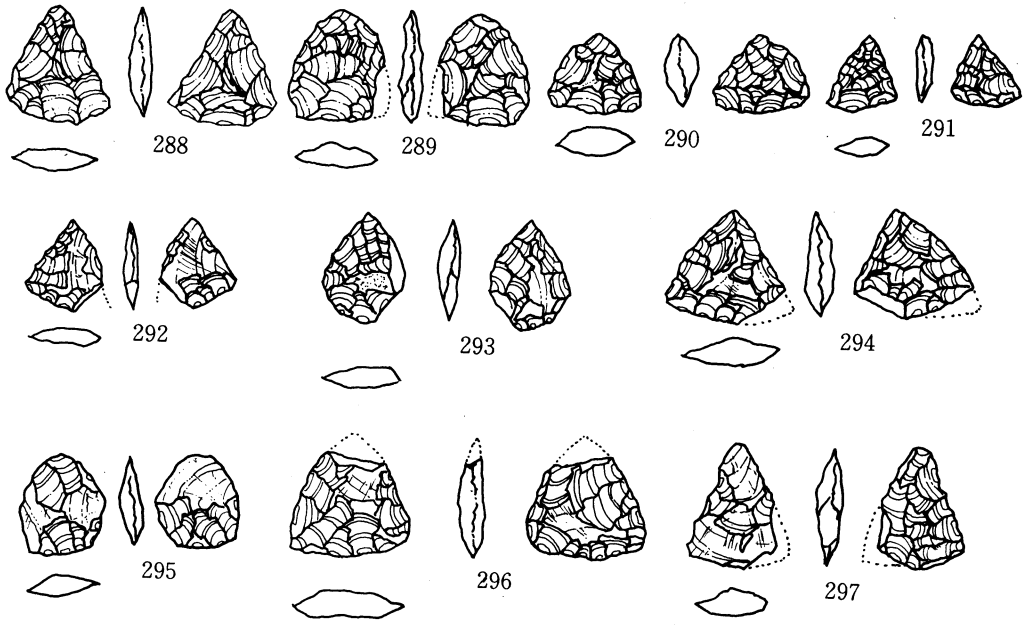
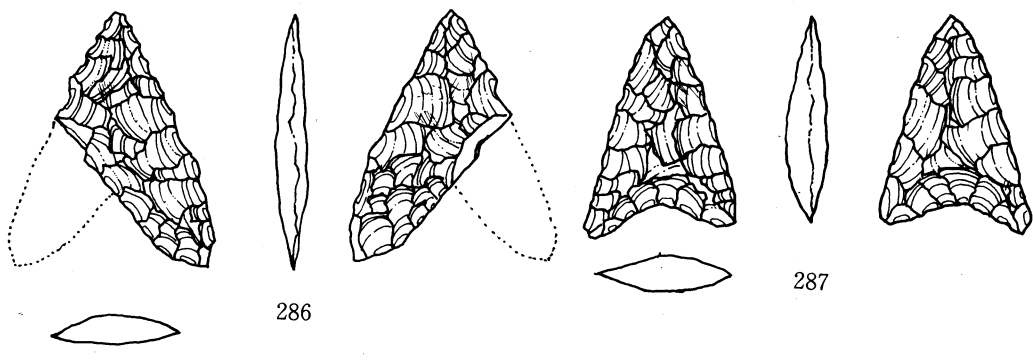
第59圖 石器 I (石鏃) 実測圖 (4)



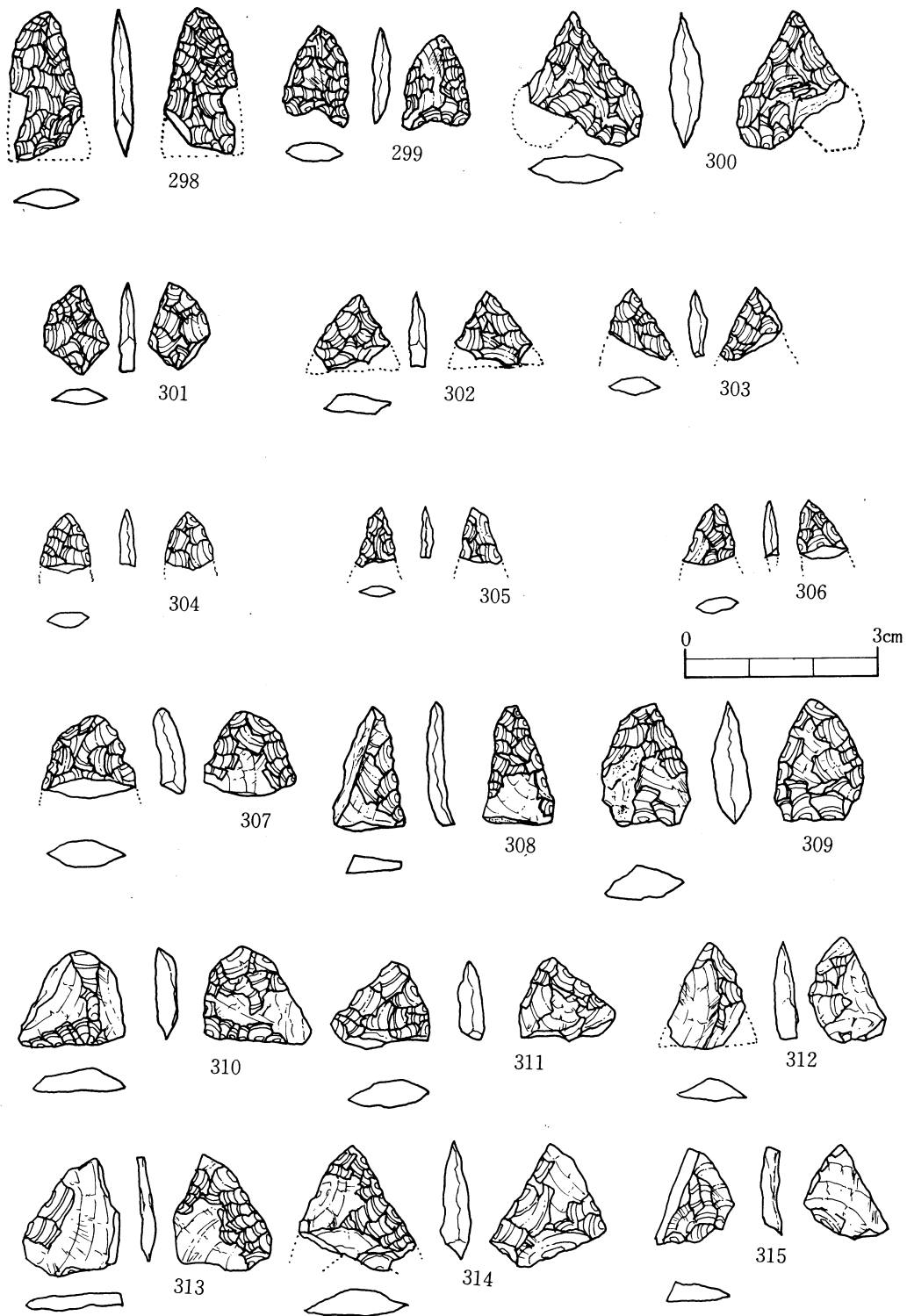
第60图 石器 I (石鏃) 实测图 (5)



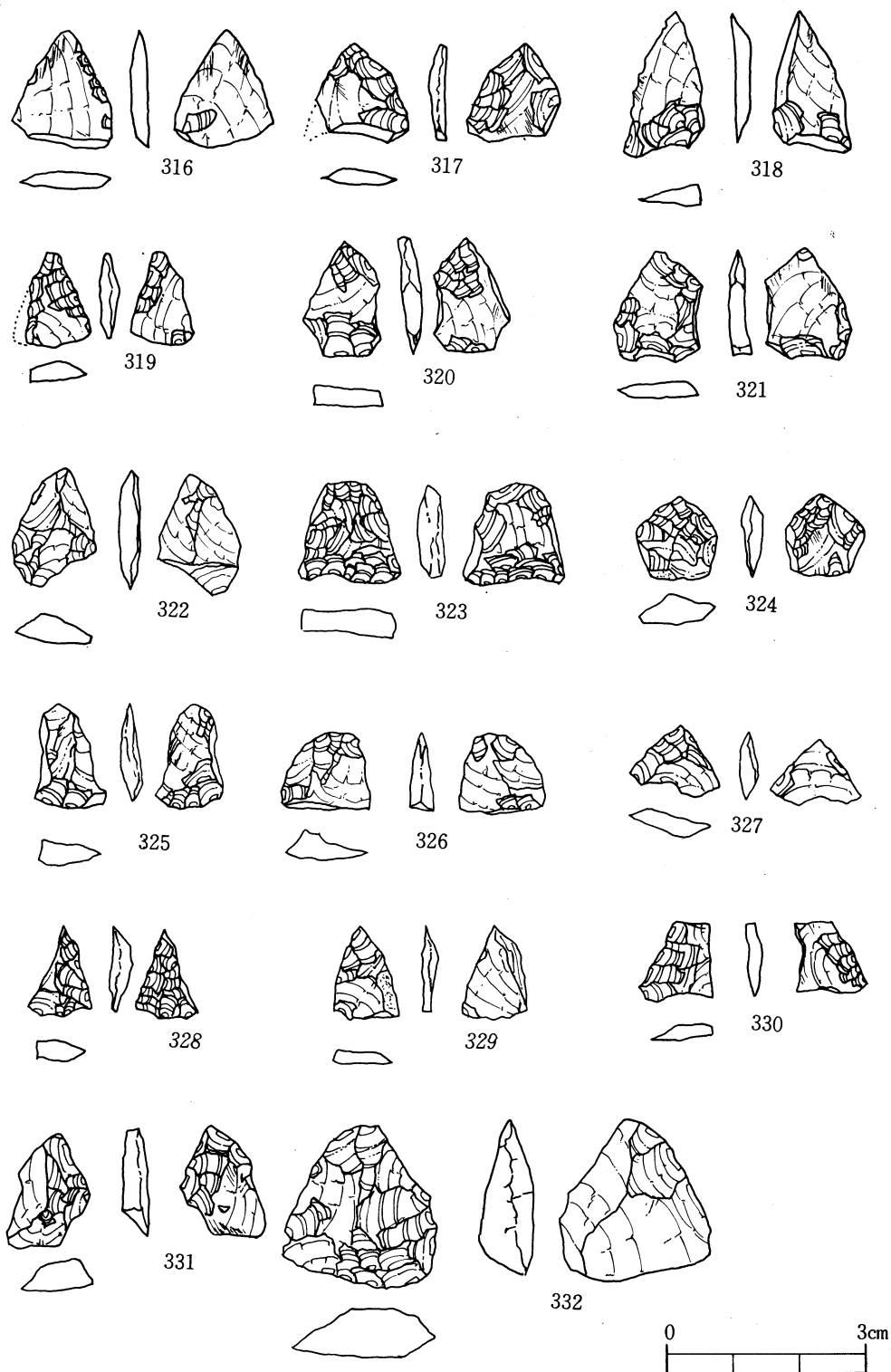
第61図 石器 I (石鏃) 実測図 (6)



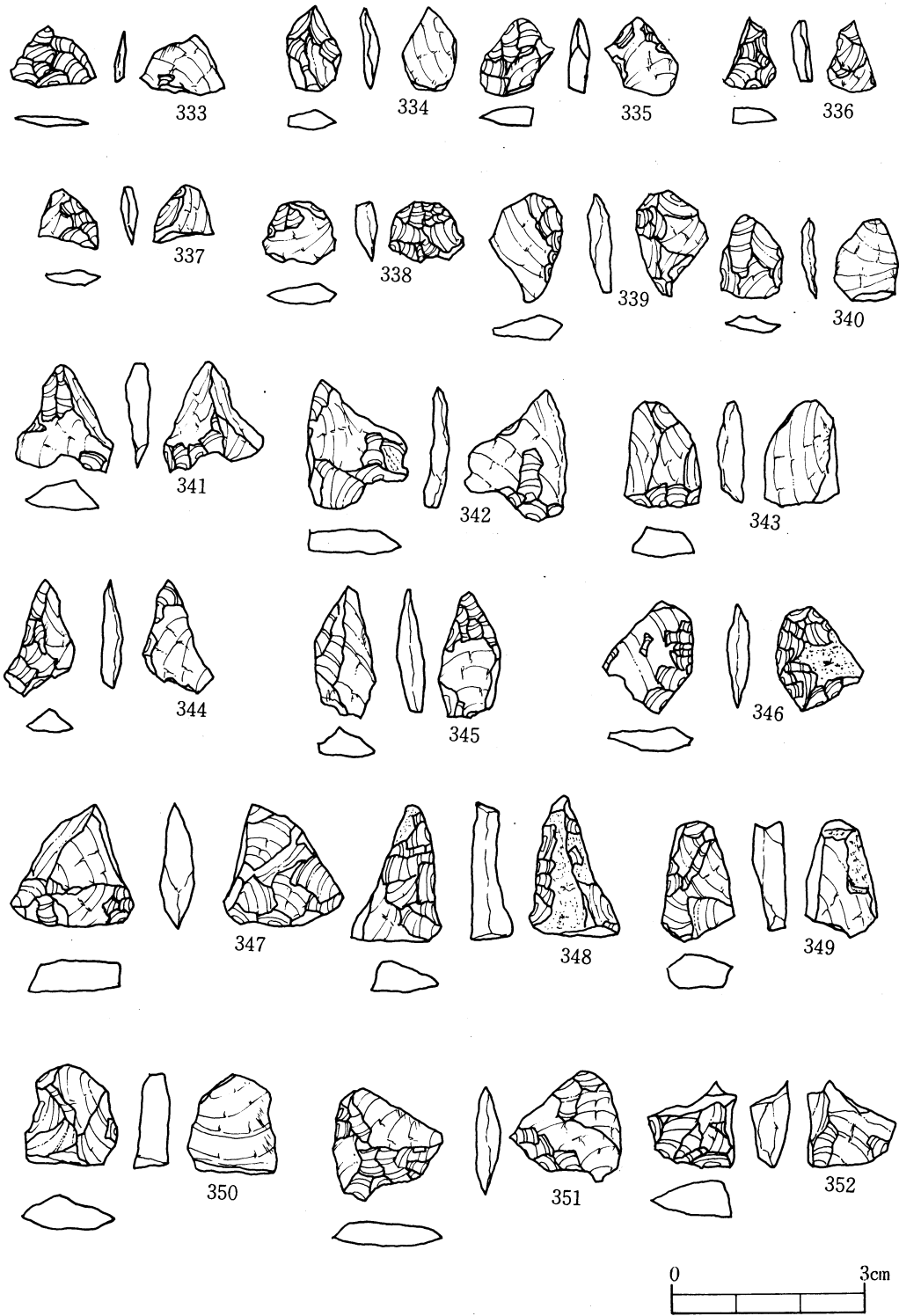
第62図 石器 I (石鏃) 実測図 (7)



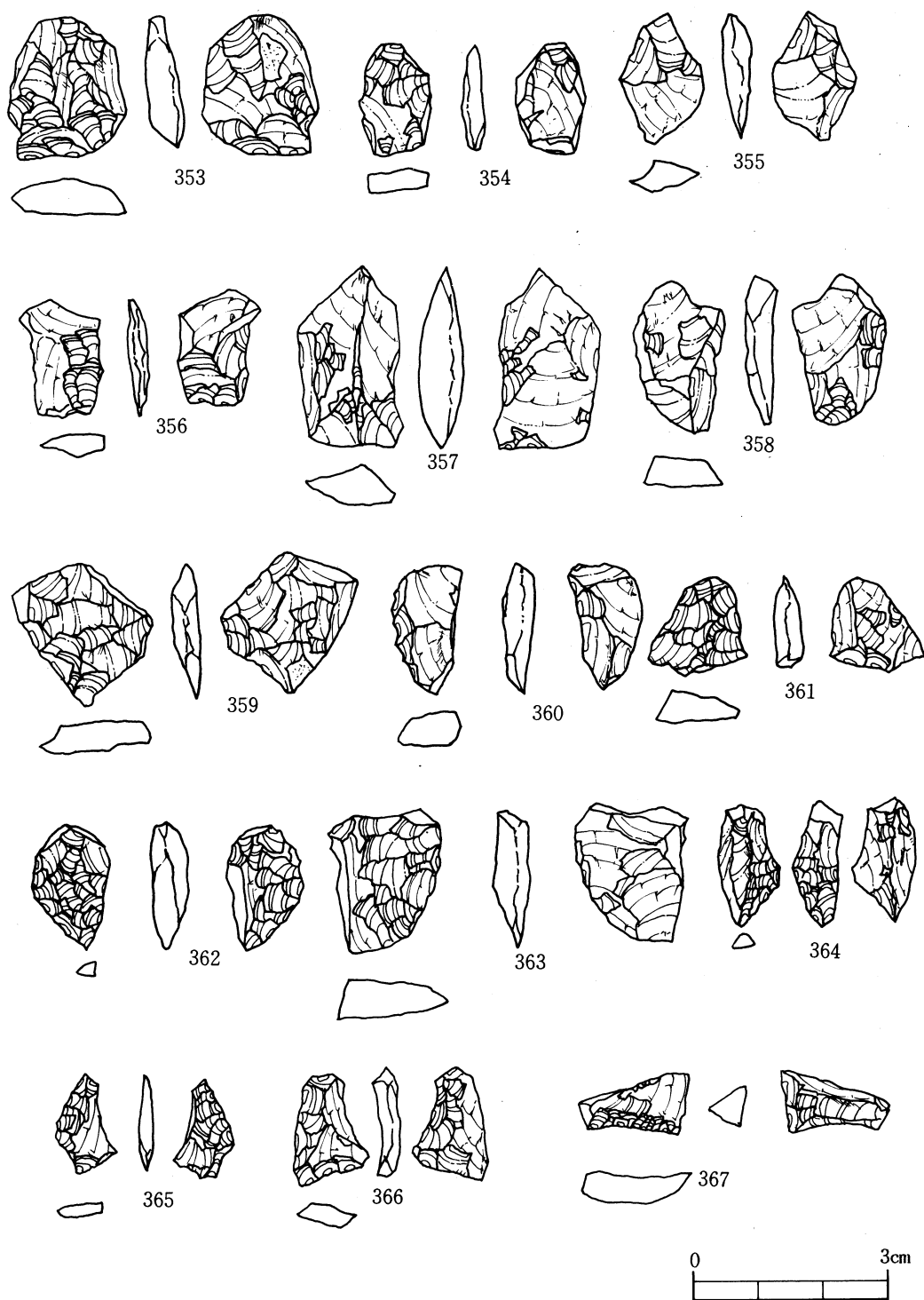
第63图 石器 I (石鏃) 实测图 (8)



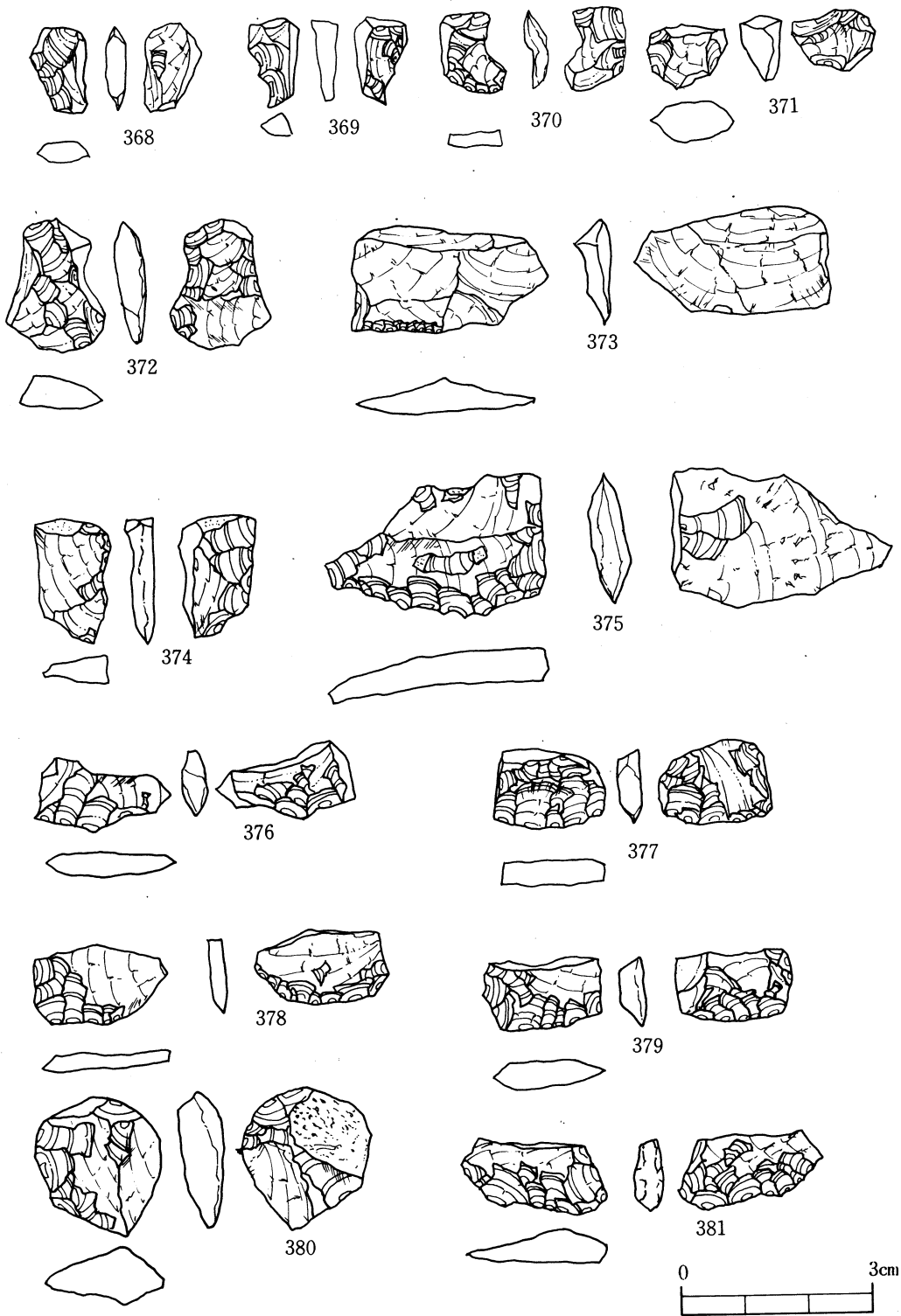
第64図 石器 I (石鏃) 実測図 (9)



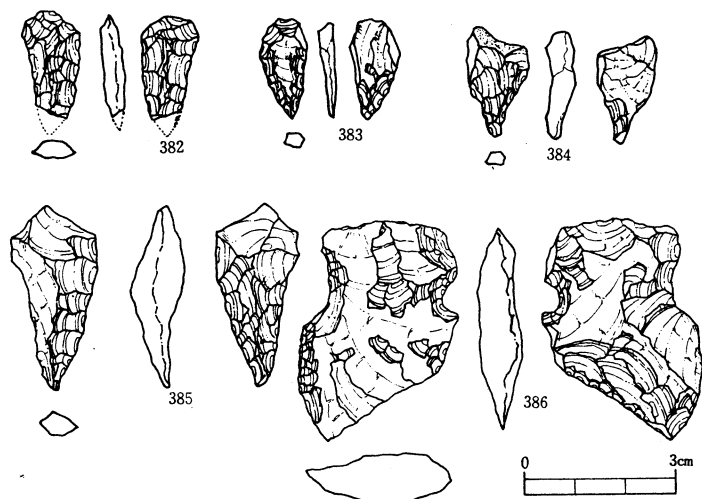
第65図 石器 I (石鏃) 実測図 (10)



第66図 石器Ⅱ（石鏃）実測図（11）



第67図 石器Ⅱ(石鏃)実測図(12)



第68図 石器Ⅱ (石鏃) 実測図 (13)

第6表 石器Ⅰ遺物一覧表 (1)

番号	分類	標高	区・層	材質	長さ	最大幅	最大厚さ	抉りの深さ	抉りの幅	重さ	残存状態	備考
180	I-A	71.49	B 2 VI	黒耀石	9.9	11.0	3.0			0.3	完	
181	I-B	71.64	〃	〃	12.5	11.0	2.5			0.3	〃	
182	I-A	71.66	A 2	〃	14.1	15.0	3.0			0.7	小破	
183	〃	71.33	B 2	〃	13.0	16.5	4.0			0.8	完	
184	〃	71.67	〃	〃	12.0	(14.0)	2.5			0.4	小破	
185	〃	71.435	〃	〃	15.0	(18.0)	3.0			0.8	〃	
186	〃	71.52	〃	〃	12.0	(12.0)	2.3			0.3	〃	
187	I-B	71.78	A 2	〃	15.0	(12.0)	3.0			0.6	〃	
188	I-A	71.77	B 2	〃	14.0	(16.0)	3.0			0.7	〃	
189	〃	71.39	〃	〃	13.0	(15.0)	3.5			0.6	〃	
190	〃	71.08	B 3	〃	13.5	(17.0)	2.5			0.3	〃	
191	〃	71.63	A 2	〃	14.0	(16.0)	2.1			0.5	〃	
192	I-B	71.01	C 1	〃	15.0	(13.0)	2.2			0.4	〃	
193	I-A	71.63	B 3	〃	18.0	(20.0)	5.5			1.3	大破	
194	I-B	71.39	B 2	〃	16.0	(15.0)	3.0			0.4	〃	
195	I-A	71.61	〃	〃	(14.0)	17.0	3.0			0.5	〃	
196	〃	71.76	〃	〃	16.0	(16.5)	3.0			0.6	小破	
197	I-B	71.66	B 3	〃	18.0	(16.0)	6.0			0.9	〃	
198	〃	71.665	A 2	〃	15.0	(12.5)	2.2			0.3	大破	
199	I-A	71.24	B 1	〃	14.0	(16.0)	3.0			0.6	〃	
200	I-B	71.70	B 2	〃	(16.0)	(15.0)	3.5			0.8	〃	
201	〃	71.52	〃	〃	19.0	(14.0)	4.0			0.7	小破	
202	I-A	71.56	A 2	〃	15.0	(18.0)	4.1			1.0	〃	
203	〃	66.10	B 2	〃	13.0	(17.0)	3.0			0.7	〃	
204	〃	71.33	〃	〃	(17.0)	(17.0)	4.3			1.0	大破	
205	〃	71.505	〃	〃	(16.0)	(19.0)	4.0			0.5	〃	
206	〃	表	B 3 表	〃	13.0	(14.0)	2.5			0.4	〃	
207	〃	71.65	B 2 VI	〃	14.0	(16.0)	2.5			0.4	〃	
208	〃	63.80	C 1	〃	11.0	(16.0)	2.6			0.5	小破	
209	I-B	71.64	A 2	〃	12.0	(10.0)	3.0			0.2	〃	

第7表 石器I遺物一覧表(2)

番号	分類	標高	区・層	材質	長さ	最大幅	最大厚さ	袂りの深さ	袂りの幅	重さ	残存状態	備考
210	I-B	71.39	C 2 VI	黒曜石	15.0	11.0	3.0			0.5	小破	
211	II-C	71.77	B 2	〃	12.0	13.0	2.5	1.2	10.0	0.3	完	
212	〃	71.26	〃	〃	13.0	16.0	3.2	1.2	9.0	0.5	〃	
213	〃	71.46	〃	〃	11.0	12.0	2.0	0.8	6.0	0.2	〃	
214	〃	71.455	〃	〃	11.0	15.0	2.2	1.3	8.0	0.3	〃	
215	II-D	71.36	〃	〃	11.5	11.5	2.0	1.1	7.0	0.2	〃	
216	II-C	71.31	C 2	〃	10.0	10.5	2.3	1.2	7.5	0.2	〃	
217	〃	71.66	A 2	〃	11.0	11.0	2.0	0.5	8.0	0.2	〃	
218	〃	71.40	B 1	〃	8.0	7.0	2.0	0.6	5.0	0.1	〃	
219	〃	71.32	B 2	〃	11.0	16.0	2.3	1.0	11.0	0.3	〃	
220	II-D	71.51	〃	〃	10.0	12.0	1.8	1.3	6.0	0.2	〃	
221	〃	71.645	〃	〃	11.5	13.0	2.2	1.3	6.0	0.2	〃	
222	II-C	71.69	〃	〃	13.0	17.0	3.5	1.0	1.0	0.8	〃	
223	II-D	71.32	C 2	〃	11.0	16.5	2.1	1.0	6.0	0.3	〃	
224	〃	71.61	B 2	〃	11.2	14.0	2.8	1.0	5.5	0.3	小破	
225	〃	71.61	A 2	〃	9.0	(12.0)	1.8	0.5	6.0	0.1	〃	
226	II-C	71.57	B 2	〃	11.0	12.5	2.3	1.1	8.5	0.2	完	
227	〃	71.52	〃	〃	10.0	12.0	2.0	1.8	9.0	0.2	〃	
228	〃	71.665	A 2	〃	11.5	12.0	2.0	1.0	8.0	0.3	〃	
229	〃	71.63	B 3	〃	11.0	(12.0)	2.0	1.0	10.0	0.2	小破	
230	II-D	71.61	B 2	〃	10.5	(14.0)	2.0	0.7	5.0	0.2	〃	
231	〃	71.33	〃	〃	10.5	14.0	2.3	1.0	3.5	0.2	完	
232	II-C	71.465	〃	〃	(10.0)	10.0	2.0	0.8	7.0	0.2	小破	
233	〃	71.48	〃	〃	(12.0)	(14.0)	2.0	1.2	10.0	0.2	〃	
234	II-D	71.465	B 1	〃	12.0	13.5	2.3	1.0	6.0	0.5	完	
235	II-C	71.53	B 2	〃	16.0	23.0	4.2	2.0	17.0	1.1	〃	
236	II-D	71.34	C 1	〃	16.0	18.0	3.8	1.2	7.0	0.7	小破	
237	〃	65.30	B 2	〃	13.0	(16.2)	2.0	1.0	5.4	0.4	〃	
238	II-C	71.01	C 1	〃	17.0	(18.0)	2.5	1.4	14.0	0.5	〃	
239	II-D	71.33	B 2	〃	15.0	(15.5)	2.3	0.5	7.0	0.5	〃	
240	〃	71.31	〃	〃	(14.0)	16.0	3.0	1.0	6.0	0.5	〃	
241	〃	71.46	〃	〃	(16.5)	(16.3)	2.3	1.1	(8.0)	0.6	〃	
242	〃	71.615	C 2	〃	14.0	(17.0)	3.0	1.2	(7.8)	0.5	〃	
243	II-C	71.79	A 2	〃	15.2	(21.0)	3.1	0.8	13.0	0.7	大破	
244	〃	71.50	B 2	〃	18.5	(19.0)	3.2	1.8	12.0	0.9	小破	
245	II-D	71.43	B 3	〃	14.0	(16.0)	3.1	0.7	3.0	0.7	〃	
246	II-C	71.62	A 2	〃	13.0	(14.5)	2.0	1.8	11.0	0.2	〃	
247	II-D	71.675	B 2	〃	21.1	(21.5)	4.3	2.8	(8.0)	2.0	大破	
248	II-C	65.40	〃	〃	12.0	12.0	1.6	0.8	8.0	0.3	完	
249	II-D	71.645	〃	〃	(15.0)	(12.0)	2.3	2.0	8.0	0.3	大破	
250	II-C	71.79	〃	〃	16.0	(14.0)	2.4	1.3	8.5	0.5	小破	
251	II-D	71.41	〃	〃	11.5	(15.0)	2.3	1.0	5.0	0.3	〃	
252	〃	71.17	C 2	〃	(16.0)	13.0	3.8	1.2	7.0	0.6	〃	
253	〃	71.45	B 1	〃	15.0	14.0	3.2	1.9	(7.0)	0.6	〃	
254	〃	71.355	B 2	〃	(17.0)	16.0	3.4	1.1	8.0	0.7	大破	

第8表 石器I遺物一覧表(3)

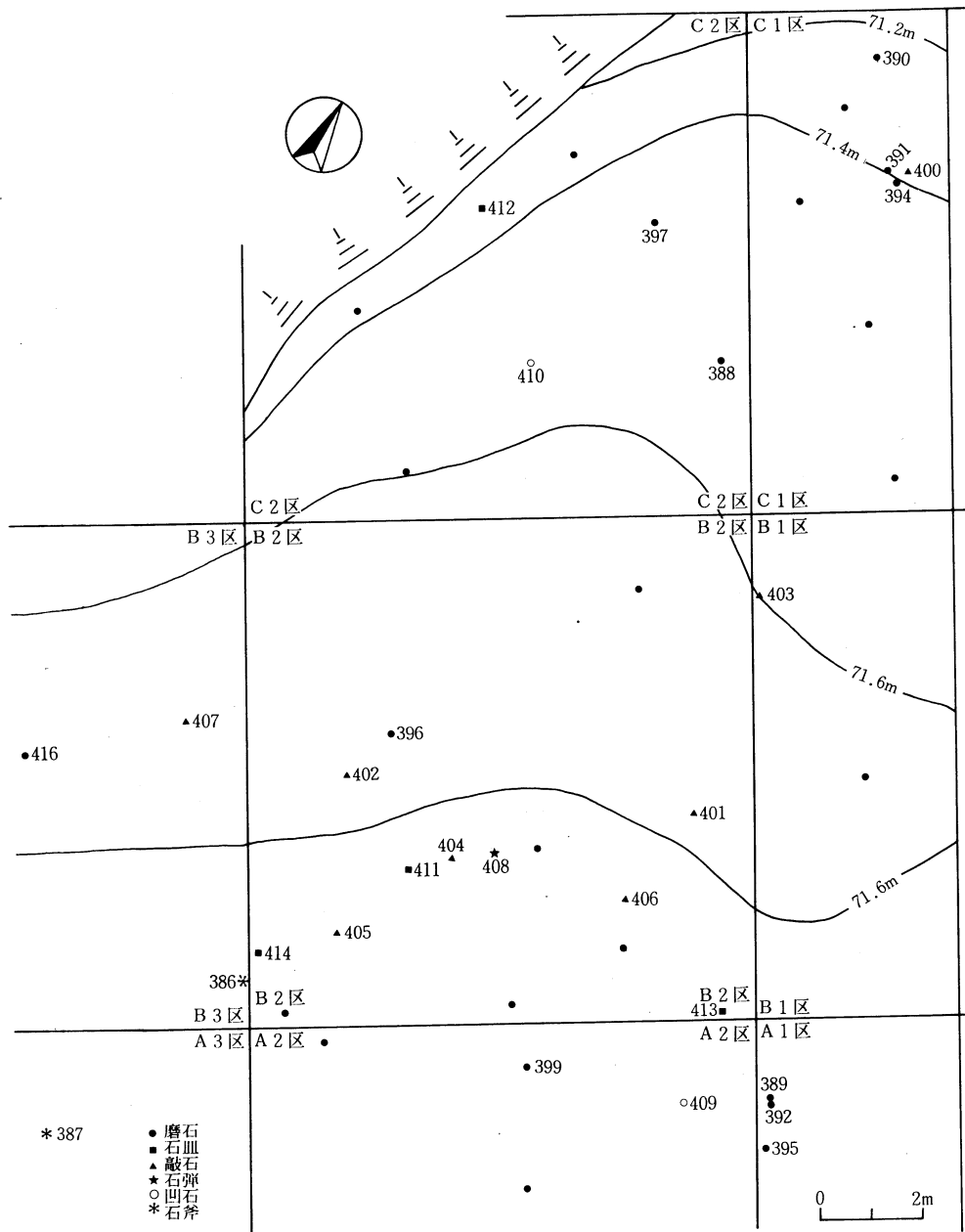
番号	分類	標高	区・層	材質	長さ	最大幅	最大厚さ	抉りの深さ	抉りの幅	重さ	残存状態	備考
255	II-E	71.535	B 2 VI	黒耀石	14.0	13.2	2.2	2.0	9.0	0.4	完	
256	〃	71.38	C 2 〃	〃	14.0	10.5	2.8	1.3	5.5	0.4	〃	
257	〃	71.40	〃 〃	〃	14.0	13.0	3.2	1.1	7.0	0.5	〃	
258	〃	71.61	B 2 〃	〃	19.0	(18.0)	3.5	0.3	7.0	0.7	小破	
259	〃	71.68	〃 〃	〃	(11.0)	13.0	2.2	1.4	8.0	0.3	〃	
260	〃	71.59	B 1 〃	〃	16.1	(13.5)	2.4	3.8	(8.0)	0.5	〃	
261	〃	71.50	C 2 〃	〃	11.0	13.0	2.5	0.8	8.0	0.7	完	
262	〃	71.44	B 2 〃	〃	(10.3)	(12.5)	1.5			0.2	大破	
263	〃	71.35	C 1 〃	〃	16.5	13.2	3.0	1.5	8.0	0.7	完	
264	〃	71.28	C 1 〃	〃	15.0	15.0	4.0	1.2	9.0	0.8	〃	
265	〃	66.30	B 2 〃	〃	19.0	(19.0)	3.0	3.2	(8.0)	0.6	小破	
266	〃	71.19	〃 〃	〃	21.0	(18.0)	3.2	1.8	(15.0)	0.8	〃	
267	〃	71.455	〃 〃	〃	(13.0)	21.0	7.1	1.6	12.0	2.4	大破	真黒な黒耀石
268	II-F	71.375	C 1 〃	〃	12.0	15.5	2.0	2.5	9.0	0.3	完	
279	〃	71.61	B 2 〃	〃	12.0	17.0	3.0	3.0	12.0	0.3	〃	
270	〃	71.52	B 1 〃	〃	12.0	(11.5)	2.3	2.7	(8.0)	0.2	大破	
271	〃	71.48	B 2 〃	〃	15.5	(17.0)	3.0	4.0	(8.0)	0.4	小破	
272	〃	71.465	B 1 〃	〃	9.0	(18.0)	2.5	(3.0)	(11.0)	0.2	大破	
273	II-C	71.76	B 2 〃	〃	11.0	10.0	1.8	2.0	7.0	0.2	完	
274		71.70	B 3 〃	〃	16.0	(16.0)	3.0	5.5	(11.0)	0.5	大破	抉りの深い5角形の鎌
275	II-D	71.73	B 2 〃	〃	11.0	10.5	2.1	1.3	6.5	0.2	完	未製品鎌
276	II-C?	71.46	〃 〃	〃	13.0	(14.0)	2.0	1.2	(11.1)	0.3	小破	
277	〃	71.25	〃 〃	〃	15.1	(16.0)	3.0	1.5	(11.0)	0.6	〃	
278	II-G	71.69	〃 〃	〃	(17.0)	(15.0)	3.0	3.0	(13.0)	0.5	〃	
279	II-F	71.175	C 1 〃	〃	21.0	(16.0)	2.8	6.2	(13.0)	0.6	〃	
280	〃	71.56	A 2 〃	〃	25.0	(24.0)	2.3	9.0	(17.0)	0.9	〃	鋸歯鎌
281	〃	71.57	A 3 〃	〃	(22.0)	(11.0)	3.0	(4.0)	(7.0)	0.8	大破	〃
282	II-G	71.29	B 1 〃	〃	17.0	12.0	2.0	2.0	10.0	0.3	小破	剝片鎌
283	〃	71.48	〃 〃	〃	14.0	14.0	2.0	4.0	11.0	0.5	完	
284	〃	71.585	B 3 〃	玄武岩	28.0	15.0	3.0	6.0	11.0	1.0	小破	
285	〃	71.01	C 1 〃	〃	19.0	12.0	3.2	4.0	8.0	0.5	完	
286	II-F	71.06	C 2 〃	黒耀石	36.0	17.0	4.2	10.0	20.0	2.1	大破	気泡の全くない良好黒耀石
287	〃	71.01	C 1 〃	〃	30.0	20.0	5.5	4.0	19.0	1.9	完	乳白色の黒耀石
288	III-H	71.39	C 2 〃	〃	21.0	13.0	4.3			0.7	〃	
289	〃	71.41	B 2 〃	〃	15.0	13.0	3.0			0.8	小破	
290	〃	71.49	〃 〃	〃	11.0	12.0	5.0			0.6	完	
291	〃	71.74	A 2 〃	〃	10.0	9.5	2.0			0.3	〃	
292	〃	71.75	B 2 〃	〃	13.0	11.0	2.0			0.3	小破	半透明の黒耀石
293	〃	71.615	〃 〃	〃	16.0	11.0	3.0			0.6	完	
294	〃	71.65	〃 〃	〃	22.0	21.0	3.4			0.9	小破	
295	〃	表	B 3 〃	〃	10.0	10.0	2.6			0.3	完	5角形状、未製品
296	III-H	71.61	C 1 〃	〃	(16.5)	16.0	3.2			1.2	小破	
297	〃	71.55	B 2 〃	〃	17.0	(14.0)	4.0			0.9	〃	剝片鎌
298		71.72	〃 〃	〃	(23.0)	12.0	3.0			0.8	〃	形態不明良質黒耀石
299		71.22	C 1 〃	〃	14.0	9.8	2.0	2.0	6.0	0.4	完	形態不明丸味をもつ脚

第9表 石器I遺物一覧表(4)

番号	分類	標高	区・層	材質	長さ	最大幅	最大厚さ	抉りの深さ	抉りの幅	重さ	残存状態	備考
300		71.72	B 2 VI	石英	(22.0)	(22.0)	5.0	5.0	10.0	1.4	小破	形態不明、特殊な鏃
301		71.39	〃	黒耀石	14.0	9.0	2.0			0.4	完	半透明の黒耀石
302		71.46	〃	〃	(12.0)	14.0	2.5			0.4	大破	形態不明、鏃破損品
303		71.47	B 1	〃	(10.0)	(11.0)	3.2			0.2	〃	〃
304		71.36	B 2	〃	(10.0)	8.0	2.2			0.2	〃	〃
305		71.76	〃	〃	(10.0)	6.0	2.0			0.1	〃	〃
306		71.58	〃	〃	(10.0)	8.0	2.2			0.2	〃	〃
307		71.68	〃	〃	(13.0)	14.0	3.3			0.8	〃	〃
308	IV	71.76	〃	〃	19.0	10.0	3.0			0.7	完	ドリルの可能性
309	〃	63.10	〃	〃	19.0	13.5	5.4			1.5		
310	〃	71.525	〃	〃	15.0	22.0	3.5			1.1		
311	〃	71.40	〃	〃	12.0	15.0	3.5			0.7	小破	鏃の可能性
312	〃	71.53	〃	〃	16.0	(13.0)	3.2			0.6		
313	〃	71.26	C 1	〃	19.0	16.0	2.0			0.8		縞模様の黒耀石
314	〃	71.66	B 2	〃	19.0	16.0	3.5			1.2		
315	〃	71.615	B 1	〃	14.0	11.5	2.5			0.4		半透明の黒耀石
316	〃	71.01	C 1	〃	18.0	16.0	2.5			0.6		良質
317	〃	71.505	B 2	〃	14.5	12.5	2.5			0.5		
318	〃	71.52	C 2	〃	22.0	11.0	3.2			0.7		
319	〃	71.49	B 3	〃	14.0	10.0	2.3			0.4		
320	〃	71.55	B 2	〃	18.0	11.0	3.0			0.9		
321	〃	71.56	C 2	〃	17.0	12.0	2.8			0.7		
322	〃	71.51	〃	〃	18.0	12.0	4.0			0.9		
323	〃	71.45	A 1	〃	16.0	16.0	4.5			1.2		
324	〃	71.38	A 2	〃	12.0	12.0	3.2			0.6		5角形状
325	〃	71.485	B 2	〃	16.0	11.0	3.5			0.5		
326	〃	71.595	A 2	〃	12.0	12.0	3.5			0.6		
327	〃	71.525	〃	〃	10.0	12.0	3.0			0.3		
328	〃	71.24	C 2	〃	14.0	10.0	3.5			0.4		やや灰色の黒耀石
329	〃	71.63	A 2	〃	14.0	9.0	2.0			0.3		
330	〃	71.61	B 2	〃	10.0	11.0	1.5			0.3		
331	〃	71.61	〃	〃	18.0	11.0	4.5			0.9		
332	〃	71.565	B 3	〃	26.0	23.0	10.0			4.3		気泡が多い
333	〃	71.345	C 1	〃	9.0	13.0	1.5			0.2		
334	〃	71.66	A 3	〃	13.0	8.0	2.5			0.3		
335	〃	71.39	B 2	〃	12.0	10.0	2.2			0.4		
336	〃	71.59	B 1	〃	11.0	6.0	3.0			0.4		
337	〃	71.58	B 2	〃	9.0	9.0	2.5			0.2		
338	〃	71.375	C 2	〃	9.5	11.5	3.5			0.4		
339	〃	71.40	C 1	〃	16.0	11.0	3.5			0.8		
340	〃	71.54	B 2	〃	13.0	9.0	2.0			0.4		半透明の黒耀石
341	〃	71.20	〃	〃	17.0	15.0	4.5			0.8		
342	〃	71.63	B 1	〃	21.0	15.0	4.0			1.2		
343	〃	63.70	C 1	〃	16.0	12.0	4.5			1.3		
344	〃	71.38	C 2	〃	19.0	10.0	3.5			0.5		

第10表 石器 I・II 遺物一覧表 (5)

番号	分類	標高	区・層	材質	長さ	最大幅	最大厚さ	抉りの深さ	抉りの幅	重さ	残存状態	備考
345	IV	71.54	B 2 VI	黒耀石	20.0	9.0	0.5			0.8		ドリルの可能性
346	〃	71.64	〃 〃	〃	17.0	13.0	3.5			0.9		自然面残す
347	〃	71.25	B 3	〃	20.0	19.0	6.0			2.5		
348	〃	71.62	B 2	〃	22.0	13.0	5.0			1.6		ドリルの可能性
349	〃	71.525	C 2	〃	19.0	11.0	5.5			1.4		クサビ形石器の可能性?
350	〃	71.63	B 2	〃	15.0	14.0	5.0			1.4		半透明の黒耀石
351	〃	71.09	C 1	〃	18.0	18.0	4.0			1.2		
352	〃	71.455	B 2	〃	13.0	12.0	6.0			1.1		
353	〃	71.60	〃 〃	〃	22.0	18.0	5.5			2.9		
354	〃	71.73	〃 〃	〃	17.0	11.0	3.0			0.9		
355	〃	71.49	〃 〃	〃	20.0	13.0	6.0			1.2		
356	〃	71.63	A 2	〃	18.0	10.0	3.5			0.6		
357	〃	71.30	B 2	〃	28.0	15.0	7.0			3.2		
358	〃	71.38	B 1	〃	24.0	13.0	6.0			1.9		
359	〃	71.48	B 2	〃	24.0	19.0	3.5			3.0		
360	〃	71.02	C 1	〃	20.0	10.0	3.5			1.3		
361	〃	71.485	B 1	〃	16.0	16.0	3.5			1.3		
362		71.67	A 2	〃	19.0	11.0	6.5			1.6		石錐の可能性?
363	IV	70.955	C 1	〃	21.0	18.0	6.5			2.4		削器
364		71.34	B 2	〃	19.0	10.0	7.0			1.0		石錐
365	IV	71.595	〃 〃	〃	15.0	7.0	2.0			0.3		
366	〃	71.21	C 1	〃	17.0	11.0	3.5			1.0		
367	〃	71.64	B 2	〃	9.0	16.0	5.0			0.6		
368	〃	71.39	C 2	〃	14.0	8.5	3.0			0.5		
369	〃	71.44	B 2	〃	16.0	9.0	3.0			0.5		
370	〃	71.345	C 2	〃	13.0	10.0	2.0			0.4		
371	〃	71.175	C 1	〃	10.0	12.0	6.0			0.7		
372	〃	71.52	B 2	〃	21.0	15.0	5.0			1.7		
373	剥片	71.73	〃 〃	〃	31.0	16.0	6.5			2.5		良質の黒耀石
374		71.175	C 1	〃	21.0	10.0	4.0			1.4		
375		71.16	A 2	〃	21.5	35.0	5.0			4.6		削器
376	IV	71.25	C 1	〃	11.0	21.0	4.0			1.0		
377	〃?	63.60	〃 〃	〃	12.0	18.0	3.5			1.4		削器?
378	〃?	71.535	B 2	〃	11.5	21.0	2.0			0.9		〃?
379	〃?	71.535	〃 〃	〃	9.5	17.0	3.5			1.4		〃?
380	〃	71.44	〃 〃	〃	22.0	20.0	9.0			3.6		〃?
381	〃	71.24	B 3	〃	11.0	22.0	6.0			1.6		〃
382		71.39	C 2	〃	21.0	11.0	5.0			1.3		石錐
383		71.61	A 2	〃	19.0	8.0	2.5			0.7		〃
384		71.63	B 3	〃	22.0	12.0	5.0			1.6		〃
385		71.12	B 1	〃	36.0	16.5	10.0			4.3		〃 集石内出土
386		71.42	C 2	〃	43.0	29.0	9.0			12.3		石匙



第69图 石器Ⅲ~Ⅶ出土分布图

③石器Ⅲ（石斧）（第70図—387～389）

縄文時代の石斧は3点が出土しており、1点は完形品（打製石斧）、2点は破損品（磨製石斧）である。この3点はすべてⅥ層より検出されている。

打製石斧)

387 は、中央部がくびれた分銅形の石斧である。大小の剝離調整によって成形され自然面は残らない。刃部は、両面ともに剝離痕が観察されるが使用痕との区別は不明である。

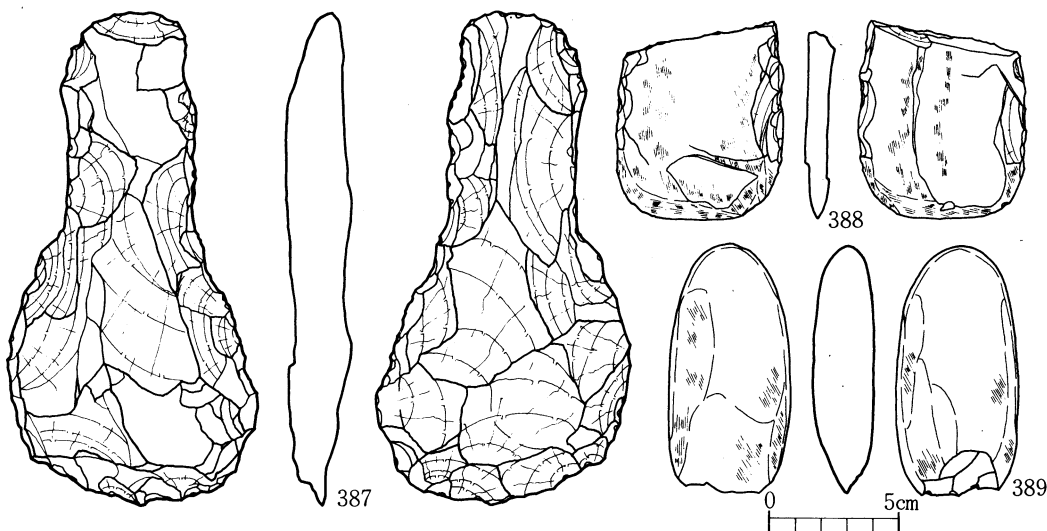
磨製石斧)

388は、破損のため刃部は残っていない。基部、基端部及び基部側面は、丁寧な研磨が施されており擦痕も明瞭に確認出来る。基部面は、研磨により1つの面だけではなくいくつもの面で形成されている。

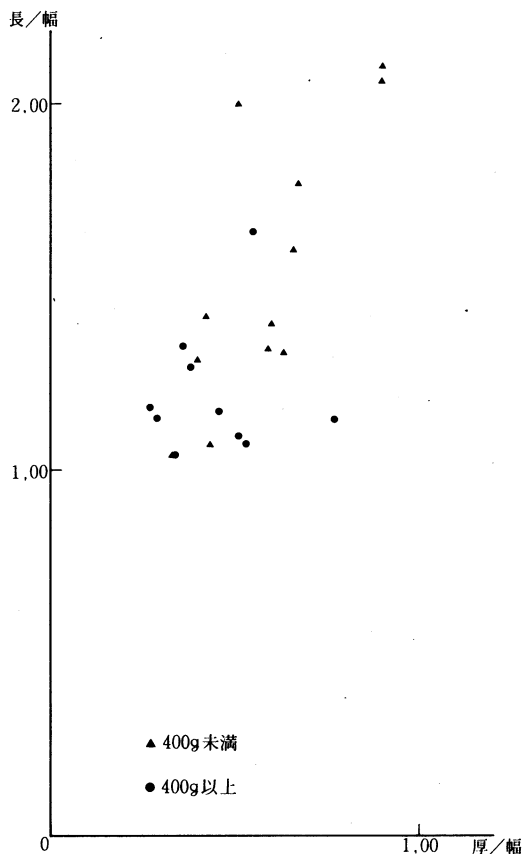
389は、基部中央より刃部が残存した扁平磨製石斧である。刃面及び基部面は丁寧な研磨がなされており擦痕も明瞭に確認される。基部側面は、剝離調整が施されているだけである。

第11表 石器Ⅲ（石斧）一覧表

挿図番号	器種	出土区	層位	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
387	打製石斧	B-6	Ⅱ	頁岩	449	19.0	9.4	2.5
388	磨製石斧	B-2	Ⅱ	頁岩	71	7.0	6.3	0.9
389	磨製石斧	A-3	Ⅱ	頁岩	167	9.5	4.7	2.1



第70図 石器Ⅲ（石斧）実測図



第71図
磨石・敲石・凹石の長/幅と厚/幅の相関図

④石器Ⅳ（磨石）（第72図-390~418）

磨石は25点出土しており、そのうち完形品は10点である。表採品3点、Ⅱ層が9点、Ⅲ層に13点といった状況で採集されている。Ⅱ層ではA・B・C-2区に数点ずつ分散しており、Ⅲ層ではC-1区に集中する。

ところで、磨石および敲石はその使用痕によって区別されている。すなわち磨石には磨痕が、敲石には打痕が（敲石のうち、平坦面に凹孔をもつものを普通凹石と呼んでいる）、残されているとしてきた。だが現実には、もちろん単一の使用痕のみが残されていることもあるが、多くは三種類のその組み合わせである。これらの石器は石皿と一体となって、植物質食糧の製粉や土器混和剤の粉碎などに使用されたと考えられている。それならば、製粉・粉碎における一聯の工程を自然礫を用いて行なえばそこには当然三種類の使用痕が残るだろう。しかし自然礫を機能に適した形態に成形した場合も類似した痕跡が残るに違いない。

磨石・敲石の区別の困難さは指摘されていることではある。ここでは後藤秀一氏が峠山聖山遺跡で行なった方法を参考にしたい。まずこれらの遺物のもつ形態的諸属性に着目して分類しこれを使用痕によって更に分類する。そこで磨石と敲石の区別を試みたい。

自然礫を素材とし磨痕・打痕・凹孔といった使用痕をもつ遺物のうち完形品は22点あり、それぞれ平面に置いたときの最大長・最大幅・厚さと重量を計測した（一覧表参照）。

最大長/最大幅と厚さ/最大幅の相関（第71図）を求め、遺物それぞれの形態をみる。バラツキはあるものの6つにグルーピングした。

- ① 長さ/幅 1.00~1.20、厚さ/幅 0.25~0.55
- ② 長さ/幅 1.25~1.45、厚さ/幅 0.35~0.65
- ③ 長さ/幅 1.60~1.80、厚さ/幅 0.55~0.70
- ④ 長さ/幅 2.00~2.10、厚さ/幅 0.90
- ⑤ 長さ/幅 2.00、厚さ/幅 0.51
- ⑥ 長さ/幅 1.14、厚さ/幅 0.77

重量は0~1000gを100gごとにランク分けすると表11-1のようになる。101~200gに一つのピークがある。301~400gを境に2つに分けることができるだろう。ここでは400gで大別すること

にする。

石材は火成岩である安山岩・花崗岩と堆積岩である砂岩と頁岩の4つに分けることにした。

以上の形態的諸属性から12に分類できる。これに使用痕を掛合わせたのが表11-3である。これをもとに磨石・敲石をみていく。とりあえずここでは磨石のみを取り上げ、敲石については後述することにした。

〔磨石Ⅰa類〕

表11-3の①⑥-aは磨痕のみのも (390・391)、磨痕と打痕をもつもの (392・393)、磨痕・打痕・凹孔をもつもの (394) がある。これらは平面形が正円形に近く (長さ/幅1.00~1.20) 石皿の上ですり潰すには適していると思われる。

〔磨石Ⅰb類〕

①⑥-c (395) は頁岩製であるが、そのことを除けば①⑥-aと同様に考えてよいだろう。

〔磨石Ⅰc類〕

①⑥-a (396) は全面に磨痕を施しており小型の磨石とみていいだろう。断面は半円形をなす。

〔磨石Ⅱ類〕

②⑥-aのうち397は磨痕のみが認められるので磨石としておく。

〔磨石Ⅲ類〕

③⑥-a (398) は側面に面取りを施している、いわゆる石鱗石である。

〔磨石Ⅳ類〕

⑥⑥-b (399) は球状であり、敲きつつ円を描くようにすり潰すといった使用法が想像される。花崗岩製。

以上のことから磨石は面取りを行なうなどしてより整った形態をしているといえよう。

(参考文献は次の項の終りに記載。)

⑤石器Ⅴ (敲石) (第73図-400~409)

敲石は10点出土している。403が表面採集、401がⅢ層でそれ以外はⅡ層出土である。Ⅱ層ではB-2区に集中している。表11-3に基づいて詳細にみていきたい。

〔敲石Ⅰa類〕

②⑥-aのうち400は長軸方向の端部や平坦面に打痕や凹孔が認められ、形態的にもやや面積の狭い端部をもち、手に持って加撃するに適当な大きさである。401・402にはさらに磨痕が認められる。

〔敲石Ⅰb類〕

②⑥-a (403・404) は不定形をなし、404などは隅丸台形といった平面形である。Ⅰa類とは重量=大きさにおいて差異がある。

〔敲石Ⅱ類〕

③㉑-a (405・406) はⅠa類よりさらに長軸方向に長くなる。406には凹孔がある。

〔敲石Ⅲ類〕

④㉑-a (407・408) は円筒に近い形態で、杵の先端のような機能も考えられる。

〔敲石Ⅳ類〕

⑤㉑-a (409) は平面形はⅢ類と変わらないが断面が平坦である。

〔参考文献〕

安蒜政雄「石器の形態と機能」(『日本考古学を学ぶ(2)』1988年)

後藤秀一「敲石・凹石・磨石」(『聖山』1979年)

⑥石器Ⅵ(凹石) (第73図-411・412)

412はC-2区Ⅲ層から出土したもので、砂岩製。平坦面のほぼ中央に播り鉢状の凹孔が意図的に施されている。それはこの石器が能動的に機能して残されたものではなく、ほかから作用を受けての痕跡である。敲石の部類に扱われる凹石とは区別したい。形態的には表11-3の①㉑-dである。

411はA-2区Ⅱ層から出土した。砂岩製。平坦面に浅い凹孔を持つ。形態的には表11-3の②㉑-dである。412とは規模等の違いがあるが、これらは究めて接近した機能を果たしたのではないと思われる。

⑦石器Ⅶ(石弾) (第73図-410)

いわゆる石弾と呼ばれるものはB-2区Ⅲ層から1点出土している。自然礫を研磨することで球状に仕上げている(長さ/幅 1.13、厚さ/幅 0.96)。安山岩製。重量50g。

⑧石器Ⅷ(石皿) (第74図-413~418)

6点の石皿が出土しているが完形品はなくその全容を知るには困難である。417は表採品。Ⅱ層ではB-2区から3点、B-3区から1点出土した。Ⅲ層ではC-2区から1点出土した。

ここでは使用面の形態から、①凹孔をもつもの、②凹面をなすもの、③平坦なものに分けてみたい。

①凹孔をもつもの

413は全体的に磨きがかかっている。凹んだ面はある程度打ち欠くことによって成形してから使用したものと思われる。掃き出し口をもつ。

②凹面をなすもの

414は緩やかな曲線を描くように凹んでいる。415は側面を面取りしている。中央に当たる部分がやや強く凹んでいる。

③平坦なもの

416と417は全体的に磨きがかかっている。416は反対側の面が山になっており、打痕が認められる。台石のような使用法も考えられる。418は唯一砂岩製である。これも全体的に磨きがかかっており、砥石のような使い方も考えられる。

第12表 磨石等の計測一覧表

図番号	器種	出土区	層位	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
390	磨石	C-1	Ⅲ	安山岩	680	9.6	8.3	3.8
391	〃	〃	〃	安山岩	480	10.4	9.1	2.6
392	〃	A-1	Ⅱ	安山岩	660	8.7	8.1	4.3
393	〃	〃	Ⅲ	安山岩	765	9.3	8.5	4.3
394	〃	C-1	Ⅲ	安山岩	715	11.2	9.6	2.6
395	〃	C-2	Ⅱ	頁岩	935	10.7	10.3	3.5
396	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	140	4.9	4.6	2.0
397	〃	C-2	Ⅱ	安山岩	190	5.2	3.9	2.3
398	〃	B-3	表	安山岩	910	12.7	7.7	4.2
399	〃	A-2	Ⅱ	花崗岩	570	7.5	6.6	5.1
400	敲石	B-2	Ⅱ	安山岩	125	6.1	4.7	1.9
401	〃	C-1	Ⅲ	安山岩	130	5.4	4.1	2.6
402	〃	B-3	Ⅱ	安山岩	150	6.1	4.3	1.8
403	〃	B-1	表	安山岩	580	10.2	8.0	3.0
404	〃	A-1	Ⅱ	安山岩	750	11.8	8.8	3.2
405	〃	B-1	Ⅱ	安山岩	70	4.8		1.8
406	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	170	6.4		2.5
407	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	170	6.5		2.8
408	〃	B-3	Ⅱ	安山岩	190	6.6		2.9
409	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	170	7.4		1.9
410	石弾	B-2	Ⅲ	安山岩	50	2.6		2.2
411	凹石	A-2	Ⅱ	砂岩	70	4.2		1.8
412	〃	C-2	Ⅲ	砂岩	270	7.4		2.4
413	石皿	B-2	Ⅱ	安山岩	7250	30.0		9.3
414	〃	C-2	Ⅲ	安山岩	2730	26.5		4.8
415	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	2290	20.4		5.6
416	〃	B-2	Ⅱ	安山岩	3700	26.0		11.7
417	〃	B-3	表	安山岩	3000	17.5		7.6
418	〃	B-3	Ⅱ	砂岩	2460	27.0		5.6

※石皿はすべて欠損品であり、「長さ」は現存する最大長

第13表 形態による分析

第13表-1

重量 (g)	①	②	③	④	⑤	⑥	合計
1~100		1	1				2
101~200	1	4	1	2	1		9
201~300	1						1
301~400							0
401~500	1						1
501~600		1				1	2
601~700	2						2
701~800	2	1					3
801~900							0
901~1000	1		1				2
合計	8	7	3	2	1	1	22

第13表-2

	①	②	③	④	⑤	⑥	合計
安山岩	6	6	3	2	1		19
花崗岩						1	1
頁岩	1						1
砂岩	1	1					2
合計	8	7	3	2	1	1	22

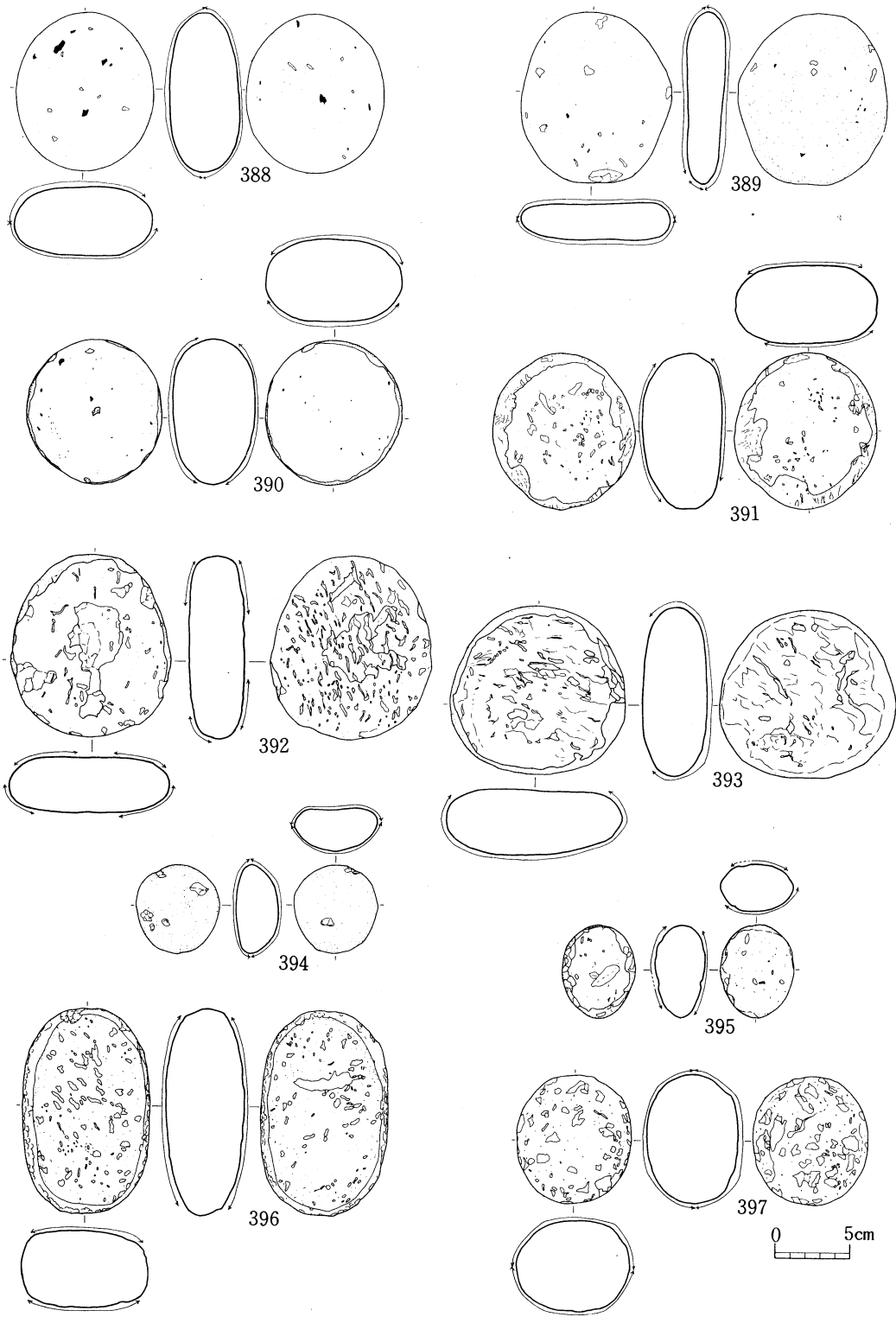
第13表-3

Ⓐ…400g未満、Ⓑ…400g以上

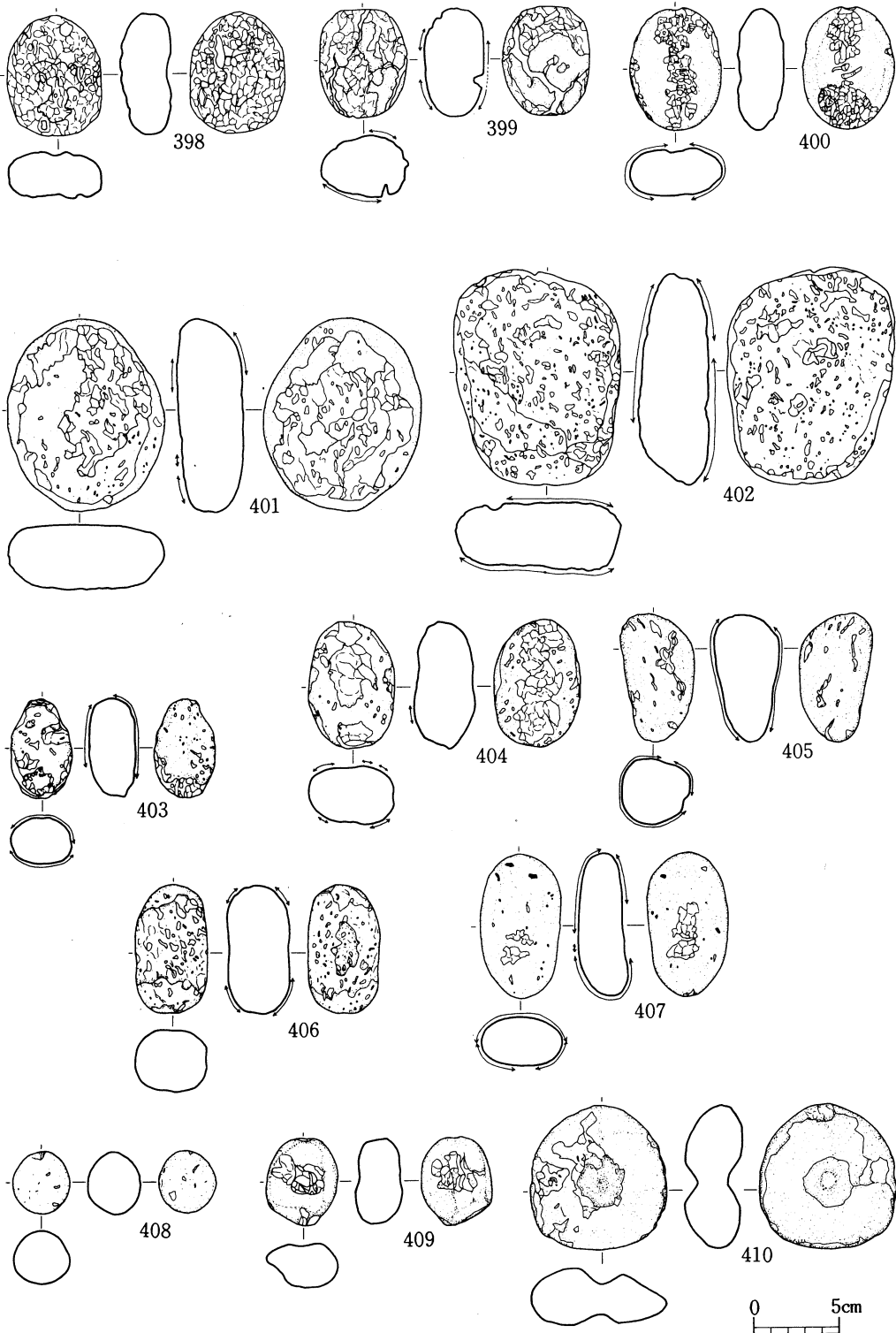
a…安山岩、b…花崗岩、c…頁岩、d…砂岩

A…磨痕のみ、B…磨痕と打痕、C…打痕と凹孔、D…磨痕と打痕と凹孔

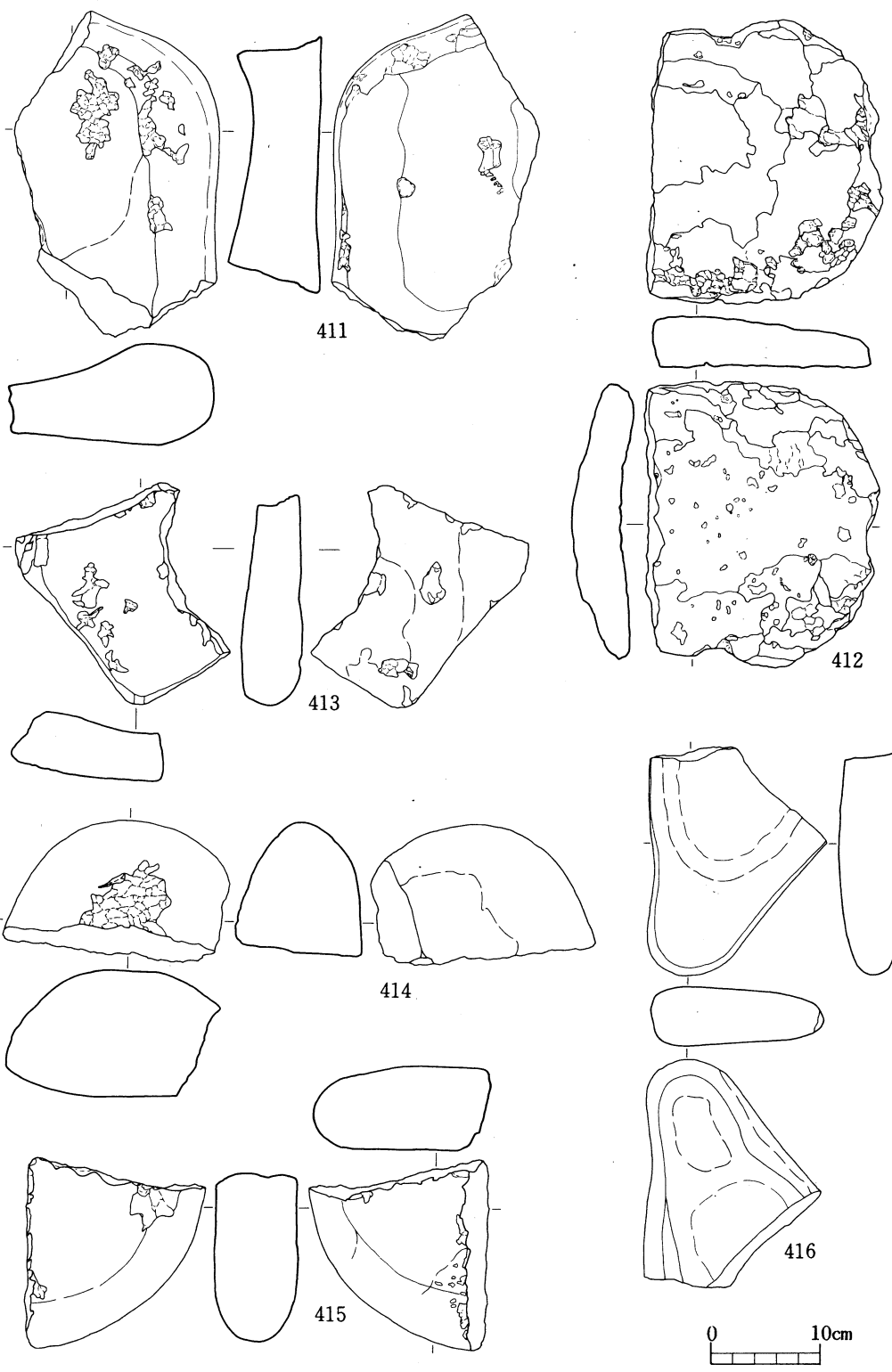
	①				②			③		④	⑤	⑥	合計
	Ⓐ-a	Ⓐ-d	Ⓑ-a	Ⓑ-c	Ⓐ-a	Ⓐ-d	Ⓑ-a	Ⓐ-a	Ⓑ-a	Ⓐ-a	Ⓑ-a	Ⓑ-b	
A	1		2	1	1								5
B			2					1	1	1		1	6
C					1								1
D		1	1		2	1	2	1		1	1		10
合計	1	1	5	1	4	1	2	2	1	2	1	1	22



第72图 石器IV实测图



第73图 石器IV~VI实测图



第74图 石器Ⅷ实测图

4) 加工品

榎田下遺跡では、3種類の加工品が出土している。それらは、円盤形土製加工品（加工品Ⅰ）と棒状土製品（加工品Ⅱ）と円盤形穿孔石製加工品（加工品Ⅲ）の3種類である。

1. 加工品Ⅰ（円盤形土製加工品）

（第75図-419~424）

土器の口縁部や胴部・底部などの破片を利用して、円盤状に加工したものである。これまで各遺跡では、一般的に①周縁部を丁寧に擦って面取りを行なったもの、②やや丁寧に面取りを行なったもの、③ただ打ち欠いただけのものの3種類に分けられる。

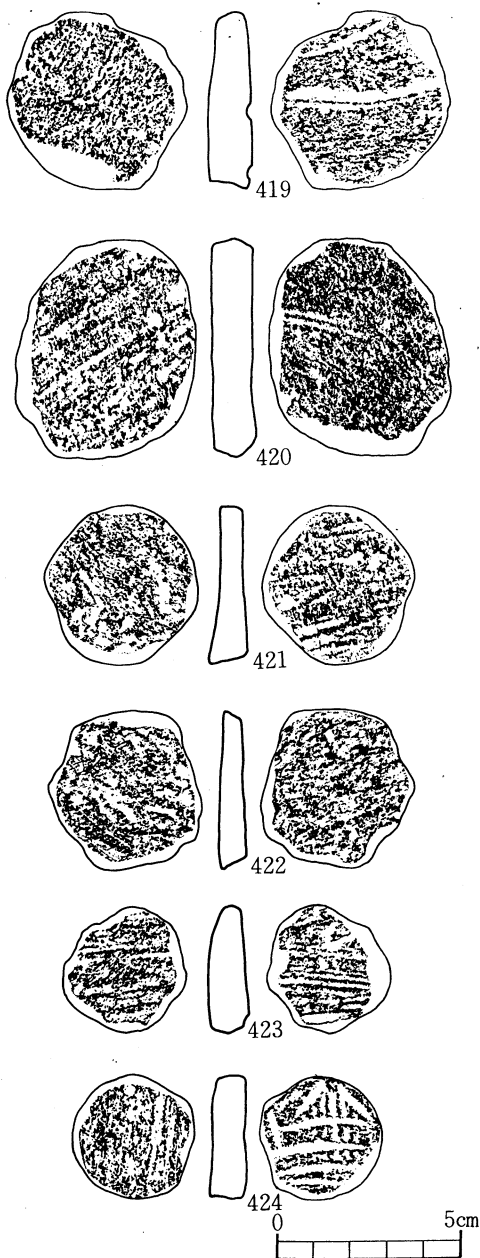
榎田下遺跡ではこの円盤状土製加工品に該当するものは6点出土しているが、そのうち、②やや丁寧に面取りを行なったもの（419・421・424）と③ただ打ち欠いただけのもの（420・422・423）の2種類が出土している。

やや丁寧に面取りを行なったもの

419は、口縁部片であり、口唇部を周縁部の一部としている。419は5cm×4.7cmを測り、ほぼ円形を呈する。口縁部外面には荒い凹線文が施文される。形態から後期の指宿式系土器に該当することが考えられる。器壁厚は1cm~1.2cmを測る。周縁部は、丁寧に擦った面取りではないが比較的丁寧な面取りの部類に入る。421は4.3cm×4.1cmを測り、ほぼ円形に面取りが行なわれている。器面の形態や器壁の形状から市来式系土器に該当することが考えられる。424は3.3cm×3.4cmを測り、ほぼ円形の面取りが行なわれている。器表面には数条の後期特有の凹線文がみられるが、属する型式は不明である。

ただ打ち欠いただけのもの

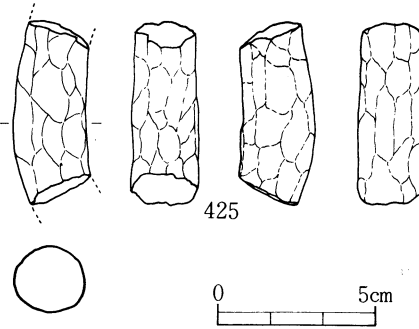
420は、ただ打ち欠いただけのもので周縁



第75図 加工品Ⅰ実測図

部は丁寧な面取りも擦った整形もみられない。6 cm × 4.8 cmの楕円形を呈する形状である。

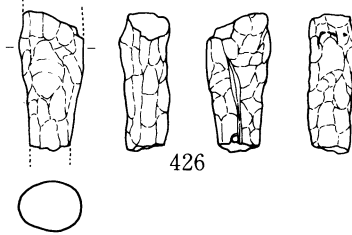
422も同様で径4.0～4.5 cmの略円形を呈し、421も径3.3～3.4 cmの円形である。いずれも無文部を使用しており、形態は後期土器に該当するが型式は不明である。



2. 加工品Ⅱ (棒状土製品)

Ⅵ層から、手捏ねの棒状の不明土製品が2点出土している。いずれも両端を欠損している。これらのものの復元形態その他については不明である。

425は、A2区のⅥ層から出土している。断面は径1.2～1.3 cmのほぼ円形を呈し、長さは3.5 cmを測り両側を欠損している。器面は、手捏ねで比較的丁寧に仕上げている。棒状の形態は、若干カーブをなす。焼成は、良く堅緻である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石粒や角閃石等を含む。

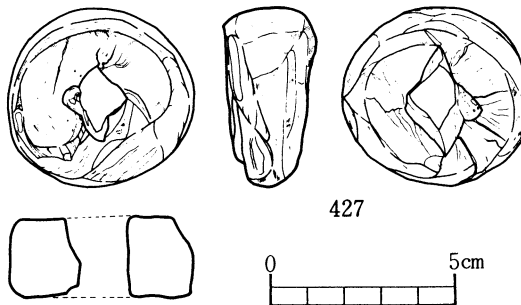


第76図 加工品Ⅱ実測図

426は、B2区のⅣ層から出土している。形態は片方にすぼまる感じで小さくなる。断面は、大きい方は径0.9×1.2 cmの楕円形を呈し、小さい方が径0.8 cmの円形を呈する。長さは、2.6 cmを測り両端を欠損している。器面は、手捏ねで比較的丁寧に仕上げている。焼成は、非常に良く堅緻である。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石粒等を含む。

3. 加工品Ⅲ (円盤形穿孔石製加工品)

C1区のⅥ層から、円盤状の穿孔の有る石製加工品が出土している。直径4.8×5.0 cmを測り、ほぼ円形を呈した形状である。断面は、片方が厚く2.5 cmを測り、他方は1.5 cmと薄くなる。円盤の側面と平面との稜部までは丁寧に研磨されている。平面の表裏は荒く切断され、切断痕を残し研磨はみられない。平面の中央には穿孔が有る。穿孔は十字に断ち切って穿孔する手法がみられるが、そのまま放置され拙稚な状態での仕上がりである。石材は、安山岩である。用途は、不明である。



第77図 加工品Ⅲ実測図

第三章 発掘調査のまとめ

榎田下遺跡は、すでに述べたように確認調査の段階で発見された散布地であり、昭和61年度の確認調査時には既に遺跡の立地する台地先端は橋梁工事が発注され削平されていた。確認調査及び本調査の結果、遺跡はこの台地全体に広がっていたことが想定され、削平された台地先端部や用地外に広がる南側部分を含めるとかなり広い面積を占める遺跡であったことが想定される。遺跡は北東向きの若干地理的には悪条件に立地するが、縄文時代前期と後期を中心とする比較的良好な遺跡であることが判明した。ここで、今回の調査で得られた成果についての若干のまとめをしておきたい。

第1節 縄文時代前期について

縄文時代前期に該当するものでは、集石遺構と出土土器がある。なお、土器以外の石器やその他の遺物については、出土層位が同層のため判別は不可能で後期の節で一括して取扱った。

①集石遺構について

集石遺構は、6基検出されている。いずれも調査区の先端部から中央部に検出されており、橋梁工事で破壊された部分を含めるとかなりの数が想定される。しかし、集石の該当する時期についてはなんら確証はなく不明であるが、一応ここでは包含層（VI層）の最下層に検出されたことから前期としておきたい。

集石は、1号は140cm×80cmの楕円形の最も大きいプランであるが、4号・5号は90cm×70cmの中程度のプランで、2号・3号と6号は60cm×50cm程度の小さなプランの集石である。

集石はいずれも散乱した状態であり、炉石状の花弁形に配石されたものなどは検出されていない。また、いずれも明瞭な掘り方は確認されていない。僅かに2号と3号と6号において凹部に集石がみられる程度である。検出状態では、これ以上のことは判明していない。

そこで、次のような集石の測定と集石の実験を行ない、遺跡検出の集石の実態を分析してみ

第7表 集石一覽

	1号	2号	3号	4号	5号	6号
規模	140×80cm	60×50cm	60×40cm	90×70cm	90×70cm	60×70cm
石数	73個	22個	22個	46個	24個	35個
形態	平坦	凹部	凹部	平坦	平坦	凹部

た。第16図は、各集石の石の最大長と重量比のグラフである。このグラフによると二つのパターンが看取される。1号・4号・5号・6号は小石片及び軽量石片が多く縦軸に寄り0に近くパターンで、2号・3号はその逆で浮遊したパターンである。そこで、第15図の上のグラフは実験集石で得た被覆石と炉石の同方法の測定のデータで、下のグラフが炉石の測定データである⁽¹⁾。100個の石を被覆石と炉石に使い分け実験したもので、3回目の実験の測定データである。この実験データで判断すると、2号と3号は炉石の可能性がありその他は被覆石の可能性もある。このような実験データは一部のデータの測定値に偏るところが多いが、昨今の発掘調査では散乱する集石の発見が多く、今後、集石遺構の分析方法を追及する必要がある。

② 土器について

前期に該当する土器は、Ⅱ類からⅤ類土器の4類である。

Ⅱ類土器は、隆帯文土器系土器で轟B式土器に比定される。器内外面は粗い条痕で整形し、口縁部近くに隆帯文を貼付するのが特徴である。8～26の隆帯文は指頭押圧で貼付され、さらに縦位(9)の貼付や多条の横位の隆帯文の下位に二条の波状(或は山形)の隆帯文(16)を貼付しているものなどがあり轟BⅡ式土器に該当することが考えられる⁽²⁾。しかし、少量のためか屈曲部などの破片は出土していない。その他に、27～30のように鋭利な断面三角隆帯文で条痕文を丁寧にナデ整形したタイプも存在しており、形態が異なるタイプも含まれている可能性がある。

Ⅲ類土器は、器内外面をいわゆる条痕で整形する系統である。Ⅲ類土器は基本的には条痕文が主要素で轟A式土器の範ちゅうに属することも考えられるが⁽³⁾器形や形態には差異が認められる。尖底の円錐形の器形で器壁が分厚く粗い条痕文で整形するタイプ(31・32)や丸底(69～71)や口唇部平坦面に刺突文を施すタイプ(62・63)、さらに68のように口縁内面に刺突文を施すものもあり、時期差が存在することが考えられる。

Ⅳ類土器は、沈線文系土器で曾畑式土器に属するものである⁽⁴⁾。器壁が薄手と厚手の二つのタイプに分けられいずれも胎土には滑石は混入しないが、当然時期差が考えられる。さらに薄手のものには、沈線のシャープなもの若干粗くあまいものに分けられる。95・96は、曾畑式特有の蜘蛛の巣状の底部である。

Ⅴ類土器は僅か二点の出土であるが、押し引き文状の独特のタイプである。型式は不明であるが、刺突文状の押し引き文と内外面の丁寧なナデ整形に特徴がみられ外来の土器文化(例えば羽島下層式土器など)の可能性もある⁽⁵⁾。

第2節 縄文時代後期について

縄文時代後期に該当するものは、多量の出土遺物があるが遺構は検出されていない。出土遺物には、土器、石器、加工品等がある。

① 土器について

後期に該当する土器は、Ⅵ類からⅧ類土器の3類(5細分)とⅨ類土器(底部)である。

Ⅵ類土器は、凹線文を主文様とする系統で文様の形態から3種類に細分できる。

VI-1 類土器は、幅 7mm 程度の指頭状の太形凹線文を施し、器壁も 12~15mm と分厚いタイプである。凹線文は、比較的密に施文され曲線文や S 字状文が展開する。凹線文間の無文部の地文には粗い条痕文が確認される。これらの特徴から、阿高式土器の系統に属し志布志町宮之前遺跡タイプに酷似することが考えられる⁶⁾。

VI-2 類土器は、口縁部の上端に貝殻腹縁刺突文を 1 条巡らせ、その下方には凹線文が展開するタイプである。平縁口縁の他に波状口縁も存在する。最近、志布志町中原遺跡から阿高式土器からの推移が把握される良好な資料が出土しており、この中原遺跡タイプに類似することが考えられる⁷⁾。

VI-3 類土器は、細形の凹線文の系統で基本的には二本平行凹線文の指宿式土器に比定される形態である⁸⁾。本遺跡の唯一の完形品の出土であるが、口縁外面は外反気味に直行するが内面には稜をつくりその部分は若干厚くなる。

VII 類土器は、凹線文間の無文部に貝殻腹縁刺突文を充填させるものである。従来、このタイプは一般には「疑似縄文」と呼ばれているが、丁寧に縄文を疑似化したものは少なく安易に凹線文間に貝殻腹縁刺突文を充填したものが多く、そのため、磨消縄文土器の影響下にあることは考えられるが、「貝殻刺突充填文土器」と呼称した。これまでこの技法のタイプは、綾式土器が著名である⁹⁾が最近多くの遺跡で発見されており、形態や型式の整理が急がれる。

VIII 類土器は、口縁部が屈曲するタイプで市来式土器の範ちゅうに入ることが考えられるが、市来式土器独特の肥厚口縁ではなく新しいタイプとして注目されるものである¹⁰⁾。

IX 類土器は、底部を一括したがすべて後期に属することが考えられる。大多数の平底の他に 1 点の上げ底が存在し注目される。外来系の影響が考えられる。また、平底には、網代ともじり編みの圧痕を有するものが存在する。

② 石器について

石器は、各器種を石器 I~VIII に類別して説明した。そのなかでも石器 I (石鏃) は、狭い調査範囲にも拘らず 200 点余の出土で注目された。

石器 I (石鏃) は完形品・半欠品・未製品合せて 202 点を数えるが、B 2 区を中心にして出土し A 2 区から C 2 区へと拡がる様相を呈している。形態的にはパレテターに富み、平基式・凹基式・円基式と大きく 3 つに大別でき、さらに 9 つに細分できた。しかし、包含層は縄文時代前期土器と後期土器が混在した状態のため、層序関係で時期差や形態差を捉えることは不可能であった。

石材は 2 点の玄武岩製と 1 点の石英製を除いた他は全て黒曜石であるが、黒曜石にも石質に微妙な違いがみられた。例えば、II C・II D 類に多くみられる良質で縞模様が入ったものや IV 類に多い気泡を含む淡黒色のものなどの存在である。これらは時間的・空間的な差異と考えられるが、今後、石質と形態・出土土器との相関関係を分析して結論を導き出したい。

次に、石器 II (石錐・石匙)・石器 III (石斧) は断片的資料であるが、石器 IV から石器 VIII は比較的まとまった量が出土している。特に、石器の器種と石材との関係が興味深い。安山岩は

平均的に全器種に使用され、石皿と砥石では15個中13個を占める。花崗岩は磨石・磨石+敲石に多用し、砂岩は敲石と凹石類に使用している。これらは、石器の用途に応じて石材を選択していたことがうかがえる。

加工品Ⅰは通称メンコと呼称される円盤形土製加工品であるが、本遺跡出土のものは量的にも少なく全体的に粗造りのものが多い。

加工品Ⅱは棒状の手捏ね土製品であるが、両端が欠損しており形態は不明である。しかし、中ノ原遺跡の晩期住居址でも1点出土¹¹⁾、さらに笠沙町西之蘭遺跡では土偶の腕と思われる形状のものも出土している¹²⁾。県外でも類例が増えており、資料の増加をまちたい。

加工品Ⅲは、円盤形の穿孔の有る石製加工品である。整形や穿孔は稚拙であるが、器面の研磨は丁寧である。紡錘車の形状が想定されるが、類例が無く実態は不明である。

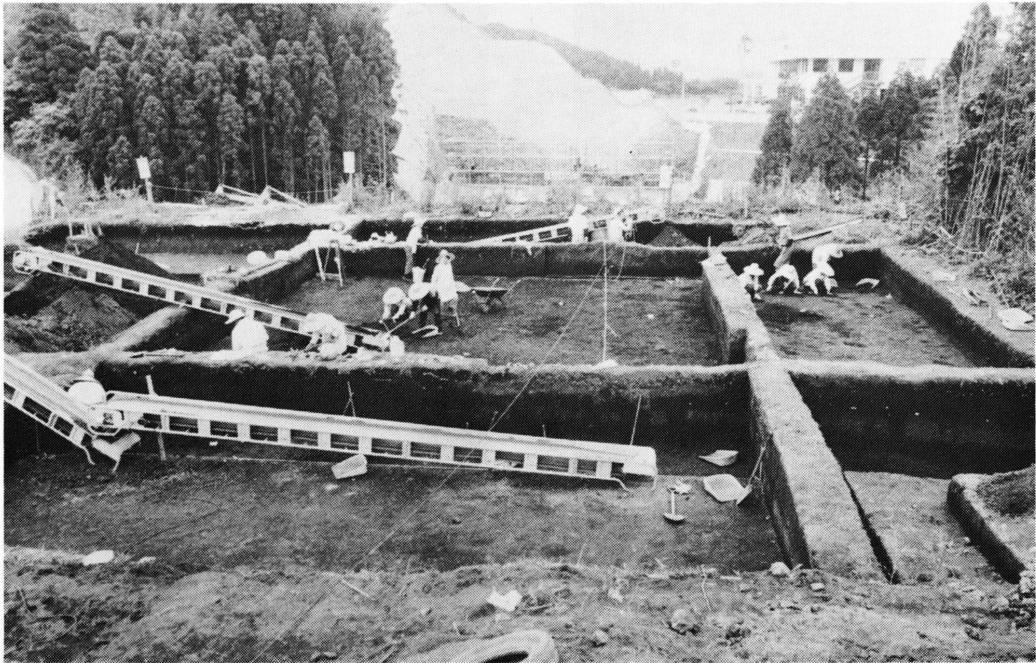
以上、簡単に榎田下遺跡の調査の成果についてまとめたが、各遺構や各遺物の遺跡間の問題や評価については「分析・考察」編で取り上げたい。

註(引用文献)

- (1) 発掘調査中に行なった実験の結果である。炉石は、円形の凹みを掘り礫を花卉状に並べたものである。その上で火を炊き、花卉状の炉石を熱する。被覆石は、薪の上で熱した石である。そして、この被覆石を炉石の上に被せて石蒸炉とした。この実験を3回繰り返して、3回目の炉石と被覆石を測定したのが第15図である。
- (2) 宮本一夫 1989「轟B式土器の再検討—京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に—」『肥後考古』7
- (3) 松本雅明・富樫卯三郎 1961「轟式土器の編年」『考古学雑誌』47-3
- (4) 江本直 他 1988「曾畑」『熊本県文化財調査報告書』第100集 熊本県教育委員会
- (5) 鎌木義昌・高橋護 1965「瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代
- (6) 志布志町教育委員会 1975「宮之前遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (7) 志布志町教育委員会 1985「宮之前遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
- (8) 賀川光夫 1965「九州東南部」『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代
- (9) 小林久雄 1939「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座』第11巻
- (10) 本田道輝 1981「市来式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- (11) 榎田下遺跡と同年度に発掘調査し、今回発行の鹿児島県教育委員会『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(48)「中ノ原遺跡」1989年に所収されている。
- (12) 鹿児島県教育委員会 1979「西之蘭遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(8)



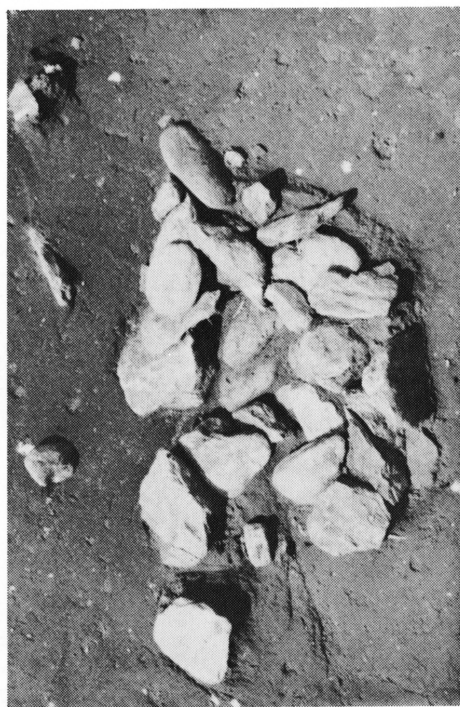
1. 遺跡遠景 (東から)



2. 発掘調査風景 (西から)



4. 集石 4号検出状況



3. 集石 6号検出状況



2. 集石 1号検出状況



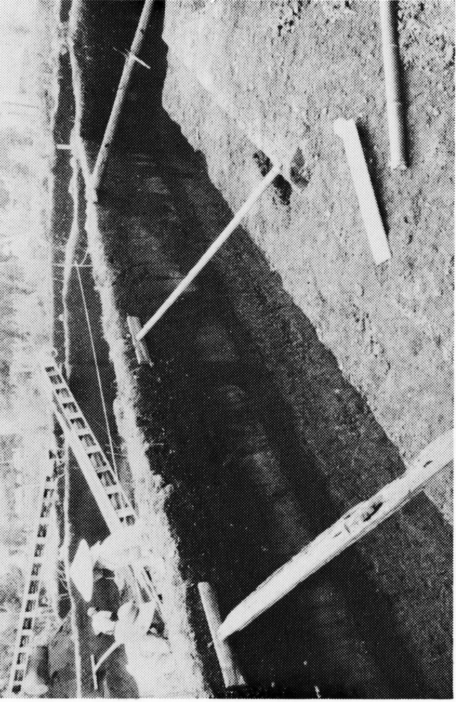
1. 集石 5号検出状況



2. 層位断面崩壊状況



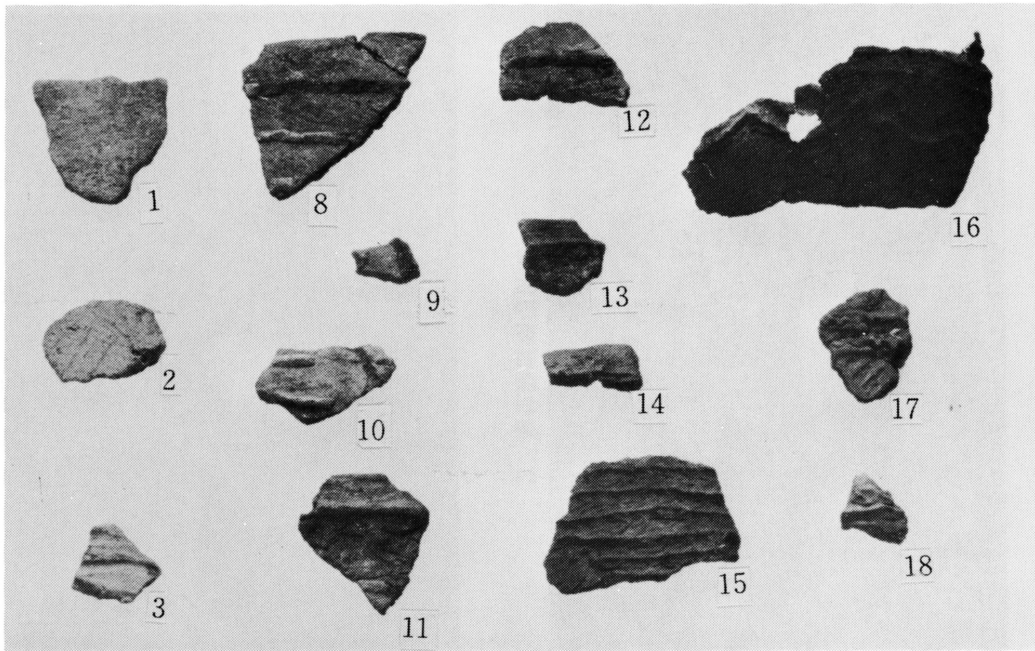
4. 石製加工品出土状況



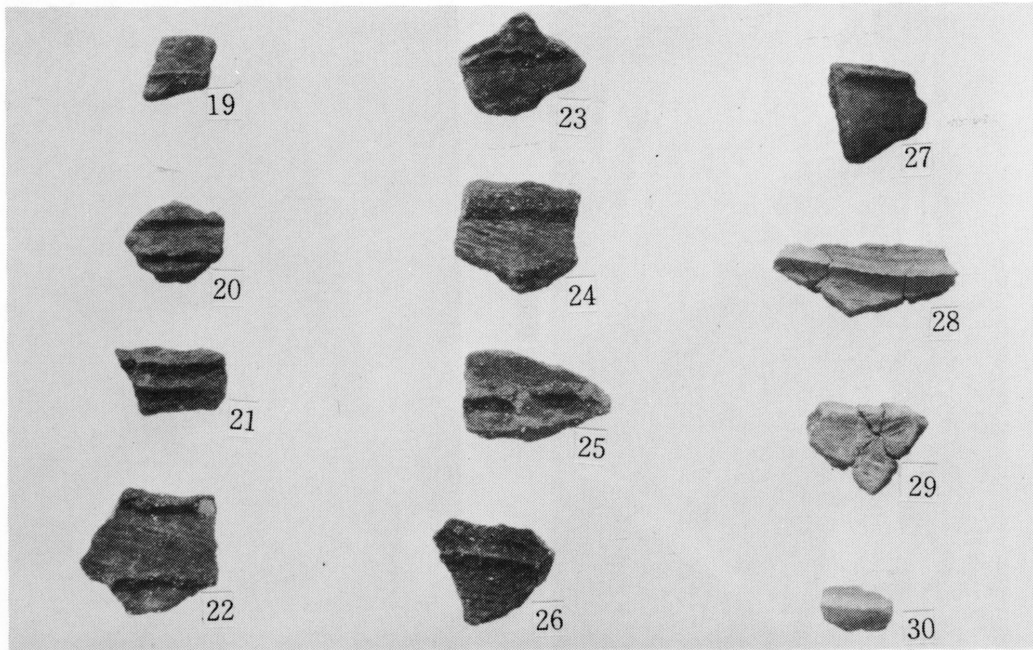
1. 層位断面



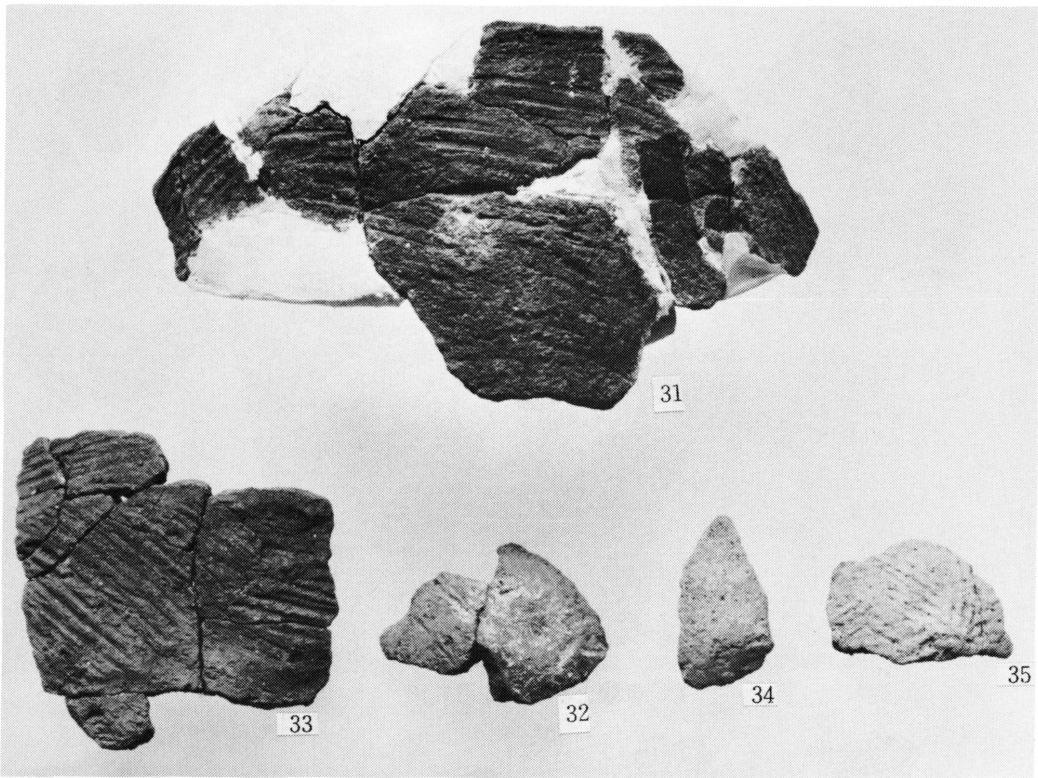
3. 地層横断



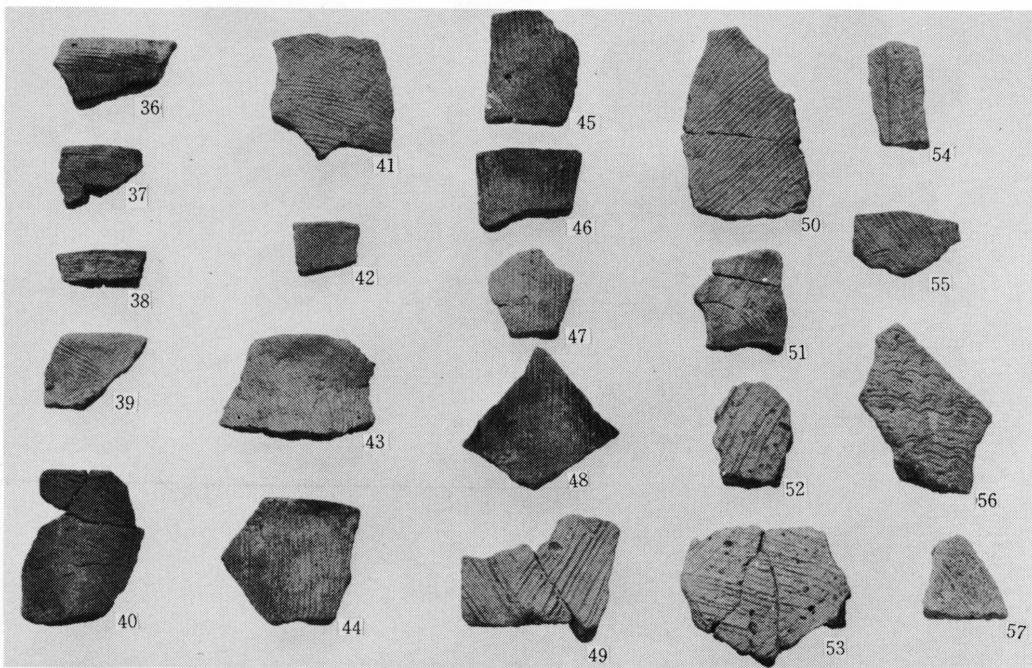
1. I類土器 (1~3) ・ II類土器 (8~18)



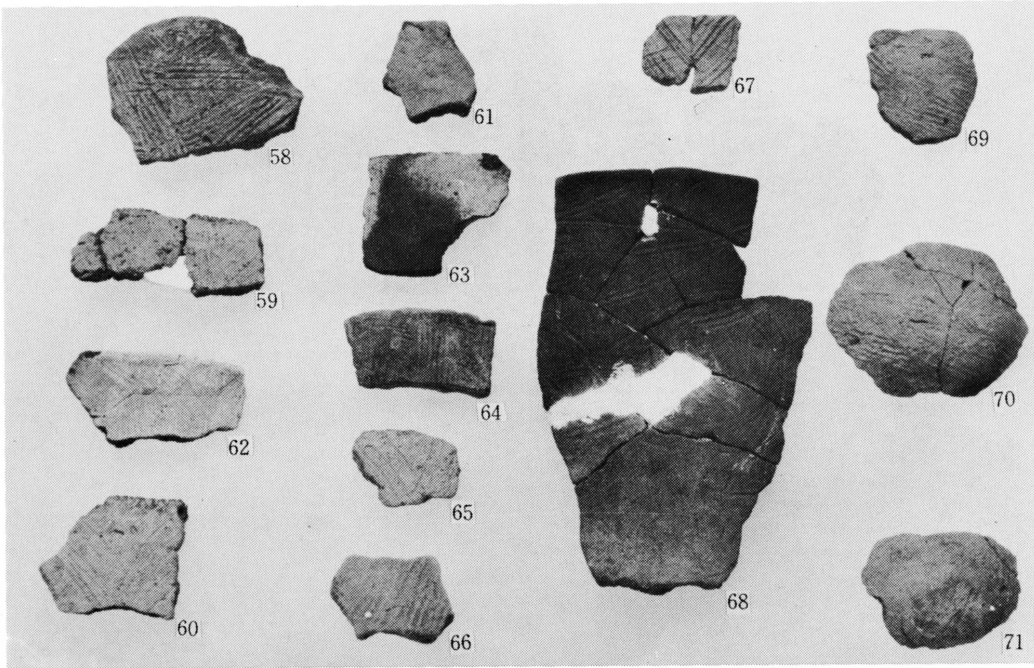
2. II類土器 (19~30)



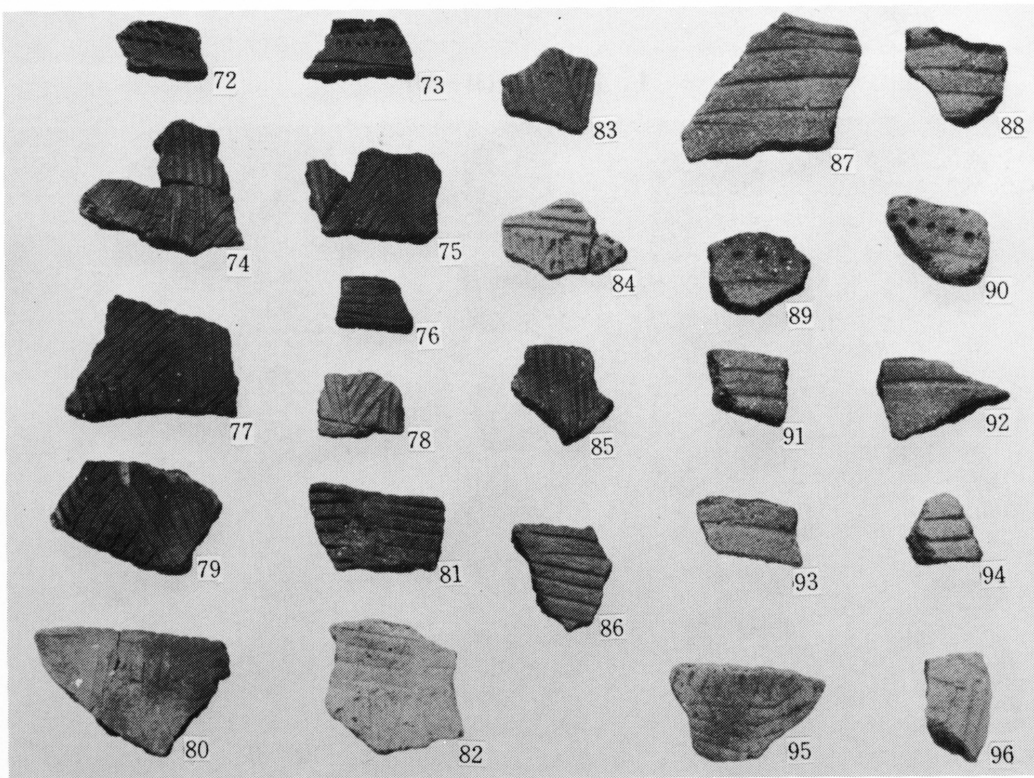
1. Ⅲ類土器 (31~35)



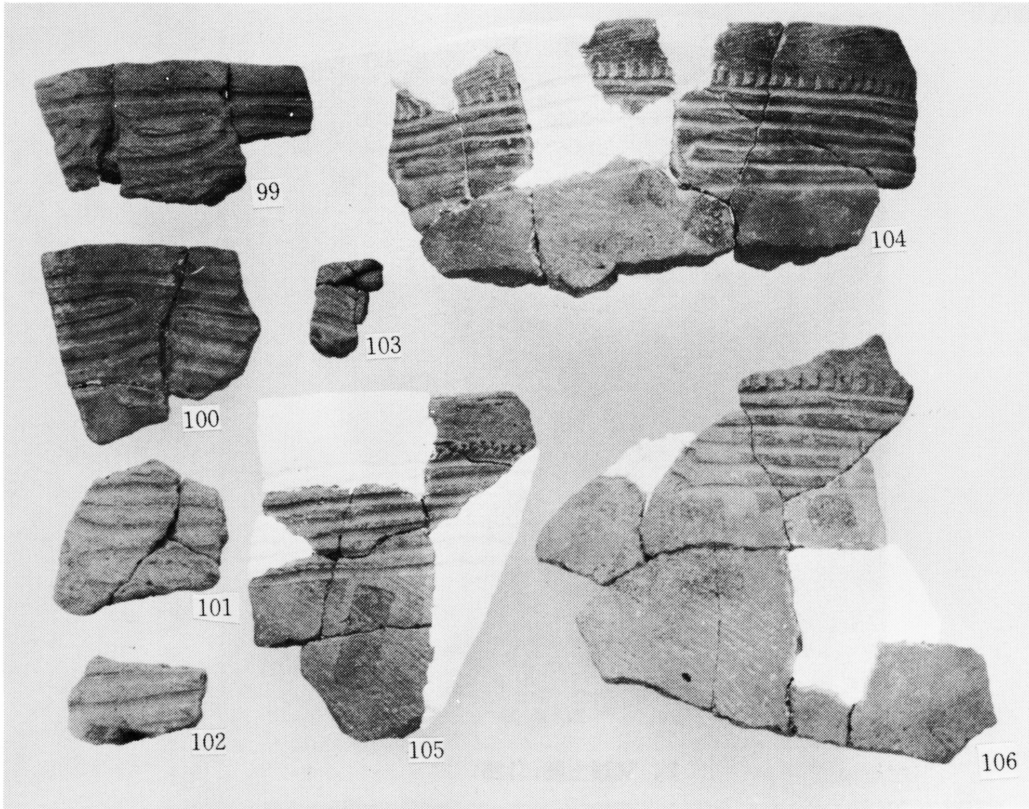
2. Ⅲ類土器 (36~57)



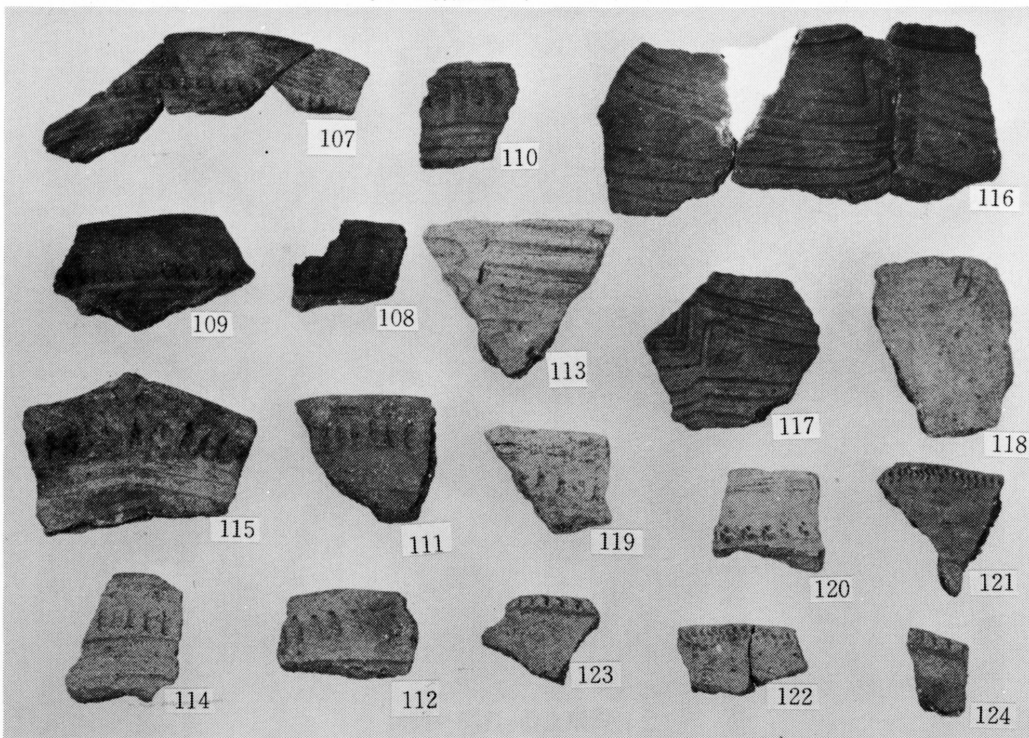
1. III類土器 (58~71)



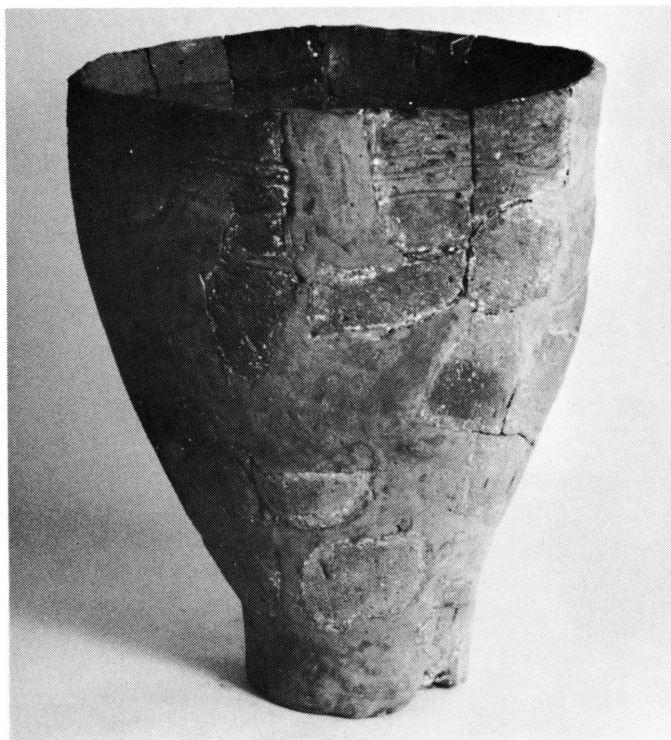
2. IV類土器 (72~96)



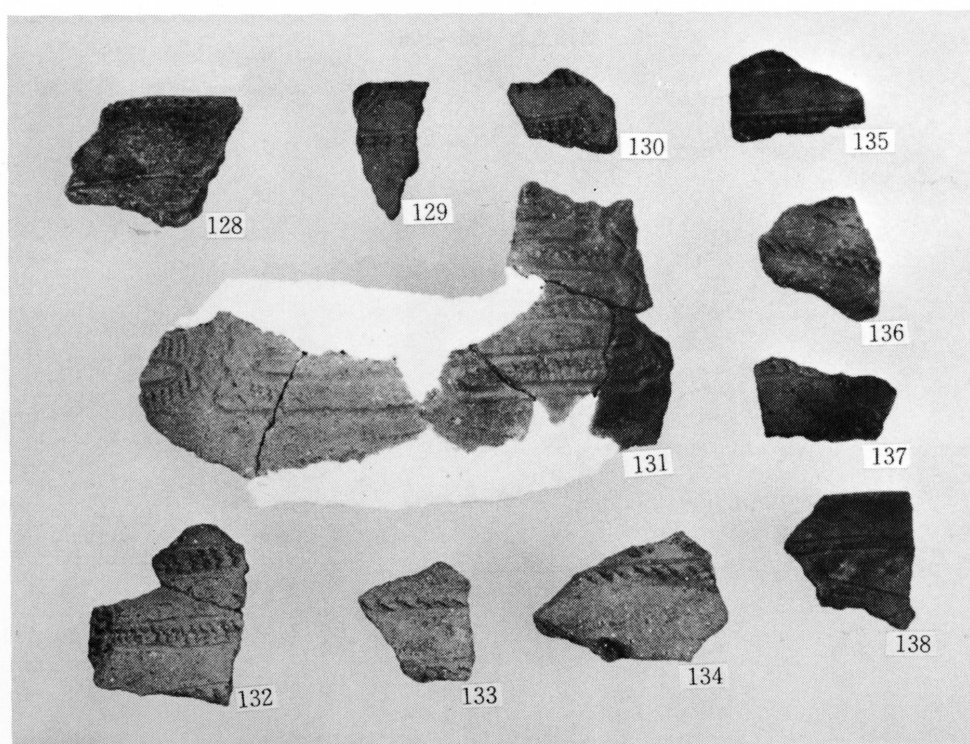
1. VI類土器 (99~106)



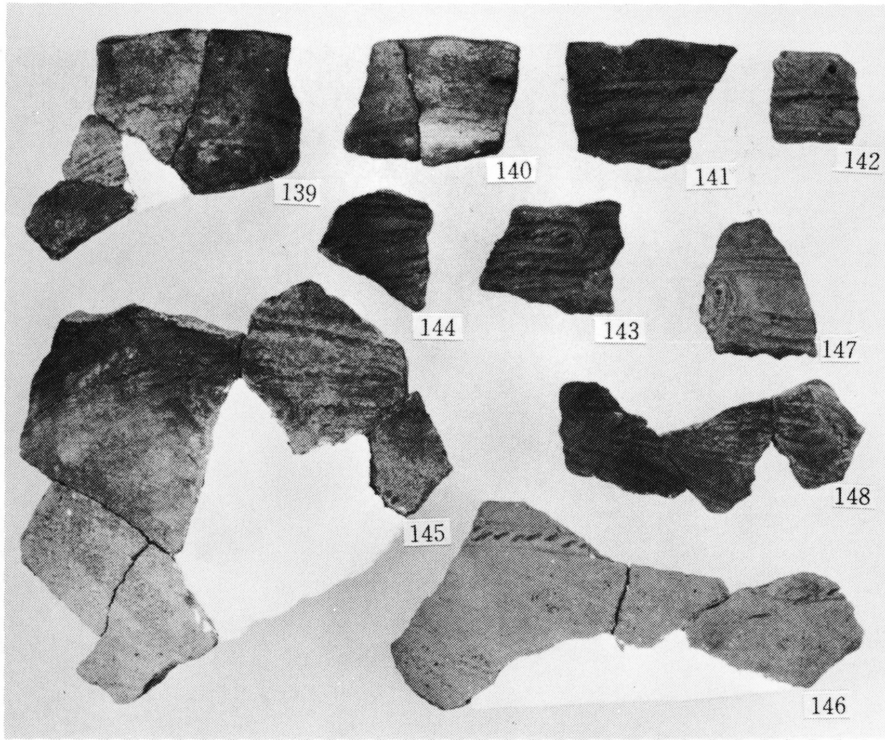
2. VI類土器 (107~124)



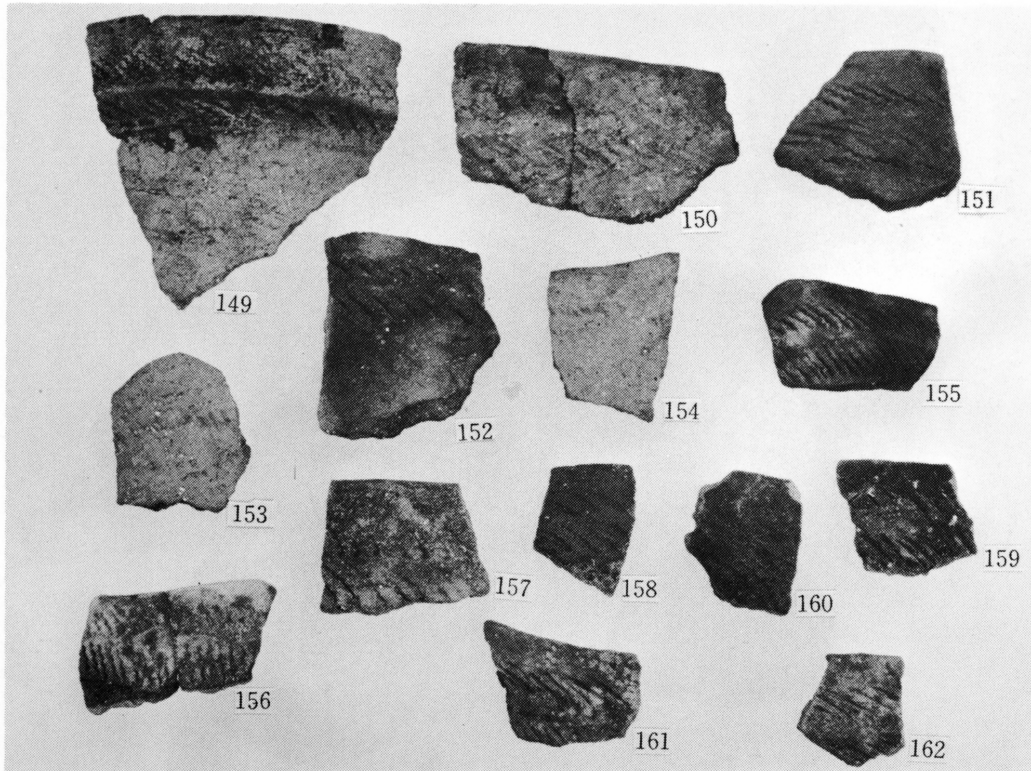
1. VI類土器 (125)



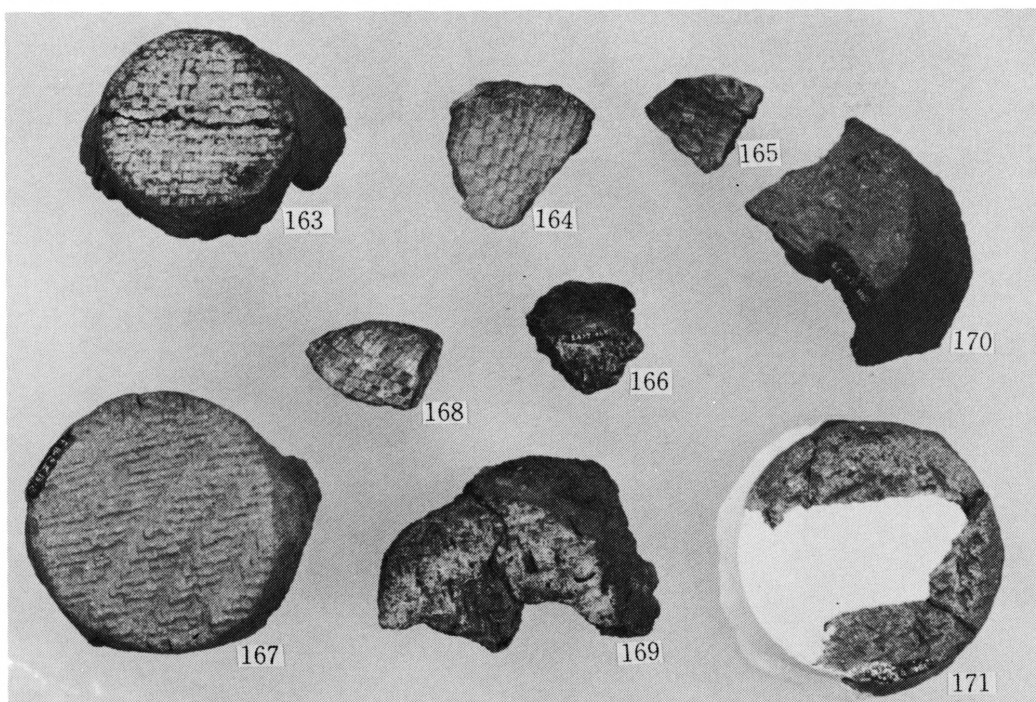
2. VI類土器 (128~138)



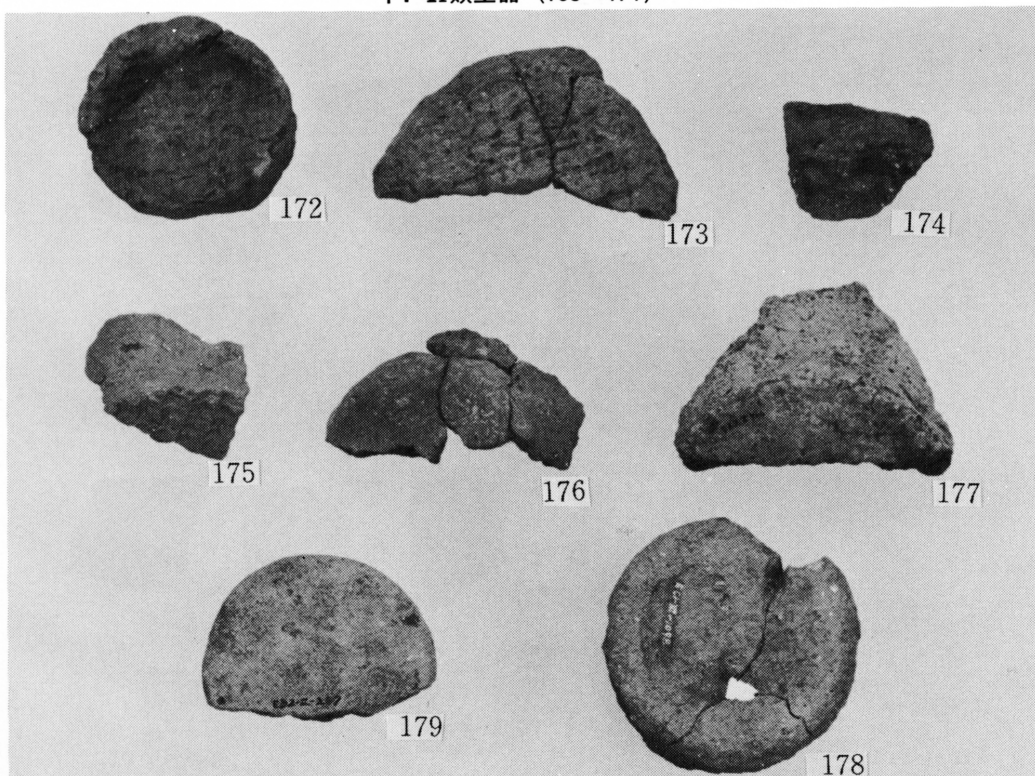
1. VII类土器 (139~148)



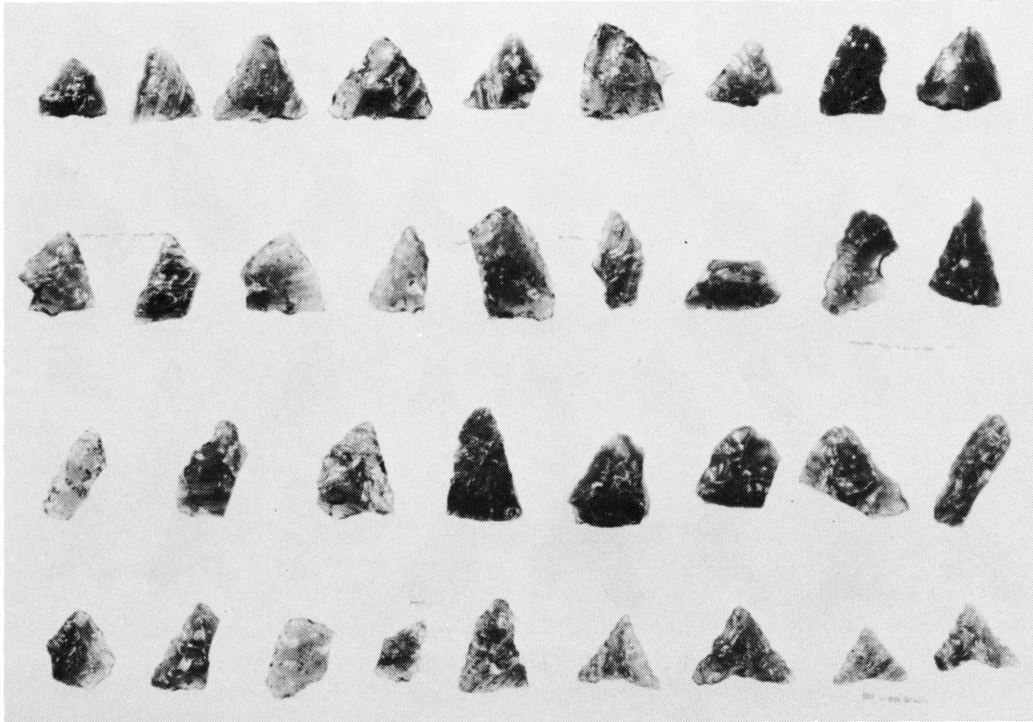
2. VIII类土器 (149~162)



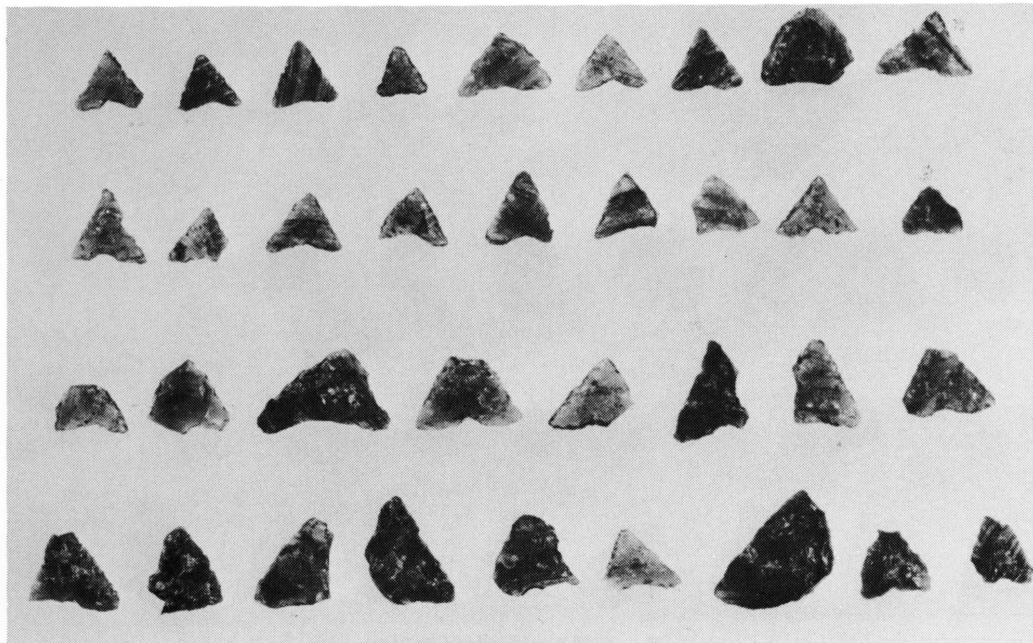
1. Ⅹ類土器 (163~171)



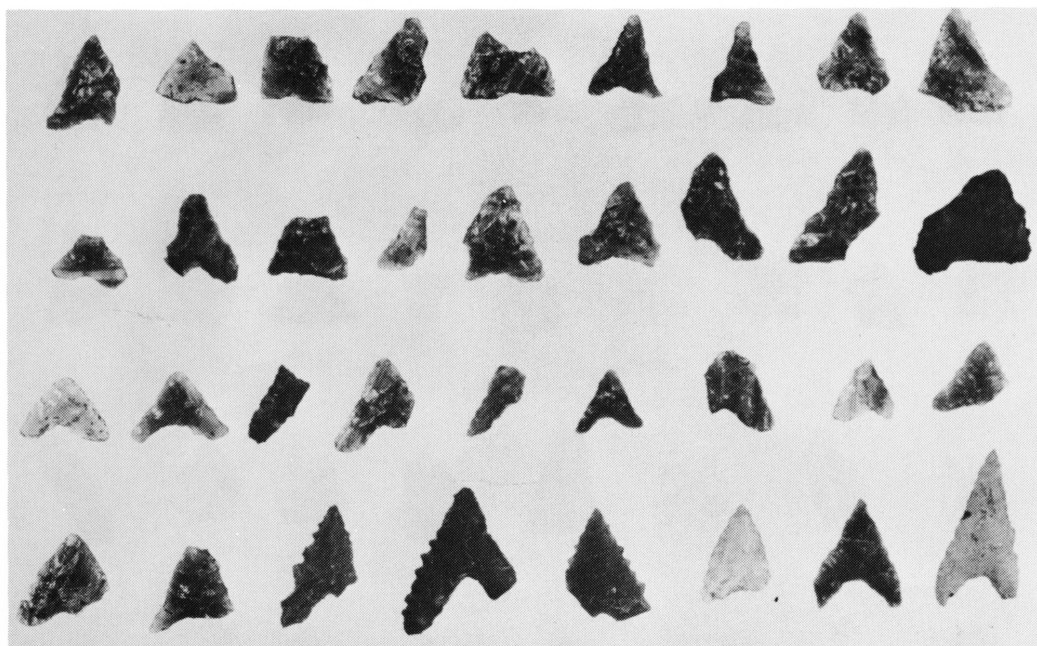
2. Ⅹ類土器 (172~179)



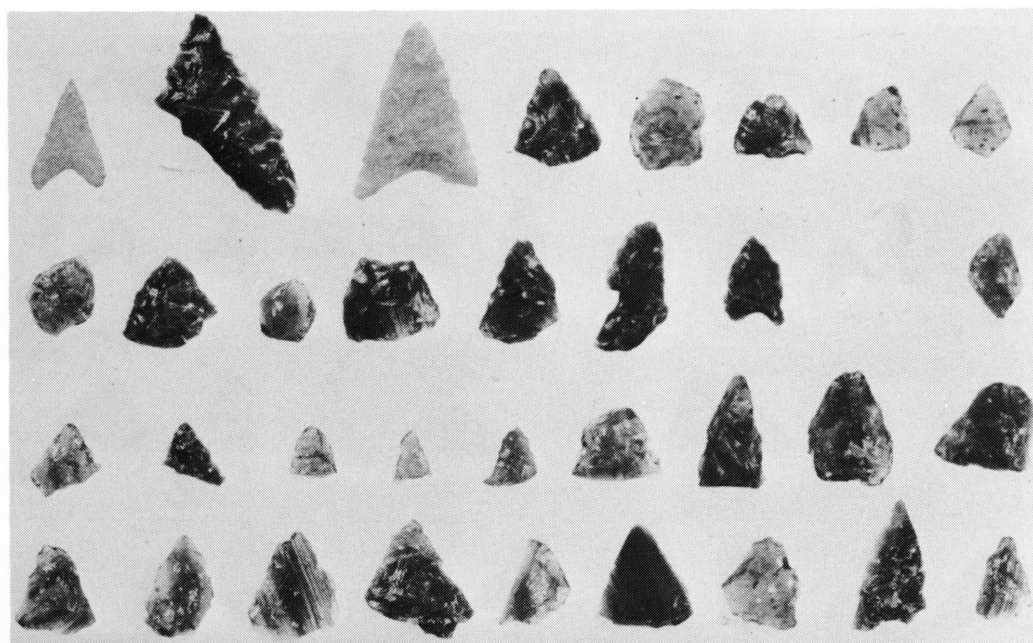
1. 石器 I (石鏃180~214)



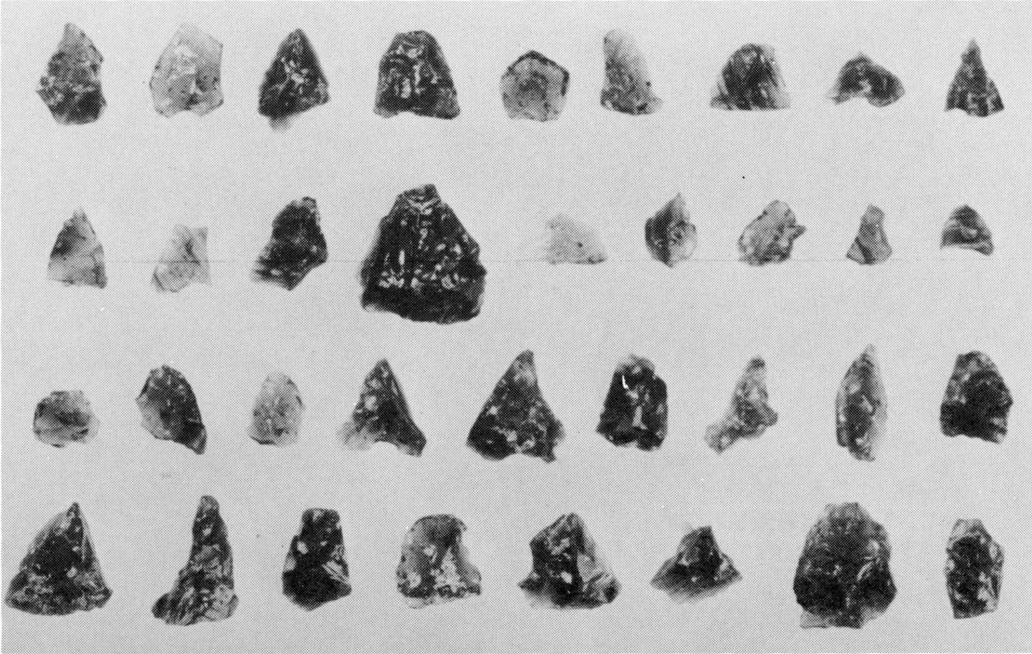
2. 石器 I (石鏃215~249)



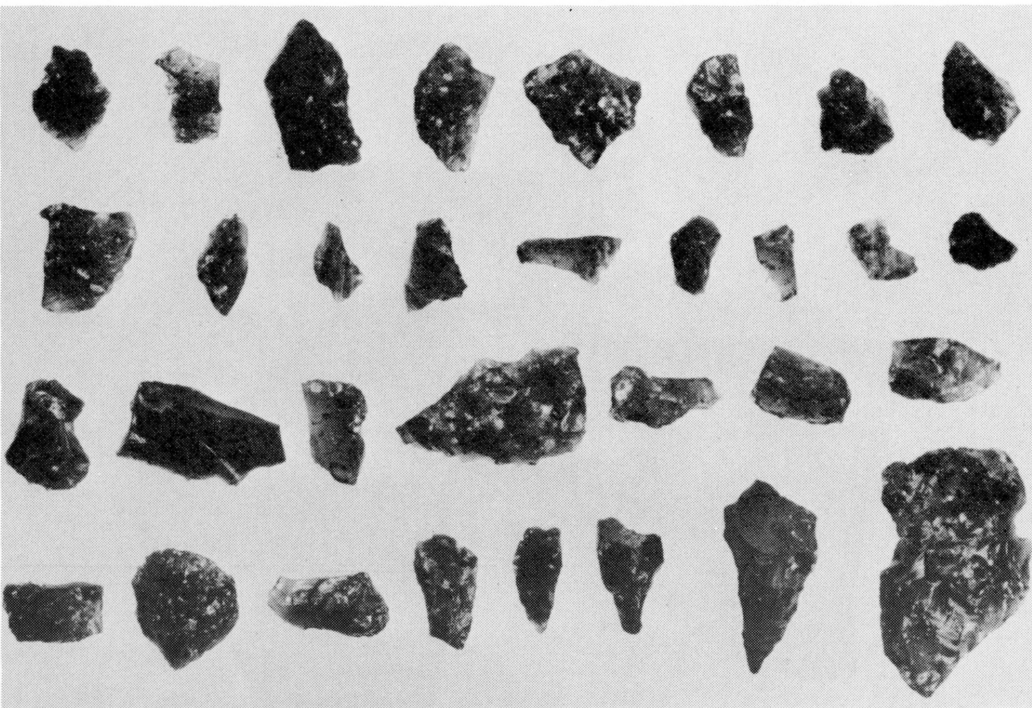
1. 石器 I (石鏃250~284)



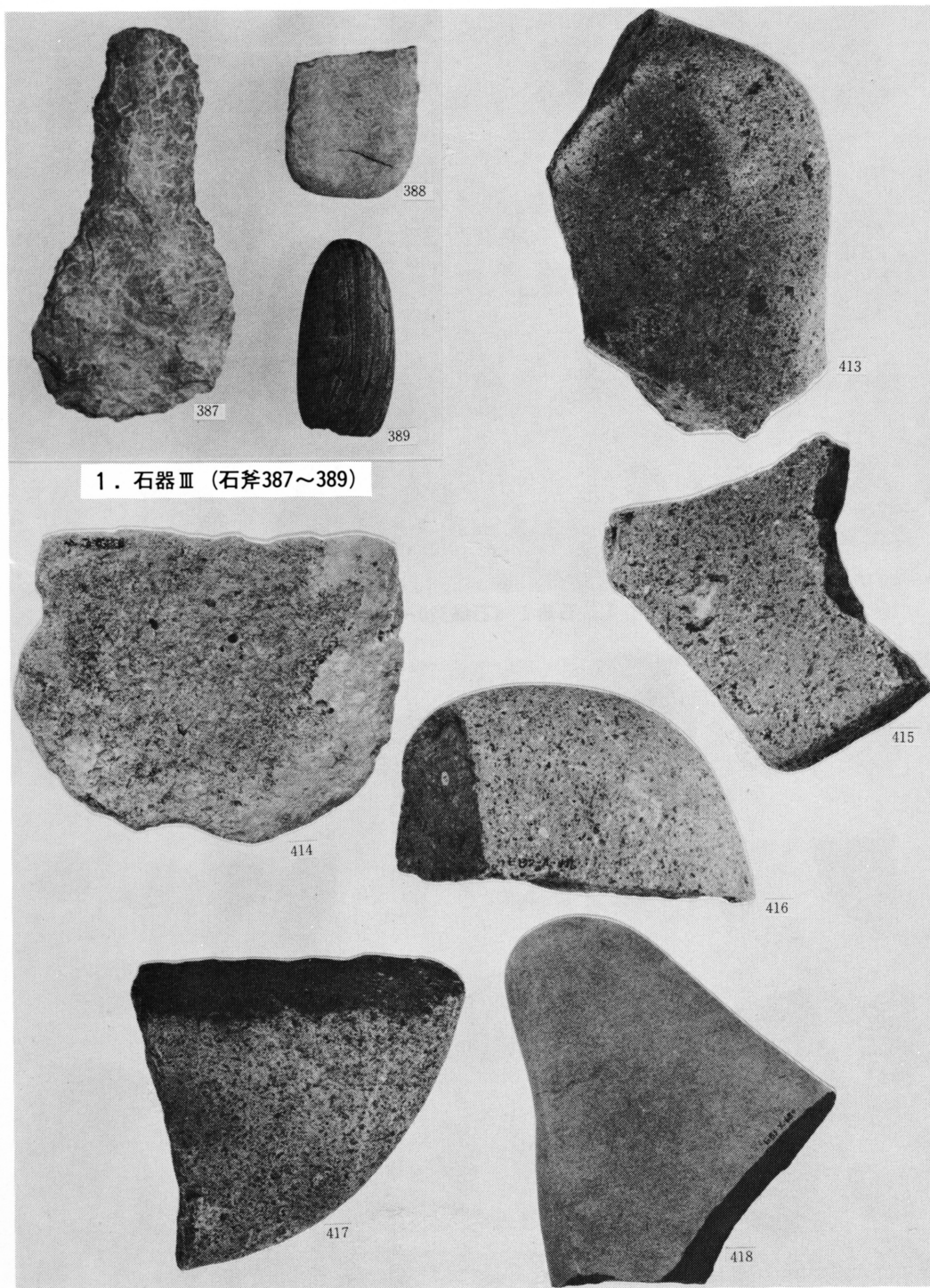
2. 石器 I (石鏃285~319)



1. 石器 I (石鏃320~354)

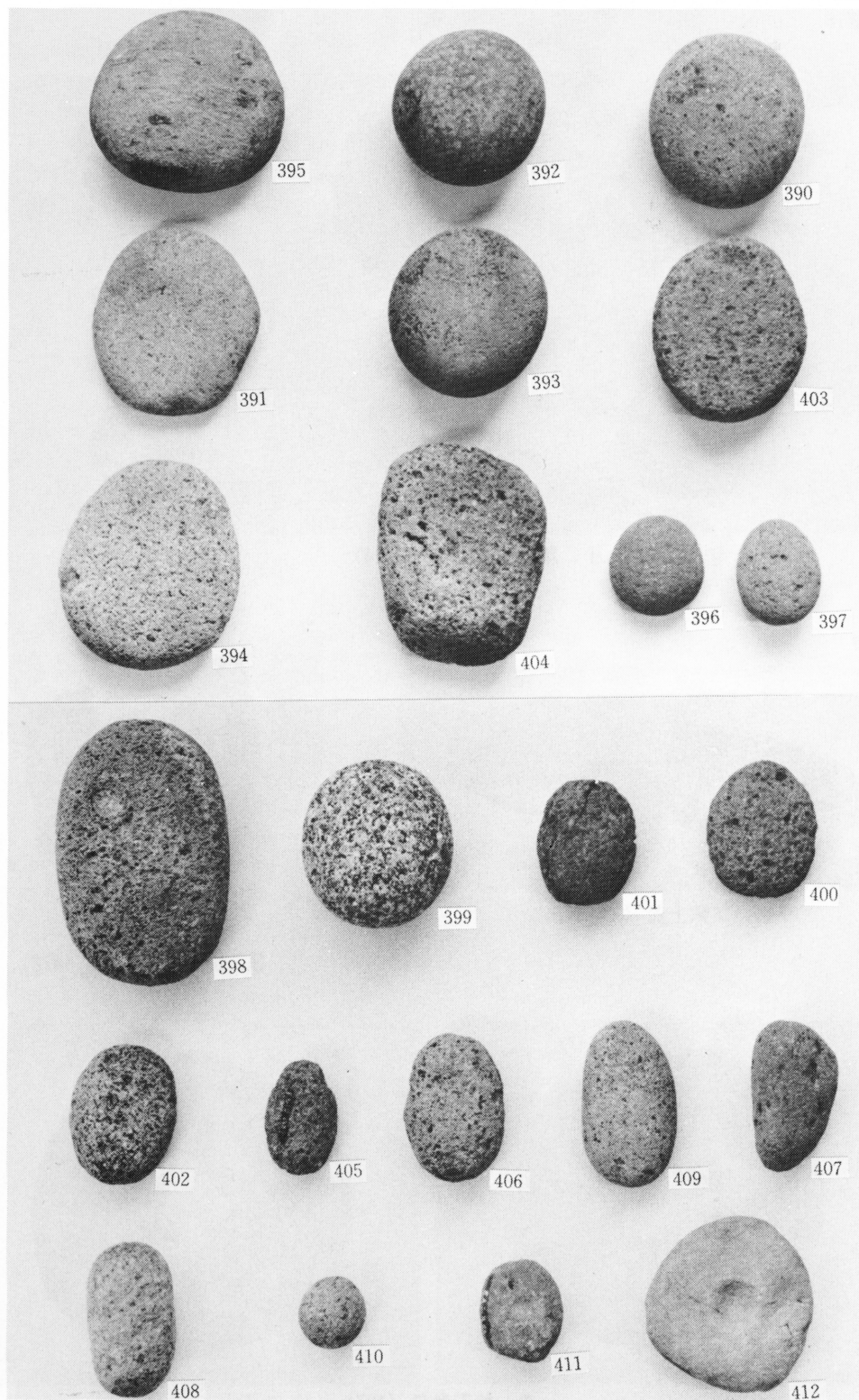


2. 石器 I (石鏃355~386)

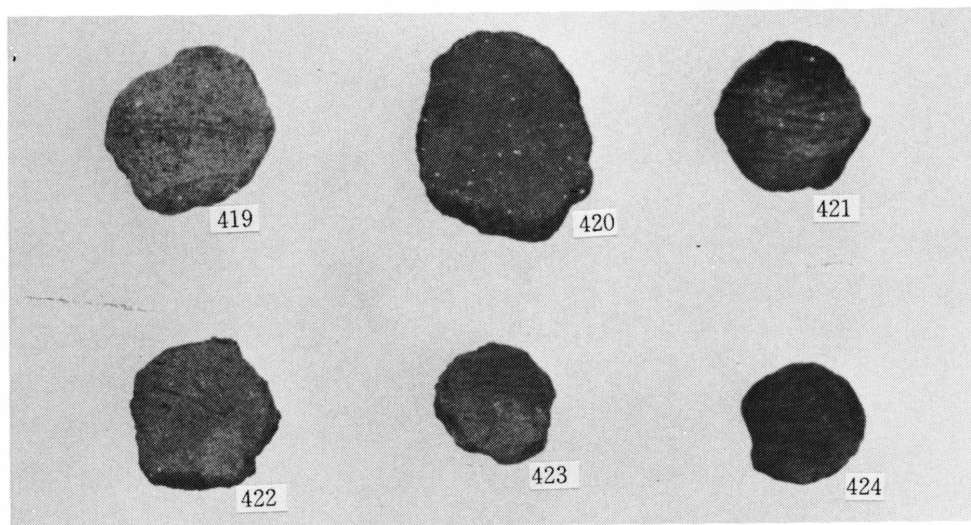


1. 石器Ⅲ (石斧387~389)

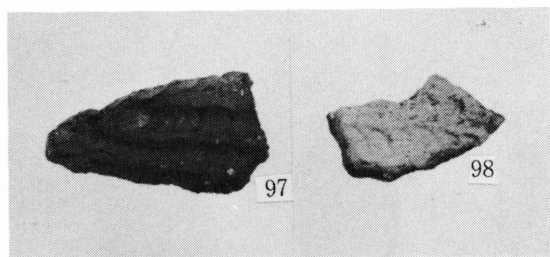
2. 石器Ⅳ (石皿413~418)



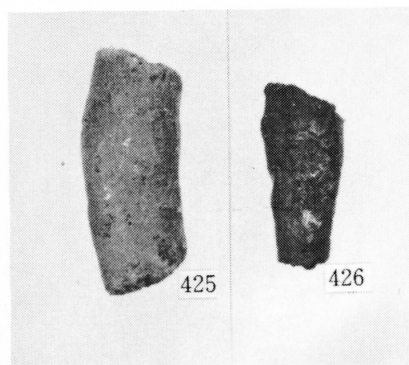
1. 石器IV~VII (磨石等390~412)



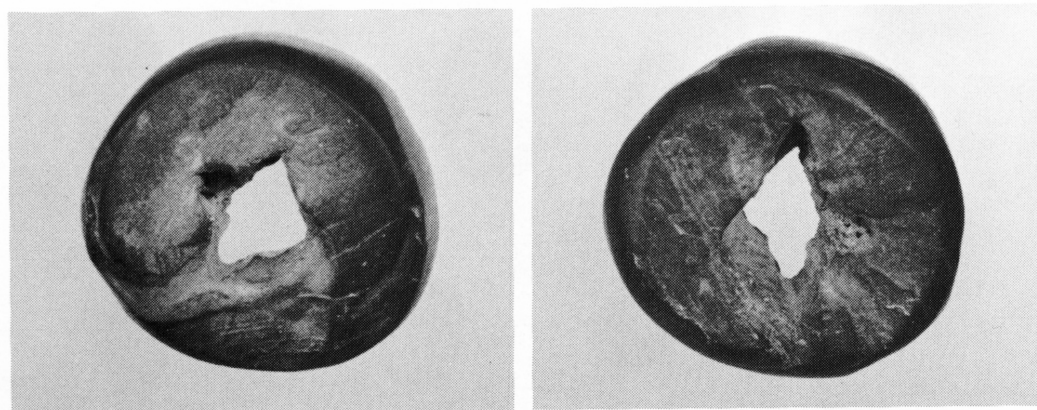
1. 加工品 I (419~424)



2. V類土器 (97・98)



3. 加工品 II (425・426)



4. 加工品 III (427)